

審査意見への対応を記載した書類（6月）

目次

現代システム科学域（共通）

No.

審査意見

ページ

【設置の趣旨・目的等】

1. 【全体計画審査意見1の回答について】

全体的な定義の修正において「持続可能な社会」に改めたはずの「サステイナブルな社会」という文言が散見されるため、書類全体を改めて見直し、適切に改めること。

（是正事項）

5

2. 【全体計画審査意見1の回答について】

現代システム科学域が、異なる4つの専攻分野の学類で構成されることの妥当性について、以下の点を踏まえ、改めて説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

（改善事項）

(1) 現代システム科学域は、「持続可能な社会の実現に貢献できる人材」の育成を掲げるなど、社会との繋がりを重視していると見受けられる一方で、今回、4つの学類の学位または学科の分野等を再度整理した際、例えば、環境社会システム学類では法学関係、社会学・社会福祉学関係を削除しているが、その理由が不明なため、整理の考え方を具体的かつ明確に説明すること。

8

(2) 4つの学類の特徴を示している表において、「主な対象とするシステム」として、心理学類では情報システム、人間システムが掲げられているが、社会システムが入っていない理由が不明なため、その理由を説明するか、必要に応じて改めること。また、表は4つの学類の差異を示すために主なシステムに限定していることは理解する一方で、表を見る側が誤解しないよう、実際は各学類においてより多くのシステムが関わっている旨が明確になるよう修正することが望ましい。

11

3. 【全体計画審査意見3の回答について】

「それぞれの学類が養成を目指す人材像と、ベースとなる学問分野の教育アプローチを理解させるとともに、それら全体を複眼的に見る」ことによって「『領域横断的応用力』を身につける」とあるが、依然として4つの学類がどう関係して「領域横断的」となっているのか不明なため、4つの学類と領域横断の関係性の有無を含め、具体的に説明すること。

（是正事項）

13

【教育課程等】

4. 【全体計画審査意見 10 の回答について】

未来デザインコース（FDC）について、以下の点を明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

（是正事項）

- (1) 未来デザインコース（FDC）の卒業要件単位数が、FDC に所属しない学生と比較して 6 単位多いことについての考え方が依然として不明である。また、審査意見に対応し、FDC 固有の必修科目として、新たに「未来デザインインターンシップ」「未来デザイン計画演習」「未来デザイン PBL 演習」が設定され、FDC の教育課程の実質的な内容が明確化された一方で、学生にとって教育課程の履修上の負担が増えていると見受けられる。そのため、FDC に所属しない学生と比較して卒業要件単位数が 6 単位多いことについての考え方を具体的に説明するとともに、履修上の負担や教育効果の観点で問題がないか明確にすること。

17

- (2) 未来デザインコース（FDC）の学生に対しては、学域教育運営委員会の中に設置された未来デザイン支援WGやメンター教員によるフォローアップが行われるなど指導体制については一定程度明らかになったものの、FDC の学生に対する就職までを見据えた履修指導に関する最終的な責任の所在が不明であるため、明確にすること。また、本WGはメンターの配置など運営側の支援を主とする組織なのか、学生の履修指導を主とする組織なのか不明確なため、学生が FDC での学びを円滑に行えるような組織的な支援をどのように行うのか、具体的に説明すること。

25

- (3) 未来デザインコース（FDC）は、入学後、未来デザイン計画を提出した者の中から 15 名程度の学生に履修を認めることとしている計画であることから、その選考方法や想定人数について、誤解がないよう志願者に対し事前に周知を行うこと。

29

5. 【全体計画審査意見 14 の回答について】

(1) 示されたカリキュラムマップを見ると、ディプロマ・ポリシーに掲げる事項に対応する必修科目がそれぞれ一科目から複数科目までと偏りがあるように見受けられ、依然としてディプロマ・ポリシーに掲げる資質・能力が担保される教育課程になっているのか不明確である。カリキュラムマップに基づき、改めて妥当性を明確に説明するか、必要に応じて修正すること。

(是正事項)

30

(2) 「各学類とも、単一の学問分野を追求するのではなく、学際的な学びから学年進行とともに・・・専門的な学びへと移行する履修設定」となっており、「その専門分野は学生自身が選択できるような教育プログラムとしている」こと等を理由として、「学生が履修するに当たり混乱しないようカリキュラム・ポリシーに科目を例示することをやめ」と説明されているが、カリキュラム・ポリシーの明確化の観点から、少なくとも必修科目などコアとなる科目については可能な限り授業科目名を明記するよう適切に改めること。

(改善事項)

33

6. 【全体計画審査意見 17 の回答について】

新たに配置された、「情報システムとサステイナビリティ」「自然システムとサステイナビリティ」「社会システムとサステイナビリティ」「人間システムとサステイナビリティ」の4科目については、それぞれの第15回目で、「システム間の相互作用を理解するために、4つの授業の担当教員が相互乗り入れし、対談形式で解説する部分を設ける」とあるが、4つのシステムに関する予備知識がない学生が対談を聴講することで得られる教育効果が必ずしも明確ではないため、学生にシステム間の相互作用を理解・定着させるための方策を具体的に説明すること。

(改善事項)

52

7. 【全体計画審査意見 21 の回答について】

PBL プログラムごとの科目や単位数を示した資料「PBL プログラム履修課程」について、当該資料だけでは履修方法が不明確であることから、学生が履修の方法を理解できるよう説明を加えること。また、「入学時に行う履修ガイダンスで『PBL プログラム履修ガイド』を基に周知する」とあるが、学生が履修方法について誤解しないよう、当該ガイダンス以外に講じる措置があれば説明すること。

(改善事項)

63

8.	【全体計画審査意見 22 の回答について】 シラバスの修正内容が明示されておらず、内容が確認できないため、再度、修正したシラバスを示した上で説明すること。	(是正事項)	78
9.	【全体計画審査意見 25 の回答について】 審査意見を受けて、「入学時の文理を問わず、数学、統計学、化学、生物学、英語、初習外国語にそれぞれ必修科目を設け」との記載について、化学と生物学は記載ミスのため記載を修正するとの説明があるが、設置の趣旨等を記載した書類における記載が修正されていないため、適切に改めること。	(是正事項)	86
【入学者選抜】			
10.	【全体計画審査意見 27 の回答について】 アドミッション・ポリシーで掲げていた「サステイナビリティ指向性」を「現代社会の諸問題に対する関心を有する人」に改め、入学者選抜の区分ごとに面接や志望理由書等により評価することとしているが、どのようにして客観的な評価を行うのか不明確なため、明確に説明すること。	(改善事項)	87
【人材需要の社会的動向・学生確保の見通し】			
11.	【全体計画審査意見 32 の回答について】 就職支援の方策について、「就職担当教員と、大学のキャリアサポート組織との連携を構築・強化していく」との説明がなされているが、具体的にどのような方策を講じるのか不明なため、より詳細に説明すること。	(改善事項)	93
【書類不備】(その他)			
	誤記や不備に伴う修正		96

審査意見への対応を記載した書類（6月）

（是正事項）現代システム科学域（共通）

1. 【全体計画審査意見1の回答について】

全体的な定義の修正において「持続可能な社会」に改めたはずの「サステイナブルな社会」という文言が散見されるため、書類全体を改めて見直し、適切に改めること。

（対応）

御指摘のとおり、「サステイナブルな社会」については「持続可能な社会」に改めることとしていたが、「設置の趣旨等を記載した書類」に「サステイナブルな社会」の記載が残っていたため「持続可能な社会」に修正する。

（新旧対照表）現代システム科学域 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
（設置趣旨（本文）-5、6 ページ） 1 設置の趣旨及び必要性 ア 学部等設置の理由及び必要性 （略） （2）学域設置に至る経緯 大学の前身の一つである大阪府立大学では、2012 年度に学士課程を従来の 7 つの学部から 4 つの学域へと再編した。4 つの学域の一つにあたる現代システム科学域は、持続可能な社会の実現に貢献できる人材の育成を目的とし、従来の人間社会学部人間科学科・言語文化学科および経済学部を中心に、7 つの学部すべてから教員を配置し学際型の教育を開始した。 （略） 現代システム科学域では、マネジメント学類で行われていた学問分野のうち、持続可能な社会に必要となる政策科学系の学びを、大阪府立大学の環境システム学類から再編される本学域の環境社会システム学類の中に位置づけ、社会システム部分の教育を強化する。同時に、環境システム学類に含まれていた心理系の学びをヒトの心理面から持続可能な社会の在り方をより総合的	（設置趣旨（本文）-5、6 ページ） 1 設置の趣旨及び必要性 ア 学部等設置の理由及び必要性 （略） （2）学域設置に至る経緯 大学の前身の一つである大阪府立大学では、2012 年度に学士課程を従来の 7 つの学部から 4 つの学域へと再編した。4 つの学域の一つにあたる現代システム科学域は、<u>サステイナブルな社会</u>の実現に貢献できる人材の育成を目的とし、従来の人間社会学部人間科学科・言語文化学科および経済学部を中心に、7 つの学部すべてから教員を配置し学際型の教育を開始した。 （略） 現代システム科学域では、マネジメント学類で行われていた学問分野のうち、<u>サステイナブルな社会</u>に必要となる政策科学系の学びを、大阪府立大学の環境システム学類から再編される本学域の環境社会システム学類の中に位置づけ、社会システム部分の教育を強化する。同時に、環境システム学類に含まれていた心理系の学びをヒトの心理面から<u>サステイナブルな社会</u>の在り方を

に学ぶ体制に強化することで心理学類を設置する。

(略)

さらに、持続可能な社会の実現にとって必要な情報系の学びについては、引き続き知識情報システム学類で担当し、そこにマネジメント学類で行われていた生産システム系の学びを加える。

(略)

(設置趣旨 (本文) -20 ページ)

2 学部・学科等の特色

[現代システム科学域]

大阪市立大学と大阪府立大学の統合により、学士課程には本学域のほか 11 学部が設置される。学問分野志向で構成される他の学部と異なり、唯一の学域となる本学域の最大の特色は、持続可能な社会の実現に貢献するという目的志向で構成されることにある。社会的背景で述べたように、持続可能な社会を実現するためには、幅広い学問分野の知識が必要であり、その学びの構成は必然的に学際的 (interdisciplinary) となる。

(略)

(設置趣旨 (本文) -22 ページ)

(略)

[心理学類]

(略)

すなわち、心理学類の特色は、心理学を総合的に学ぶことに加えて、自然科学、人文・社会科学、そして情報学の関連学問領域を融合的に学ぶことを通して、ヒトの視点に立った持続可能な社会のあり方を学ぶことにある。

より総合的に学ぶ体制に強化することで心理学類を設置する。

(略)

さらに、サステイナブルな社会の実現にとって必要な情報系の学びについては、引き続き知識情報システム学類で担当し、そこにマネジメント学類で行われていた生産システム系の学びを加える。

(略)

(設置趣旨 (本文) -20 ページ)

2 学部・学科等の特色

[現代システム科学域]

大阪市立大学と大阪府立大学の統合により、学士課程には本学域のほか 11 学部が設置される。学問分野志向で構成される他の学部と異なり、唯一の学域となる本学域の最大の特色は、サステイナブルな社会の実現に貢献するという目的志向で構成されることにある。社会的背景で述べたように、サステイナブルな社会を実現するためには、幅広い学問分野の知識が必要であり、その学びの構成は必然的に学際的 (interdisciplinary) となる。

(略)

(設置趣旨 (本文) -22 ページ)

(略)

[心理学類]

(略)

すなわち、心理学類の特色は、心理学を総合的に学ぶことに加えて、自然科学、人文・社会科学、そして情報学の関連学問領域を融合的に学ぶことを通して、ヒトの視点に立ったサステイナブルな社会のあり方を学ぶことにある。

(設置趣旨 (本文) -26 ページ) 3 学部・学科等の名称及び学位の名称 イ 学位の名称及び当該名称とする理由 【学位の名称および当該名称とする理由】 (略) [心理学類] (略) また FDC については、他学類の専門科目をカリキュラムに組み込み、総合的な観点から持続可能な社会の実現に貢献できる人材の育成を目標とするため、学士 (学術) がふさわしい。 (設置趣旨 (本文) -36 ページ) 4 教育課程の編成の考え方及び特色 イ 教育課程の概要及び特色 (略) 【システムとサステナビリティ科目群の構成】 情報システムとサステナビリティ 第 2 回～第 14 回 ・データサイエンスを活用した持続可能な社会 (略) (設置趣旨 (本文) -48 ページ) 5 教員組織の編成の考え方及び特色 イ 教員組織編成の特色 持続可能な社会を実現するためには、幅広い学問分野の知識が必要であり、その学びの構成は必然的に学際的 (interdisciplinary) となる。 (略) ※上記同様に、カリキュラムマップの【設置の趣旨及び必要性】についても、「サステイナブルな社会」を「持続可能な社会」に修正する。	(設置趣旨 (本文) -26 ページ) 3 学部・学科等の名称及び学位の名称 イ 学位の名称及び当該名称とする理由 【学位の名称および当該名称とする理由】 (略) [心理学類] (略) また FDC については、他学類の専門科目をカリキュラムに組み込み、総合的な観点からサステイナブルな社会の実現に貢献できる人材の育成を目標とするため、学士 (学術) がふさわしい。 (設置趣旨 (本文) -36 ページ) 4 教育課程の編成の考え方及び特色 イ 教育課程の概要及び特色 (略) 【システムとサステナビリティ科目群の構成】 情報システムとサステナビリティ 第 2 回～第 14 回 ・データサイエンスを活用したサステイナブルな社会 (略) (設置趣旨 (本文) -45 ページ) 5 教員組織の編成の考え方及び特色 イ 教員組織編成の特色 サステイナブルな社会を実現するためには、幅広い学問分野の知識が必要であり、その学びの構成は必然的に学際的 (interdisciplinary) となる。 (略)
---	---

(改善事項) 現代システム科学域 (共通)

2. 【全体計画審査意見1の回答について】

現代システム科学域が、異なる4つの専攻分野の学類で構成されることの妥当性について、以下の点を踏まえ、改めて説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

- (1) 現代システム科学域は、「持続可能な社会の実現に貢献できる人材」の育成を掲げるなど、社会との繋がりを重視していると見受けられる一方で、今回、4つの学類の学位または学科の分野等を再度整理した際、例えば、環境社会システム学類では法学関係、社会学・社会福祉学関係を削除しているが、その理由が不明なため、整理の考え方を具体的かつ明確に説明すること。
- (2) 4つの学類の特徴を示している表において、「主な対象とするシステム」として、心理学類では情報システム、人間システムが掲げられているが、社会システムが入っていない理由が不明なため、その理由を説明するか、必要に応じて改めること。また、表は4つの学類の差異を示すために主なシステムに限定していることは理解する一方で、表を見る側が誤解しないよう、実際は各学類においてより多くのシステムが関わっている旨が明確になるよう修正することが望ましい。

(1)

(対応)

当初の設置申請時には、当該学類の教育課程において、学類自体が学際的な教育を行っていることを明示する目的で、少しでも関連がある学問分野があればその分野を記載する方針で学位又は学科の分野を記載していたが、2020年12月の全体計画審査における意見の中に、次の御指摘があった。

(是正事項) 現代システム科学域 知識情報システム学類

1. 現代システム科学域知識情報システム学類が研究対象とする中心的な学問分野として、「情報学、社会科学、知識科学、生産科学、医療保健学」と説明されている。また、学位又は学科の分野は、「工学関係、理学関係、経済学関係、保健衛生学（看護学及びリハビリテーション学関係を除く。）」とされているが、教育課程、教員組織、学位の専攻分野の名称をみても、例えば、「経済学」や「医療保健学」や「保健衛生学（看護学及びリハビリテーション学関係を除く。）」と位置付ける妥当性が不明確である。このため、当該学類の学問分野等の位置付けについて、教育課程、教員組織、学位の専攻分野との整合性を示した上で妥当性を明確にするか、適切に修正すること。

(是正事項) 現代システム科学域 心理学類

2. 現代システム科学域心理学類が研究対象とする中心的な学問分野として、「心理学、臨床心理学、建築環境工学、情報工学」と説明されている。また、学位又は学科の分野は、「文学関係、工学関係」とされているが、教育課程、教員組織、学位の専攻分野の名称をみても、「工学関係」に位置付ける妥当性が不明確である。また、教育課

程をみても「建築環境工学」にふさわしい授業科目は見受けられないなど、「工学関係」の授業科目としても十分なものとなっていないと考えられる。このため、当該学類の学問分野等の位置付けについて、教育課程、教員組織、学位の専攻分野との整合性を示した上で妥当性を明確にするか、適切に修正すること。なお、心理学類において、「工学関係」を研究対象としようとする意義、必要性について、養成する人材像との関係で明確にすること。

これらの審査意見への対応として、必ずしも中心的な学問分野ではなく、関連分野に位置付けられている分野や学問分野として併記していた分野については削除することとし、知識情報システム学類では、「経済学関係」、「保健衛生学関係（看護学関係及びリハビリテーション学関係を除く。）」を削除し、心理学類においては、「工学関係」を削除した。これを受けて、環境社会システム学類においても学位又は学科の分野の絞り込みが必要と考え、他の分野に比べ授業科目数が比較的少ない理学関係と法学関係、授業科目を置いていない「社会福祉学」の名称がついている「社会学・社会福祉学関係」を削除することとした。

しかし、御指摘を受けて再考した結果、「法学」については、第一次専門審査における意見の現代システム科学域環境社会システム学類 No. 4 (P40) でも示しているように、環境社会システム学類の 3 つの教育研究分野のうちの環境哲学・政策学において、国内外の環境法の正確な理解の上に立ち、環境政策の提言を行えるような学生を育成し、社会に送り出すために必要な分野であることから、「学士（環境社会システム学）」の分野の一つとして「法学関係」を位置付けるべきと改めて判断した。このような考えの下、環境社会システム学類の教育課程のうち法学分野の授業科目については、第一次専門審査における意見の現代システム科学域環境社会システム学類 No. 4 (P40) 及び No. 6 (P67) の意見を踏まえ、「行政活動と法」を新設した上で、学類基盤科目に基礎科目として「経済活動と法」「行政活動と法」を、学類専門科目に「国際法と共生社会」「環境法 1」「環境法 2」をそれぞれ設置し、基礎から応用に至るカリキュラム構成とした。なお、法学の授業科目については、全体計画審査における意見の対応に伴い、学類基盤科目に「経済活動と法」、学類専門科目に「環境法 1」、「環境法 2」、「国際政治学」、更には前述のとおり学類基盤科目に「行政活動と法」の 5 科目を新設又は刷新しており、法学分野として十分な授業科目を体系的に配置している。

また、「社会福祉学」の名称があるとして削除していた「社会学・社会福祉学」については、「社会学」の授業科目を学類基盤科目、学類専門科目に配置しており、環境社会システム学類の 3 つの教育研究分野のうちの社会環境学において、社会システムの様態を理解することで、現代における問題点を発見し、その解決を目指すために必要な分野であることから、「学士（環境社会システム学）」の分野の一つとして「社会学・社会福祉学関係」を位置付けるべきと改めて判断した。環境社会システム学類の教育課程のうち社会学分野の授業科目は、学類基盤科目に「社会学基礎」を、学類専門科目に「環境社会学」「文化の社会学」「共生社会とアイデンティティ」「社会調査論」をそれぞれ配置し、基礎から応用に至るカリキュラム構成としている。

なお「理学関係」については、環境社会システム学類の 3 つの教育研究分野のうちの自然環境学において、地球システムを学ぶ工学関係科目の学修を補う分野として位置付けており、基礎から応用というカリキュラム構成となっていないことから、削除したままとする。

(学位又は学科の分野)

学類	第1次専門審査における意見の対応	設置認可申請時
知識情報システム学類	工学関係、理学関係	工学関係、理学関係、 <u>経済学関係、保健衛生学関係（看護学関係及びリハビリテーション学関係を除く。）</u>
環境社会システム学類	文学関係、 <u>法学関係</u> 、経済学関係、 <u>社会学・社会福祉学関係</u> 、工学関係、農学関係	文学関係、 <u>法学関係</u> 、経済学関係、 <u>社会学・社会福祉学関係</u> 、 <u>理学関係</u> 、工学関係、農学関係
教育福祉学類	教育学・保育学関係、社会学・社会福祉学関係	教育学・保育学関係、社会学・社会福祉学関係
心理学類	文学関係	文学関係、 <u>工学関係</u>

※下線は「全体計画審査における対応」により削除した学位又は学科の分野

※朱書きは「第1次専門審査における意見」の対応により戻した学位又は学科の分野

(新旧対照表) 現代システム科学域 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧																
(設置趣旨 (本文) -8 ページ) 1 設置の趣旨及び必要性 ア 学部等設置の理由及び必要性 (3) 学域設置の必要性 (略) 【現代システム科学域を構成する 4 学類】	(設置趣旨 (本文) -8 ページ) 1 設置の趣旨及び必要性 ア 学部等設置の理由及び必要性 (3) 学域設置の必要性 (略) 【現代システム科学域を構成する 4 学類】																
<table><tr><td>知識情報システム学類 (学生定員:60)</td><td>環境社会システム学類 (学生定員:100)</td><td>教育福祉学類 (学生定員:55)</td><td>心理学類 (学生定員:45)</td></tr><tr><td>主な教育研究分野: 情報システム学 情報通信工学 人工知能学 応用情報学 4つのシステムとの関連: *自然システム *社会システム *人間システム *情報システム 主な基礎学同分野: 情報学 人間科学 学位又は学科の分野 工学、理学 学士(情報学) 学士(学術)</td><td>主な教育研究分野: 自然環境学 社会環境学 環境工学・政策学 4つのシステムとの関連: *自然システム *社会システム *人間システム *情報システム 主な基礎学同分野: 自然科学 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 文学、法学、経済学、社会学・社会福祉学、工学、農学 学士(環境社会システム学) 学士(学術)</td><td>主な教育研究分野: 社会福祉学 教育学 ジェンダー論 4つのシステムとの関連: *自然システム *社会システム *人間システム *情報システム 主な基礎学同分野: 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 教育学・保育学、社会学・社会福祉学 学士(教育福祉学) 学士(学術)</td><td>主な教育研究分野: 認知心理学 臨床心理学 4つのシステムとの関連: *自然システム *社会システム *人間システム *情報システム 主な基礎学同分野: 人間科学 情報学 学位又は学科の分野 文学 学士(心理学) 学士(学術)</td></tr></table>	知識情報システム学類 (学生定員:60)	環境社会システム学類 (学生定員:100)	教育福祉学類 (学生定員:55)	心理学類 (学生定員:45)	主な教育研究分野: 情報システム学 情報通信工学 人工知能学 応用情報学 4つのシステムとの関連: *自然システム *社会システム *人間システム *情報システム 主な基礎学同分野: 情報学 人間科学 学位又は学科の分野 工学、理学 学士(情報学) 学士(学術)	主な教育研究分野: 自然環境学 社会環境学 環境工学・政策学 4つのシステムとの関連: *自然システム *社会システム *人間システム *情報システム 主な基礎学同分野: 自然科学 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 文学、法学、経済学、社会学・社会福祉学、工学、農学 学士(環境社会システム学) 学士(学術)	主な教育研究分野: 社会福祉学 教育学 ジェンダー論 4つのシステムとの関連: *自然システム *社会システム *人間システム *情報システム 主な基礎学同分野: 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 教育学・保育学、社会学・社会福祉学 学士(教育福祉学) 学士(学術)	主な教育研究分野: 認知心理学 臨床心理学 4つのシステムとの関連: *自然システム *社会システム *人間システム *情報システム 主な基礎学同分野: 人間科学 情報学 学位又は学科の分野 文学 学士(心理学) 学士(学術)	<table><tr><td>知識情報システム学類 (学生定員:60)</td><td>環境社会システム学類 (学生定員:100)</td><td>教育福祉学類 (学生定員:55)</td><td>心理学類 (学生定員:45)</td></tr><tr><td>主な教育研究分野: 情報システム学 情報通信工学 人工知能学 応用情報学 主な対象とするシステム: 情報システム 社会システム 人間システム 主な基礎学同分野: 情報学 人間科学 学位又は学科の分野 工学、理学 学士(情報学) 学士(学術)</td><td>主な教育研究分野: 自然環境学 社会環境学 環境共生学 主な対象とするシステム: 自然システム 社会システム 人間システム 主な基礎学同分野: 自然科学 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 文学、経済学、工学、農学 学士(環境社会システム学) 学士(学術)</td><td>主な教育研究分野: 社会福祉学 教育学 ジェンダー論 主な対象とするシステム: 社会システム 人間システム 主な基礎学同分野: 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 教育学・保育学、社会学・社会福祉学 学士(教育福祉学) 学士(学術)</td><td>主な教育研究分野: 認知心理学 社会・環境心理学 臨床心理学 主な対象とするシステム: 情報システム 人間システム 主な基礎学同分野: 人間科学 情報学 学位又は学科の分野 文学 学士(心理学) 学士(学術)</td></tr></table>	知識情報システム学類 (学生定員:60)	環境社会システム学類 (学生定員:100)	教育福祉学類 (学生定員:55)	心理学類 (学生定員:45)	主な教育研究分野: 情報システム学 情報通信工学 人工知能学 応用情報学 主な対象とするシステム: 情報システム 社会システム 人間システム 主な基礎学同分野: 情報学 人間科学 学位又は学科の分野 工学、理学 学士(情報学) 学士(学術)	主な教育研究分野: 自然環境学 社会環境学 環境共生学 主な対象とするシステム: 自然システム 社会システム 人間システム 主な基礎学同分野: 自然科学 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 文学、経済学、工学、農学 学士(環境社会システム学) 学士(学術)	主な教育研究分野: 社会福祉学 教育学 ジェンダー論 主な対象とするシステム: 社会システム 人間システム 主な基礎学同分野: 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 教育学・保育学、社会学・社会福祉学 学士(教育福祉学) 学士(学術)	主な教育研究分野: 認知心理学 社会・環境心理学 臨床心理学 主な対象とするシステム: 情報システム 人間システム 主な基礎学同分野: 人間科学 情報学 学位又は学科の分野 文学 学士(心理学) 学士(学術)
知識情報システム学類 (学生定員:60)	環境社会システム学類 (学生定員:100)	教育福祉学類 (学生定員:55)	心理学類 (学生定員:45)														
主な教育研究分野: 情報システム学 情報通信工学 人工知能学 応用情報学 4つのシステムとの関連: *自然システム *社会システム *人間システム *情報システム 主な基礎学同分野: 情報学 人間科学 学位又は学科の分野 工学、理学 学士(情報学) 学士(学術)	主な教育研究分野: 自然環境学 社会環境学 環境工学・政策学 4つのシステムとの関連: *自然システム *社会システム *人間システム *情報システム 主な基礎学同分野: 自然科学 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 文学、法学、経済学、社会学・社会福祉学、工学、農学 学士(環境社会システム学) 学士(学術)	主な教育研究分野: 社会福祉学 教育学 ジェンダー論 4つのシステムとの関連: *自然システム *社会システム *人間システム *情報システム 主な基礎学同分野: 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 教育学・保育学、社会学・社会福祉学 学士(教育福祉学) 学士(学術)	主な教育研究分野: 認知心理学 臨床心理学 4つのシステムとの関連: *自然システム *社会システム *人間システム *情報システム 主な基礎学同分野: 人間科学 情報学 学位又は学科の分野 文学 学士(心理学) 学士(学術)														
知識情報システム学類 (学生定員:60)	環境社会システム学類 (学生定員:100)	教育福祉学類 (学生定員:55)	心理学類 (学生定員:45)														
主な教育研究分野: 情報システム学 情報通信工学 人工知能学 応用情報学 主な対象とするシステム: 情報システム 社会システム 人間システム 主な基礎学同分野: 情報学 人間科学 学位又は学科の分野 工学、理学 学士(情報学) 学士(学術)	主な教育研究分野: 自然環境学 社会環境学 環境共生学 主な対象とするシステム: 自然システム 社会システム 人間システム 主な基礎学同分野: 自然科学 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 文学、経済学、工学、農学 学士(環境社会システム学) 学士(学術)	主な教育研究分野: 社会福祉学 教育学 ジェンダー論 主な対象とするシステム: 社会システム 人間システム 主な基礎学同分野: 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 教育学・保育学、社会学・社会福祉学 学士(教育福祉学) 学士(学術)	主な教育研究分野: 認知心理学 社会・環境心理学 臨床心理学 主な対象とするシステム: 情報システム 人間システム 主な基礎学同分野: 人間科学 情報学 学位又は学科の分野 文学 学士(心理学) 学士(学術)														

(新旧対照表) 現代システム科学域 環境社会システム学類 教育課程等の概要

新	旧
((再補正後) 教育課程-6、8、14 ページ) 学位又は学科の分野 文学関係、<u>法学関係</u>、経済学関係、<u>社会学・社会福祉学関係</u>、工学関係、農学関係	((再補正前) 教育課程-6、8、14 ページ) 学位又は学科の分野 文学関係、経済学関係、工学関係、農学関係

(2)

(対応)

御指摘の表【現代システム科学域を構成する4学類】には「主な対象とするシステム」を記載しているため、心理学類に社会システムを含めていなかったが、心理学類には社会心理学の専任教員1名が配置され、社会システムに関する教育研究を行うため、社会システムを記載することとした。また、表下の[心理学類]の説明文中に、社会システムを付加する。

加えて、表において各学類と4つのシステムの関わりを明確にするために、各学類について4つのシステムを全て記載し、学類の教育との関連の程度を段階的に示す形式に改める。

◎は各学類が特に重視するシステム、○は各学類が主に扱うシステム、*は各学類と部分的に関連するシステムである。

【現代システム科学域を構成する4学類】

- 凡例 ◎ 各学類が特に重視するシステム
○ 各学類が主に扱うシステム
* 各学類が部分的に関連するシステム

知識情報システム学類

4つのシステムとの関連：

- * 自然システム
- 社会システム
- 人間システム
- ◎ 情報システム

環境社会システム学類

4つのシステムとの関連：

- ◎ 自然システム
- ◎ 社会システム
- 人間システム
- * 情報システム

教育福祉学類

4つのシステムとの関連：

- * 自然システム
- ◎ 社会システム
- ◎ 人間システム
- * 情報システム

心理学類

4つのシステムとの関連：

- * 自然システム
- 社会システム
- ◎ 人間システム
- 情報システム

知識情報システム学類 (学生定員:60)	環境社会システム学類 (学生定員:100)	教育福祉学類 (学生定員:55)	心理学類 (学生定員:45)
主な教育研究分野: 情報システム学 情報通信工学 人工知能学 応用情報学 4つのシステムとの関連: * 自然システム ○ 社会システム ○ 人間システム ◎ 情報システム 主な基礎学問分野: 情報学 人間科学 学位又は学科の分野 工学、理学	主な教育研究分野: 自然環境学 社会環境学 環境哲学・政策学 4つのシステムとの関連: ◎ 自然システム ◎ 社会システム ○ 人間システム * 情報システム 主な基礎学問分野: 自然科学 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 文学、法学、経済学、 社会学・社会福祉学、 工学、農学	主な教育研究分野: 社会福祉学 保育学 教育学 ジェンダー論 4つのシステムとの関連: * 自然システム ◎ 社会システム ◎ 人間システム * 情報システム 主な基礎学問分野: 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 教育学・保育学、 社会学・社会福祉学	主な教育研究分野: 実験心理学 臨床心理学 4つのシステムとの関連: * 自然システム ○ 社会システム ◎ 人間システム ○ 情報システム 主な基礎学問分野: 人間科学 情報学 学位又は学科の分野 文学
学士(情報学) 学士(学術)	学士(環境社会システム学) 学士(学術)	学士(教育福祉学) 学士(学術)	学士(心理学) 学士(学術)

(新旧対照表) 現代システム科学域 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧																								
(設置趣旨 (本文) -8 ページ) 1 設置の趣旨及び必要性 ア 学部等設置の理由及び必要性 (3) 学域設置の必要性 (略) 【現代システム科学域を構成する 4 学類】	(設置趣旨 (本文) -8 ページ) 1 設置の趣旨及び必要性 ア 学部等設置の理由及び必要性 (3) 学域設置の必要性 (略) 【現代システム科学域を構成する 4 学類】																								
<table><tr><th>知識情報システム学類 (学生定員:60)</th><th>環境社会システム学類 (学生定員:100)</th><th>教育福祉学類 (学生定員:55)</th><th>心理学類 (学生定員:45)</th></tr><tr><td>主な教育研究分野: 情報システム学 情報通信工学 人工知能学 応用情報学 4つのシステムとの関連: * 自然システム ○ 社会システム ○ 人間システム ◎ 情報システム 主な基礎学問分野: 情報学 人間科学 学位又は学科の分野 工学、理学</td><td>主な教育研究分野: 自然環境学 社会環境学 環境哲学・政策学 4つのシステムとの関連: ◎ 自然システム ◎ 社会システム ○ 人間システム * 情報システム 主な基礎学問分野: 自然科学 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 文学、法学、経済学、 社会学・社会福祉学、 工学、農学</td><td>主な教育研究分野: 社会福祉学 保育学 教育学 ジェンダー論 4つのシステムとの関連: * 自然システム ◎ 社会システム ◎ 人間システム * 情報システム 主な基礎学問分野: 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 教育学・保育学 社会学・社会福祉学</td><td>主な教育研究分野: 実験心理学 臨床心理学 4つのシステムとの関連: * 自然システム ○ 社会システム ◎ 人間システム ○ 情報システム 主な基礎学問分野: 人間科学 情報学 学位又は学科の分野 文学</td></tr><tr><td>学士(情報学) 学士(学術)</td><td>学士(環境社会システム学) 学士(学術)</td><td>学士(教育福祉学) 学士(学術)</td><td>学士(心理学) 学士(学術)</td></tr></table>	知識情報システム学類 (学生定員:60)	環境社会システム学類 (学生定員:100)	教育福祉学類 (学生定員:55)	心理学類 (学生定員:45)	主な教育研究分野: 情報システム学 情報通信工学 人工知能学 応用情報学 4つのシステムとの関連: * 自然システム ○ 社会システム ○ 人間システム ◎ 情報システム 主な基礎学問分野: 情報学 人間科学 学位又は学科の分野 工学、理学	主な教育研究分野: 自然環境学 社会環境学 環境哲学・政策学 4つのシステムとの関連: ◎ 自然システム ◎ 社会システム ○ 人間システム * 情報システム 主な基礎学問分野: 自然科学 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 文学、法学、経済学、 社会学・社会福祉学、 工学、農学	主な教育研究分野: 社会福祉学 保育学 教育学 ジェンダー論 4つのシステムとの関連: * 自然システム ◎ 社会システム ◎ 人間システム * 情報システム 主な基礎学問分野: 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 教育学・保育学 社会学・社会福祉学	主な教育研究分野: 実験心理学 臨床心理学 4つのシステムとの関連: * 自然システム ○ 社会システム ◎ 人間システム ○ 情報システム 主な基礎学問分野: 人間科学 情報学 学位又は学科の分野 文学	学士(情報学) 学士(学術)	学士(環境社会システム学) 学士(学術)	学士(教育福祉学) 学士(学術)	学士(心理学) 学士(学術)	<table><tr><th>知識情報システム学類 (学生定員:60)</th><th>環境社会システム学類 (学生定員:100)</th><th>教育福祉学類 (学生定員:55)</th><th>心理学類 (学生定員:45)</th></tr><tr><td>主な教育研究分野: 情報システム学 情報通信工学 人工知能学 応用情報学 主な対象とするシステム: 情報システム 社会システム 人間システム 主な基礎学問分野: 情報学 人間科学 学位又は学科の分野 工学、理学</td><td>主な教育研究分野: 自然環境学 社会環境学 環境共生学 主な対象とするシステム: 自然システム 社会システム 人間システム 主な基礎学問分野: 自然科学 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 文学、経済学、 工学、農学</td><td>主な教育研究分野: 社会福祉学 保育学 教育学 ジェンダー論 主な対象とするシステム: 社会システム 人間システム 主な基礎学問分野: 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 教育学・保育学 社会学・社会福祉学</td><td>主な教育研究分野: 認知科学 社会・環境心理学 臨床心理学 主な対象とするシステム: 情報システム 人間システム 主な基礎学問分野: 人間科学 情報学 学位又は学科の分野 文学</td></tr><tr><td>学士(情報学) 学士(学術)</td><td>学士(環境社会システム学) 学士(学術)</td><td>学士(教育福祉学) 学士(学術)</td><td>学士(心理学) 学士(学術)</td></tr></table>	知識情報システム学類 (学生定員:60)	環境社会システム学類 (学生定員:100)	教育福祉学類 (学生定員:55)	心理学類 (学生定員:45)	主な教育研究分野: 情報システム学 情報通信工学 人工知能学 応用情報学 主な対象とするシステム: 情報システム 社会システム 人間システム 主な基礎学問分野: 情報学 人間科学 学位又は学科の分野 工学、理学	主な教育研究分野: 自然環境学 社会環境学 環境共生学 主な対象とするシステム: 自然システム 社会システム 人間システム 主な基礎学問分野: 自然科学 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 文学、経済学、 工学、農学	主な教育研究分野: 社会福祉学 保育学 教育学 ジェンダー論 主な対象とするシステム: 社会システム 人間システム 主な基礎学問分野: 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 教育学・保育学 社会学・社会福祉学	主な教育研究分野: 認知科学 社会・環境心理学 臨床心理学 主な対象とするシステム: 情報システム 人間システム 主な基礎学問分野: 人間科学 情報学 学位又は学科の分野 文学	学士(情報学) 学士(学術)	学士(環境社会システム学) 学士(学術)	学士(教育福祉学) 学士(学術)	学士(心理学) 学士(学術)
知識情報システム学類 (学生定員:60)	環境社会システム学類 (学生定員:100)	教育福祉学類 (学生定員:55)	心理学類 (学生定員:45)																						
主な教育研究分野: 情報システム学 情報通信工学 人工知能学 応用情報学 4つのシステムとの関連: * 自然システム ○ 社会システム ○ 人間システム ◎ 情報システム 主な基礎学問分野: 情報学 人間科学 学位又は学科の分野 工学、理学	主な教育研究分野: 自然環境学 社会環境学 環境哲学・政策学 4つのシステムとの関連: ◎ 自然システム ◎ 社会システム ○ 人間システム * 情報システム 主な基礎学問分野: 自然科学 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 文学、法学、経済学、 社会学・社会福祉学、 工学、農学	主な教育研究分野: 社会福祉学 保育学 教育学 ジェンダー論 4つのシステムとの関連: * 自然システム ◎ 社会システム ◎ 人間システム * 情報システム 主な基礎学問分野: 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 教育学・保育学 社会学・社会福祉学	主な教育研究分野: 実験心理学 臨床心理学 4つのシステムとの関連: * 自然システム ○ 社会システム ◎ 人間システム ○ 情報システム 主な基礎学問分野: 人間科学 情報学 学位又は学科の分野 文学																						
学士(情報学) 学士(学術)	学士(環境社会システム学) 学士(学術)	学士(教育福祉学) 学士(学術)	学士(心理学) 学士(学術)																						
知識情報システム学類 (学生定員:60)	環境社会システム学類 (学生定員:100)	教育福祉学類 (学生定員:55)	心理学類 (学生定員:45)																						
主な教育研究分野: 情報システム学 情報通信工学 人工知能学 応用情報学 主な対象とするシステム: 情報システム 社会システム 人間システム 主な基礎学問分野: 情報学 人間科学 学位又は学科の分野 工学、理学	主な教育研究分野: 自然環境学 社会環境学 環境共生学 主な対象とするシステム: 自然システム 社会システム 人間システム 主な基礎学問分野: 自然科学 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 文学、経済学、 工学、農学	主な教育研究分野: 社会福祉学 保育学 教育学 ジェンダー論 主な対象とするシステム: 社会システム 人間システム 主な基礎学問分野: 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 教育学・保育学 社会学・社会福祉学	主な教育研究分野: 認知科学 社会・環境心理学 臨床心理学 主な対象とするシステム: 情報システム 人間システム 主な基礎学問分野: 人間科学 情報学 学位又は学科の分野 文学																						
学士(情報学) 学士(学術)	学士(環境社会システム学) 学士(学術)	学士(教育福祉学) 学士(学術)	学士(心理学) 学士(学術)																						

(是正事項) 現代システム科学域 (共通)

3. 【全体計画審査意見3の回答について】

「それぞれの学類が養成を目指す人材像と、ベースとなる学問分野の教育アプローチを理解させるとともに、それら全体を複眼的に見る」ことによって『領域横断的応用力』を身につける」とあるが、依然として4つの学類がどう関係して「領域横断的」となっているのか不明なため、4つの学類と領域横断の関係性の有無を含め、具体的に説明すること。

(対応)

本学域では、「現代システム科学」を「持続不可能な現代社会を持続可能な社会に変革するための持続可能システム科学」と定義した。またこの中の「持続可能システム」は、自然システム、社会システム、人間システム、情報システムの4つのシステムから構成されると考えた。これら4つのシステムは持続可能な社会を構成する重要な要素であるが、それぞれのシステムを持続可能なものにするためには、単独の学問分野だけではなく、自然科学、人文・社会科学、人間科学、情報学を適切に組み合わせてアプローチする必要がある。このような考え方を基に、主な対象となるシステムと主な基盤学問分野の組み合わせにより、ターゲットとなる教育研究分野を整理した上で、教育研究分野の親和性と、想定される進路を見据えたカリキュラム構成の適合性を考慮して4つの学類を定めた(下表参照)。

[現代システム科学域を構成する4学類]

知識情報システム学類 (学生定員:60)	環境社会システム学類 (学生定員:100)	教育福祉学類 (学生定員:55)	心理学類 (学生定員:45)
主な教育研究分野: 情報システム学 情報通信工学 人工知能学 応用情報学 4つのシステムとの関連: * 自然システム ○ 社会システム ○ 人間システム ◎ 情報システム 主な基礎学問分野: 情報学 人間科学 学位又は学科の分野 工学、理学	主な教育研究分野: 自然環境学 社会環境学 環境哲学・政策学 4つのシステムとの関連: ◎ 自然システム ◎ 社会システム ○ 人間システム * 情報システム 主な基盤学問分野: 自然科学 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 文学、法学、経済学、 社会学・社会福祉学、 工学、農学	主な教育研究分野: 社会福祉学 保育学 教育学 ジェンダー論 4つのシステムとの関連: * 自然システム ◎ 社会システム ◎ 人間システム * 情報システム 主な基盤学問分野: 人文・社会科学 人間科学 学位又は学科の分野 教育学・保育学、 社会学・社会福祉学	主な教育研究分野: 実験心理学 臨床心理学 4つのシステムとの関連: * 自然システム ○ 社会システム ◎ 人間システム ○ 情報システム 主な基盤学問分野: 人間科学 情報学 学位又は学科の分野 文学
学士(情報学) 学士(学術)	学士(環境社会システム学) 学士(学術)	学士(教育福祉学) 学士(学術)	学士(心理学) 学士(学術)

このような「持続可能システム」の構成と各システムの概念、並びに各学類がどのようにそのシステムの構築に関わっていくかを体系的に理解させるために、初年次に4つの「システムとサステナビリティ」科目群を設置し(下表参照)、全て必修科目とした。この科目は、

上の表に示す各学類が特に重視するシステムを担う学類の教員が共同で担当することにしており、特に社会システムと人間システムについては、学類の枠を超えた学問分野が必要であることを理解させるようにしている。また、各システムの立場から4つのシステムに共通する事例を用いて講義を行うことにより、4学類で学ぶ各学問分野が領域横断的につながってこそ、持続可能システムが構築できることを学修させる。例えば、「自然システムとサステイナビリティ」におけるパンデミックの事例であれば、大気環境や水環境、生物環境などの自然システムに対する理解だけでなく、感染症抑制のための制度や経済活動とのバランスなどの社会システムに対する理解、感染者への差別や人の行動パターンなどの人間システムに対する理解、感染率や死亡率など膨大なデータを収集し分析するなどの情報システムに対する理解がすべて必要となる。このような事例を各科目の講義に入れ、各システムの立場から講義することにより、より深く領域横断的な考え方の重要性を身に付けさせる。

[システムとサステイナビリティ科目群の構成]

科目名	情報システムとサステイナビリティ	自然システムとサステイナビリティ	社会システムとサステイナビリティ	人間システムとサステイナビリティ
担当学類	知識情報システム学類	環境社会システム学類	環境社会システム学類 教育福祉学類	環境社会システム学類 教育福祉学類 心理学類
第1回	オリエンテーションの後、現代システム科学の概念、現代システムの中の情報システム・自然システム・社会システム・人間システムの位置づけと役割、システムの思考力の重要性などについて、各授業で扱うシステムの観点から、各授業の1回目で講義する。4つのシステムの関係をつかみやすくするため、各システムの立場から4つのシステムに共通する事例を用いて説明を行う（例：パンデミックとそれぞれのシステム）。事例については担当教員間で事前に打ち合わせ、各システムの特徴を説明しやすい内容を選ぶ。			
第2回 ～ 第14回	・データサイエンスを活用したサステイナブルな社会 ・安心安全な情報システムインフラ ・人工知能によるレジリエントな情報サービス	・地球の起源と歴史及び現在の地球の構造 ・大気の循環と大気に関わる環境問題 ・水の循環と海洋に関わる環境問題 ・生態系の仕組みと生態系サービス	・公平で平等な社会と哲学・思想の役割 ・慣習と文化 ・社会制度と福祉国家 ・グローバルシステムと「わたし」	・対人システムの心理的プロセス ・人と環境との心理的不適応 ・社会的規範と行為類型
第15回	情報システム・自然システム・社会システム・人間システムの観点から見た持続可能性（サステイナビリティの定義、それぞれのシステムの観点から見たサステイナビリティの意味、現代から未来へのつながりなど）について各授業の最後で解説する。システム間の相互作用を理解するために、4つの授業の担当教員が相互乗り入れし、対談形式で解説する部分を設ける。			
第16回	期末試験			

さらに3年次には、課題解決型学修を行うPBL演習を必修科目として設置している。この科目では、各学類においてある程度の専門的知識・技能を学修した学生が、学類の枠を超えて演習に参加し、それぞれの専門性を生かして一つの問題に取り組み、協働して課題解決をはかるというプロセスを通じて、領域横断的応用力を身に付けさせる。

このような学びを経験することにより、領域横断的応用力に加え、サステナビリティ志向性（現代社会の一員としての高い倫理観を有し、持続可能な社会の実現を他者と協働して目指す態度を身に付けている。）が養われる。

ここまではカリキュラムの側から4学類の領域横断性について説明した。以下では、学術領域としての領域横断性について学類ごとに説明する。

知識情報システム学類は、情報科学、知識科学、システムデザイン、システムマネジメントの融合領域を扱う。知識情報システム学類の側から見ると、他の学類が扱うフィールドは、情報通信技術によるソリューションを提供する場であり、新たな応用の可能性を探るためのデータを収集する場でもある。例えば環境社会システム学類で扱う都市環境については、ヒートアイランドの状況や人の流れに関するデータを情報通信技術を用いて収集し、地理情報システム(GIS)のデータを用いることで研究が大きく進展する。教育福祉学類で扱う高齢者福祉の現場でも、情報通信技術を用いた独居高齢者の見守りや健康管理などの研究が進んでいる。また、学校現場における支援の必要な生徒のスクリーニングなどの研究が、実際に両学類の教員によって進められている。心理学類との領域横断的研究については後述する。

環境社会システム学類は、地球環境学、生態学、環境計画学、食糧生産学などの自然環境学、歴史学、言語学、文化人類学、地理学、社会学などの社会環境学、経済学、経営学、法学、政策学、環境哲学・倫理学などの環境哲学・政策学を扱う。知識情報システム学類との領域横断的研究については上記のとおりである。例えば、教育福祉学類で扱う社会的格差の問題について考える上では、経済学、法学、政策学は言うまでもなく、歴史学、社会学などの知見を踏まえることでより深い理解に到達することができる。また、大阪府立大学におけるジェンダー研究の拠点である女性学研究センターでは、教育福祉学類だけでなく、知識情報システム学類や環境社会システム学類の教員も共同研究員として参加し、研究を進めている。心理学類で扱う心の問題も、個人の中だけにとどまるものではなく、社会環境やその背後にある自然環境（風土）と密接に関わっている。

教育福祉学類は、社会福祉学、保育学、教育学、社会学、健康科学、人権論、ジェンダー論などの融合領域を扱う。知識情報システム学類、環境社会システム学類との領域横断的研究については上記のとおりである。心理学類における臨床心理学的研究は、例えばスクールカウンセラーの養成という形で学校教育と密接に関わっている。また、発達心理学は保育学、高齢者心理学は、高齢者福祉に関する基礎的な知見を提供する。

心理学類は、実験心理学、臨床心理学、認知科学の融合領域を扱う。知識情報システム学類で扱う教育情報学は教育心理学と関連しており、タブレットPCを用いた学校現場でのデータ収集の仕組みが、両学類の教員と大学院生によって構築されている。また認知科学的研究は、知識情報システム学類における人工知能やヒューマンインターフェースの研究に対して基礎的な知見を提供することができる。環境社会システム学類、教育福祉学類との領域横断的研究については上記のとおりである。

以上のように、現代システム科学域を構成する 4 学類が扱う学術領域は相互に関連している。上記に挙げたような領域横断的研究は、異なる学部間や大学間で行われることもあるが、それを 1 つの教育組織である学域内で行うことができるような構成とすることで、学士課程の学生が領域間の関連性を学び、領域横断的応用力を身に付ける教育を実現することができる。

(新旧対照表) 現代システム科学域 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
(設置趣旨 (本文) -35 ページ) 4 教育課程の編成の考え方及び特色 イ 教育課程の概要及び特色 [現代システム科学域] (略) これら 4 つの科目については、第 1 回目に共通の教材を用いたイントロダクションを設定し、それぞれの授業科目の代表教員が現代システム科学の概念、現代システムの中の情報システム・自然システム・社会システム・人間システムの位置付けと役割、システムの思考力の重要性などについて講義する。このとき、各システムの立場から 4 つのシステムに共通する事例を用いて講義を行うことにより、4 学類で学ぶ各学問分野が領域横断的につながってこそ、持続可能システムが構築できることを学修させる。例えば、「自然システムとサステイナビリティ」におけるパンデミックの事例であれば、大気環境や水環境、生物環境などの自然システムに対する理解だけでなく、感染症抑制のための制度や経済活動とのバランスなどの社会システムに対する理解、感染者への差別や人の行動パターンなどの人間システムに対する理解、感染率や死亡率など膨大なデータを収集し分析するなどの情報システムに対する理解がすべて必要となるなどを学修させる。 (略)	(設置趣旨 (本文) -34 ページ) 4 教育課程の編成の考え方及び特色 イ 教育課程の概要及び特色 [現代システム科学域] (略) これら 4 つの科目については、第 1 回目に共通の教材を用いたイントロダクションを設定し、それぞれの授業科目の代表教員が現代システム科学の概念、現代システムの中の情報システム・自然システム・社会システム・人間システムの位置付けと役割、システムの思考力の重要性などについて講義する。 (略)

4. 【全体計画審査意見 10 の回答について】

未来デザインコース (FDC) について、以下の点を明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

- (1) 未来デザインコース (FDC) の卒業要件単位数が、FDC に所属しない学生と比較して 6 単位多いことについての考え方が依然として不明である。また、審査意見に対応し、FDC 固有の必修科目として、新たに「未来デザインインターンシップ」「未来デザイン計画演習」「未来デザイン PBL 演習」が設定され、FDC の教育課程の実質的な内容が明確化された一方で、学生にとって教育課程の履修上の負担が増えていると見受けられる。そのため、FDC に所属しない学生と比較して卒業要件単位数が 6 単位多いことについての考え方を具体的に説明するとともに、履修上の負担や教育効果の観点で問題がないか明確にすること。
- (2) 未来デザインコース (FDC) の学生に対しては、学域教育運営委員会の中に設置された未来デザイン支援WGやメンター教員によるフォローアップが行われるなど指導体制については一定程度明らかになったものの、FDC の学生に対する就職までを見据えた履修指導に関する最終的な責任の所在が不明であるため、明確にすること。また、本WGはメンターの配置など運営側の支援を主とする組織なのか、学生の履修指導を主とする組織なのか不明確なため、学生が FDC での学びを円滑に行えるような組織的な支援をどのように行うのか、具体的に説明すること。
- (3) 未来デザインコース (FDC) は、入学後、未来デザイン計画を提出した者の中から 15 名程度の学生に履修を認めることとしている計画であることから、その選考方法や想定人数について、誤解がないよう志願者に対し事前に周知を行うこと。

(1)

(対応)

未来デザインコースでは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。未来デザインコースは現代システム科学域の教育理念を最も昇華させた教育課程であり、その学生には学域における領域横断的な学びを牽引する役割が期待されるため、各学類の演習の授業などにおいて、通常教育課程の学生と共に学ぶ機会が多いことが望ましい。また、未来デザインコースの学びに適した資質（課題発見能力、他者と協働する能力）を入学試験で判別することは困難であり、入学後の履修状況を踏まえて選抜できるような仕組みとすることが必要とされる。そのため、未来デザインコースに独立した定員を置かず、各学類に配属される学生が、通常学類のカリキュラムに加える形で未来デザインプログラム科目を履修することにより、人材養成の目的を達成するような設計とした。

未来デザインコースでは複数の学問領域を専門的に学ぶことを重視し、通常の学類のカリキュラムに加え、学域内の4学類の専門科目の全てを履修可能にする教育課程としている。このような教育課程を実施するためには、現代システム科学域の教育理念と、知識情報システム学類、環境社会システム学類、教育福祉学類、心理学類の位置付けと役割を理解することが必要であることから、学域共通科目に配置された4学類の概論「知識情報システム学概論」「環境社会システム学概論」「教育福祉学概論」「心理学概論」全てを必修とする必要がある。加えて、未来デザインコース固有の科目区分として未来デザインプログラム科目（22単位以上）を設け、必修科目「未来デザインインターンシップ」、「未来デザイン計画演習」、「未来デザインPBL演習」、「未来デザイン卒業研究」の計12単位と他学類又は他学部の専門科目10単位以上の履修を卒業要件に加える。

また未来デザインコースでは、4学類のディプロマ・ポリシーにおける「6.（表現力）現代社会の目指すべき方向性とそれを実現するための方策を適切な表現法を用いて説明することができる」に代えて、「6.（実行力）現代社会の課題を自ら発見し、他者と協働して課題解決に取り組むことができる」を掲げており、実際に課題解決に取り組む実行力が重視されている。この実行力を身に付けるために、未来デザインプログラム科目に、1年次後期「未来デザインインターンシップ」、2年次前期「未来デザイン計画演習」、3年次通年「未来デザインPBL演習」、4年次通年「未来デザイン卒業研究」の計12単位の必修科目を置く。未来デザインコースの学生は、上記の学類を横断する学びを踏まえ、様々な学問分野が連携してこそ解決できる、現代の複雑な問題に対する解決能力を身に付ける。一方、他学類又は他学部の専門科目10単位は、未来デザインコースが課題解決に取り組む上で必要とされる知識・技能を教授する科目を、所属する学類の範囲を超えて履修するために設けられている。

未来デザインコースは、学域単位入学生（定員60名）を対象とし、1年次末に未来デザイン計画を提出した者の中から、計画の実現可能性が高いと判断される学生15名を上限として履修を認めることとする（実現可能性の判断において、1年次末までの成績も勘案する）。未来デザインコースの学生も、他の学域単位入学生と同様に2年次より4学類のいずれかに配属するため、所属する学類の専門科目の必要単位数は同じになるが、卒業研究については、自学類の卒業研究に代えて「未来デザイン卒業研究」6単位を履修するため、通常の学類の専門科目の必要単位数から各学類の卒業研究科目6単位を減じた単位数を、専門科目の必要単位数とする。未来デザインコースの学生が履修する他学類又は他学部の専門科目10単位は、専門科目の単位に算入される。

以上のように、未来デザインコースにおいては、通常の学類の履修課程と比べて高い水準に設定されたディプロマ・ポリシー「6.（実行力）現代社会の課題を自ら発見し、他者と協働して課題解決に取り組むことができる」の達成のために、「未来デザインインターンシップ」、「未来デザイン計画演習」、「未来デザインPBL演習」の3科目6単位が卒業要件に加えられている。そのため、未来デザインコースにおける専門科目と基礎教育科目の必要単位数は102単位（各学類は96単位）、基幹教育科目35単位を加えた卒業要件は137単位としている。

未来デザインコースにおいては高い水準の実践力を身に付けることが要求されるため、未来デザインコースを履修する学生が、同コースの履修を諦め、所属する学類の教育課程に

戻ることとも想定して、2 年次から 4 年次までの履修の途中で所属する学類の教育課程に戻ることができるような制度設計としている。所属する学類の教育課程に戻ることが望む学生は、メンター教員に申し出を行い、未来デザイン支援 WG の承認を得ることとする。なお、未来デザインコースで履修した他学類及び他学部の専門科目 10 単位は、学類の教育課程に戻った場合、教授会の議を経た上で、所属学類の学類専門科目の単位に算入される。

学生が未来デザインコースを選択するに当たっては、1 年次後期「未来デザインインターンシップ」の履修を踏まえ、実現すべき未来の課題の解決に向けた未来デザイン計画を提出する必要がある。学生は未来デザイン計画を作成する中で、「未来デザイン計画演習」、「未来デザイン PBL 演習」の内容についても自ら検討することになる。未来デザインコースでは、このようなハードルを超えて、主体的に未来デザインプログラムの履修を進める意思のある学生だけに履修を認めるため、履修上の負担が 6 単位増加することについては問題としないと考えられる。また教育効果については、他学類、他学部の科目履修による横断的な学び、自学類専門科目の履修による専門性の獲得、「未来デザインインターンシップ」、「未来デザイン計画演習」、「未来デザイン PBL 演習」による実行力の達成を実現するための適切な単位数の設定となっていると言える。なお、未来デザインコースにおいても、各学年での履修スケジュールが過密とならないよう、年間 50 単位未満、前期 25 単位以下、後期 25 単位以下の CAP を設けている。

なお、1 年次後期「未来デザインインターンシップ」を履修して単位を修得したが未来デザインコースを選択しなかった学生については、「未来デザインインターンシップ」の単位を学域共通科目「インターンシップ」の単位として読み替える措置を講ずる。2 年次前期「未来デザイン計画演習」、3 年次通年「未来デザイン PBL 演習」については、各学類専門科目の単位として算入する。

以上を踏まえ、設置の趣旨等を記載した書類を次の新旧対照表のとおり修正する。

(新旧対照表) 現代システム科学域 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
(設置趣旨 (本文) -89、90、91 ページ)	(設置趣旨 (本文) -83、84、85 ページ)
2 3 未来デザインコース (FDC : Future Design Course)	2 3 未来デザインコース (FDC : Future Design Course)
(略)	(略)
イ FDC の教育課程	イ FDC の教育課程
未来デザインコースでは、目指すべき未来の社会を創造すべく自分でその道筋をデザインし、領域横断的応用力とシステムの思考力を用いて、現代社会の課題解決に取り組むことによって、持続可能な社会の実現を実行できる人材を養成することを目的としている。未来デザインコースは現代シ	<u>未来デザインコースの独自の必修科目「未来デザインプログラム」として、「未来デザインインターンシップ (必修 2 単位、1 年次後期)」、「未来デザイン計画演習 (必修 2 単位、2 年次前期)」、「未来デザイン PBL 演習 (必修 2 単位、3 年次通年)」、「未来デザイン卒業研究 (必修 6 単位、4 年次通</u>

STEM科学域の教育理念を最も昇華させた教育課程であり、その学生には学域における領域横断的な学びを牽引する役割が期待されるため、各学類の演習の授業などにおいて、通常のエデュケーションの学生と共に学ぶ機会が多いことが望ましい。また、未来デザインコースの学びに適した資質（課題発見能力、他者と協働する能力）を入学試験で判別することは困難であり、入学後の履修状況を踏まえて選抜できるような仕組みとすることが必要とされる。そのため、未来デザインコースに独立した定員を置かず、各学類に配属される学生が、通常のエデュケーションのカリキュラムに加える形で未来デザインプログラム科目を履修することにより、人材養成の目的を達成するような設計とした。

未来デザインコースは高度に学問融合的な学習内容になっていることから、一定レベル以上の学修成果を達成するためには、学際的な学びに強い興味をもつ学生に対して、メンターを配置するなどの体制が必要となってくる。そのような体制で行うからこそFDCの教育目標が達成できると考えている。したがって、全ての現シス学生に受講して欲しいプログラムではあるが、現実的には15名以下とせざるを得ない。このように考えると、より教育効果が高いと考えられるのは、複数の学問領域を俯瞰的に学修した後に、基盤となる学類を決定する教育課程を選んだ学域入学生であると考えられるので学域生に限定することとした。全学域単位入学生に対して、入学時に未来デザインコースのオリエンテーションを行い、実現すべき未来の課題の発見を行うために1年次に未来デザインインターシップを履修し、その経験に基づいて、1年次末に未来デザイン計画を提出した者から計画の実現可能性が高いと判断される15名を

年)の4科目と他学類専門科目及び又は他学部専門科目（選択必修計10単位）を配置し、それぞれの所属学類の卒業要件に、「未来デザインインターシップ」、「未来デザイン計画演習」、「未来デザインPBL演習」の3科目6単位分を追加した137単位を卒業要件単位数とする。また、未来デザインコースでは、複数学問分野の知識を融合することを求めているため、メンター教員の指導や助言により他学類専門科目と他学部専門科目を併せて10単位以上を履修することを求める。未来デザインコースは、学類での専門分野の学修と22単位以上で構成される未来デザインプログラムによる学際的学修を課す教育課程であり、特に、未来デザイン卒業研究では未来デザインPBL演習において発見された学術的課題を複数学類の教員の指導を受けながら行うものとする。未来デザインプログラムの作成においては、学生が主体となって作成することを求めるが、メンター教員の指導や助言を受けながら共同でプログラムを作成する。こうすることで、未来デザインプログラムの教育効果を高める。なお、未来デザイン卒業研究を履修する学生は、自学類の卒業研究を履修することができないので、単位数は追加されない。また、学年進行に伴って所属学類の学問体系に基づく学修を希望し、未来デザインプログラムの履修を中止した学生の場合には、FDC科目およびFDC提供科目未来デザインプログラム科目の単位を10単位を上限として自学類の専門科目の単位として加算し、卒業要件単位数に含まれるようにする。

このように、未来デザインコースの学生は各学類での卒業要件単位数に、目指すべき未来の実現に挑戦する未来デザインプログラム6単位を加えた137単位を卒業要件単位数としている。PBL演習は、本

上限とする学生に履修を認めることとする。

未来デザインコースでは複数の学問領域を専門的に学ぶことを重視し、通常の学類のカリキュラムに加え、学域内の4学類の専門科目の全てを履修可能にする教育課程としている。このような教育課程を実施するためには、現代システム科学域の教育理念と、知識情報システム学類、環境社会システム学類、教育福祉学類、心理学類の位置付けと役割を理解することが必要であることから、学域共通科目に配置された4学類の概論「知識情報システム学概論」「環境社会システム学概論」「教育福祉学概論」

「心理学概論」全てを必修とする必要がある。加えて、未来デザインコース固有の科目区分として未来デザインプログラム科目(22単位以上)を設け、必修科目「未来デザインインターンシップ」、「未来デザイン計画演習」、「未来デザインPBL演習」、「未来デザイン卒業研究」の計12単位と他学類又は他学部の専門科目10単位以上の履修を卒業要件に加える。

また未来デザインコースでは、4学類のディプロマ・ポリシーにおける「6.(表現力) 現代社会の目指すべき方向性とそれを実現するための方策を適切な表現法を用いて説明することができる」に代えて、「6.

(実行力) 現代社会の課題を自ら発見し、他者と協働して課題解決に取り組むことができる」を掲げており、実際に課題解決に取り組む実行力が重視されている。この実行力を身に付けるために、未来デザインプログラム科目に、1年次後期「未来デザインインターンシップ」、2年次前期「未来デザイン計画演習」、3年次通年「未来デザインPBL演習」、4年次通年「未来デザイン卒業研究」の計12単位の必修科目を置く。未来デザインコースの学生は、上記の学類を

学域の教育課程の核となるものであるため未来デザインコースの学生も必修科目として履修することに加えて、実際に未来の社会の実現に挑戦するための学修の場として学生自身が計画し、実行する「未来デザインPBL演習(2単位)」の履修を課す。PBL演習は学域内の専門分野が異なる学生との協働による学びであるのに対して、未来デザインPBL演習は主に地域の住民や起業家、NPOなどの学外者と協働する学びを設定することで未来の社会の実現を実行できる人材の育成を目指す。未来デザインPBL演習を実施するためには、課題の発見のための「未来デザインインターンシップ(2単位)」、大学での4年間の学修と卒業後の計画を立案するための「未来デザイン計画演習(2単位)」が必要と考えられるので、卒業要件単位数が6単位多くなる。

FDCは現代システム科学域の教育理念を最も昇華させた教育課程であり、高度に学問融合的な学習内容になっていることから、一定レベル以上の学修成果を達成するためには、学際的な学びに強い興味をもつ学生に対して、メンターを配置するなどの体制が必要となってくる。そのような体制で行うからこそFDCの教育目標が達成できると考えている。したがって、全ての現シス学生に受講して欲しいプログラムではあるが、現実的には15名程度を想定せざるを得ない。このように考えると、より教育効果が高いと考えられるのは、複数の学問領域を俯瞰的に学修した後に、基盤となる学類を決定する教育課程を選んだ学域入学生であると考えられるので学域生に限定することとした。全学域単位入学生に対して、入学時に未来デザインコースのオリエンテーションを行い、実現すべき未来の課題の発見を行うために1年次に未来デザインインターンシップを履修し、その経験に基づ

横断する学びを踏まえ、様々な学問分野が連携してこそ解決できる、現代の複雑な問題に対する解決能力を身に付ける。一方、他学類又は他学部の専門科目 10 単位は、未来デザインコースが課題解決に取り組む上で必要とされる知識・技能を教授する科目を、所属する学類の範囲を超えて履修するために設けられている。

他学類又は他学部の専門科目 10 単位以上の履修の計画は、学生が主体となって作成することを求めるが、メンター教員の指導や助言を受けながら共同でプログラムを作成する。こうすることで、未来デザインプログラムの教育効果を高める。「PBL 演習」は、本学域の教育課程の核となるものであるため未来デザインコースの学生も必修科目として履修することに加えて、実際に未来の社会の実現に挑戦するための学修の場として学生自身が計画し、実行する「未来デザイン PBL 演習」の履修を課す。「PBL 演習」が学域内の専門分野が異なる学生との協働による学びであるのに対して、「未来デザイン PBL 演習」は主に地域の住民や起業家、NPO などの学外者と協働する学びを設定することで未来の社会の実現を実行できる人材の育成を目指す。「未来デザイン卒業研究」では、「未来デザイン PBL 演習」において発見された学術的課題を複数学類の教員の指導を受けながら卒業研究を行うものとする。

未来デザインコースは、学域単位入学生（定員 60 名）を対象とし、1 年次末に未来デザイン計画を提出した者の中から、計画の実現可能性が高いと判断される学生 15 名を上限として履修を認めることとする（実現可能性の判断において、1 年次末までの成績も勘案する）。未来デザインコースの学生も、他の学域単位入学生と同様に 2 年次より 4 学類のいずれかに配属するため、所

いて、1 年次末に未来デザイン計画を提出した者から計画の実現可能性が高いと判断される 15 名程度の学生に履修を認めることとする。

このように未来デザインコースの履修に向けては、入学時に履修を希望するかどうかを決定する必要があるため、2 年次以降で所属することになる学類の履修の体系に沿って履修を始めることになる。また、未来デザインプログラムはそれぞれの学類での教育課程をベースに独自のカリキュラムを作成して学修を進めるため、全ての学域単位入学生は 4 つの学類のいずれかに所属することとなり、定員管理は学類ごとに行う。

属する学類の専門科目の必要単位数は同じになるが、卒業研究については、自学類の卒業研究に代えて「未来デザイン卒業研究」6単位を履修するため、通常の学類の専門科目の必要単位数から各学類の卒業研究科目6単位を減じた単位数を、専門科目の必要単位数とする。未来デザインコースの学生が履修する他学類又は他学部の専門科目10単位は、専門科目の単位に算入される。

以上のように、未来デザインコースにおいては、通常の学類の履修課程と比べて高い水準に設定されたディプロマ・ポリシー「6.（実行力）現代社会の課題を自ら発見し、他者と協働して課題解決に取り組むことができる」の達成のために、「未来デザインインターンシップ」、「未来デザイン計画演習」、「未来デザインPBL演習」の3科目6単位が卒業要件に加えられている。そのため、未来デザインコースにおける専門科目と基礎教育科目の必要単位数は102単位（各学類は96単位）、基幹教育科目35単位を加えた卒業要件は137単位としている。

未来デザインコースにおいては高い水準の実践力を身に付けることが要求されるため、未来デザインコースを履修する学生が、同コースの履修を諦め、所属する学類の教育課程に戻ることも想定して、2年次から4年次までの履修の途中で所属する学類の教育課程に戻るができるような制度設計としている。所属する学類の教育課程に戻ることを望む学生は、メンター教員に申し出を行い、未来デザイン支援WGの承認を得ることとする。なお、未来デザインコースで履修した他学類及び他学部の専門科目10単位は、学類の教育課程に戻った場合、教授会の議を経た上で、所属学類の学類専門科目の単位に算入される。

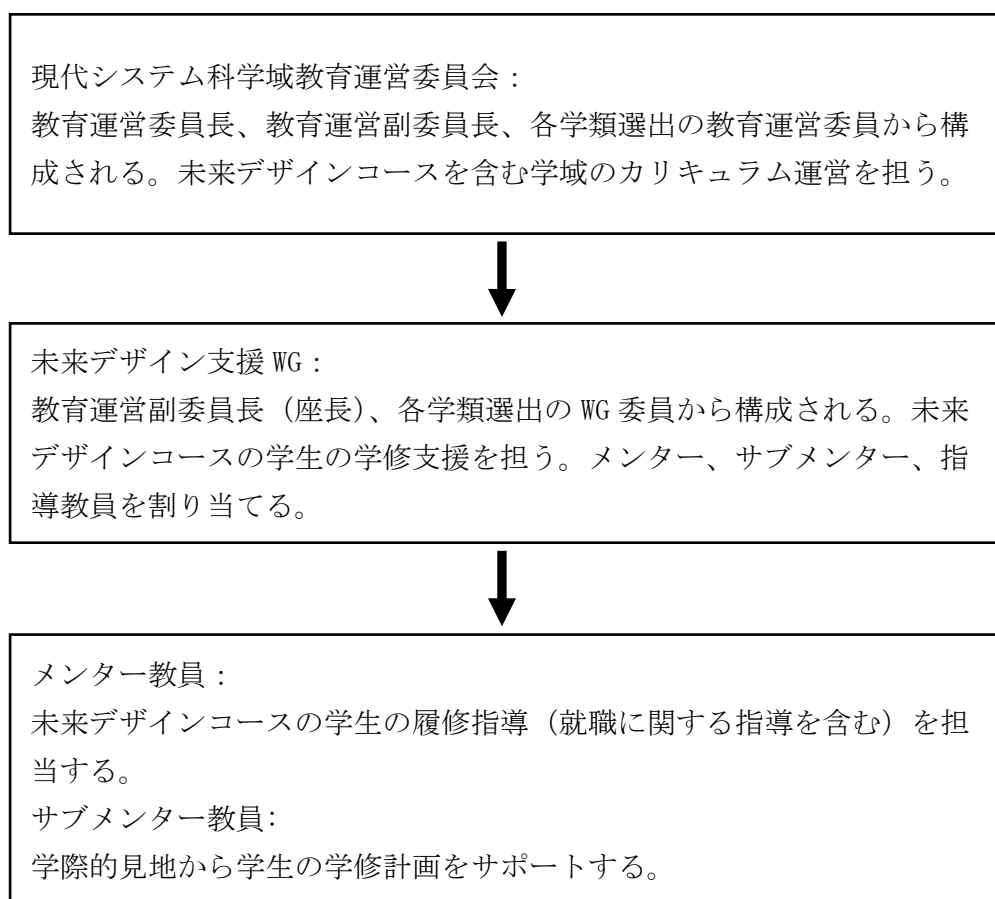
学生が未来デザインコースを選択するに当たっては、1 年次後期「未来デザインインターンシップ」の履修を踏まえ、実現すべき未来の課題の解決に向けた未来デザイン計画を提出する必要がある。学生は未来デザイン計画を作成する中で、「未来デザイン計画演習」、「未来デザイン PBL 演習」の内容についても自ら検討することになる。未来デザインコースでは、このようなハードルを超えて、主体的に未来デザインプログラムの履修を進める意思のある学生だけに履修を認めるため、履修上の負担が 6 単位増加することについては問題とならないと考えられる。また教育効果については、他学類、他学部 of 科目履修による横断的な学び、自学類専門科目の履修による専門性の獲得、「未来デザインインターンシップ」、「未来デザイン計画演習」、「未来デザイン PBL 演習」による実行力の達成を実現するための適切な単位数の設定となっていると言える。なお、未来デザインコースにおいても、各学年での履修スケジュールが過密とならないよう、年間 50 単位未満、前期 25 単位以下、後期 25 単位以下の CAP を設けている。

なお、1 年次後期「未来デザインインターンシップ」を履修して単位を修得したが未来デザインコースを選択しなかった学生については、「未来デザインインターンシップ」の単位を学域共通科目「インターンシップ」の単位として読み替える措置を講ずる。2 年次前期「未来デザイン計画演習」、3 年次通年「未来デザイン PBL 演習」については、各学類専門科目の単位として算入する。

(2)

(対応)

未来デザインコースを履修する学生に対しては、現代システム科学域教育運営委員会の中に設置する未来デザイン支援 WG が学修プロセスをモニタリングすることによって、メンターによる個別指導に加えて、集団指導によるバックアップを行う。具体的には、メンターと WG の教員が、未来デザインコースの学生の単位修得状況を半期ごとに確認するとともに、「未来デザイン計画演習」、「未来デザイン PBL 演習」の成果報告会に出席することで、個々の学生の学びの状況を確認する。これにより、学修状況が思わしくない学生に対して、メンター教員だけでなく、WG としてサポートできる体制を整える。未来デザインコースの学生に対する履修指導は未来デザイン支援 WG が担い、組織としての最終的な責任は学域長の下に置かれた現代システム科学域教育運営委員会が担う。下図のとおり、未来デザイン支援 WG は学生の学修を支援する組織であり、未来デザインコースの運営は現代システム科学域教育運営委員会が行う。



未来デザインコースを志望する学生は、1 年次末に提出する未来デザイン計画の中で、学生の所属する学類の教員の中から学生が指導を希望する 1 名以上をメンター候補者として挙げる。これを受けて、未来デザイン支援 WG が学生と教員の希望を聞いた上でマッチングしてメンター教員を決定する。メンター教員は、就職に関する指導も含め、4 年次まで継続し

て履修指導を行う。さらに、未来デザイン支援 WG は、学際的見地から学生の学修計画をサポートできる他学類の教員 1 名をサブメンターとして指名する。

卒業研究はメンター教員の下で行うこともできるが、履修が進行する中で学生が他の教員を希望する場合は、支援 WG がメンター以外の指導教員を割り当てる。また副指導教員もサブメンター教員が担当することができるが、履修が進行する中で学生が他の教員を希望する場合は、支援 WG がサブメンター以外の副指導教員を割り当てる。

なお、メンター教員の役割について整理したところ、「未来デザインインターンシップ」のシラバスに記載の「メンター教員」については、「インターンシップ指導教員」の間違いであったことから修正する。

(新旧対照表) 現代システム科学域 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
(設置趣旨 (本文) -92、93 ページ) 2 3 未来デザインコース (FDC : Future Design Course) ウ FDC の特色 未来デザインコースを履修する学生に対しては、学域教育運営委員会の中に設置された未来デザイン支援 WG が学修プロセスをモニタリングし、集団指導を行っていく。具体的には、最初に提出する未来デザイン計画の中で、学生の所属する学類の教員の中から学生が指導を希望する 1 名以上をメンター候補者として挙げ、未来デザイン支援 WG が学生と教員の希望を聞いた上でマッチングして決定する。メンター教員は、就職に関する指導も含め、4 年次まで継続して履修指導を行う。さらに、支援 WG が学際的見地から学生の学修計画をサポートできる他学類の教員 1 名をサブメンターとして指名し、学生はこれらのメンター教員と相談しながら自分の未来デザイン計画を立案する。未来デザイン支援 WG は、セメスターの開始後と終了後に未来デザイン検討報告会を開催し、学生はそれまでの学習状況と次の学修計画を報告し、メンター教員が意見を加える。学域教育副運営委員長がリーダーとなってそれぞれの学修計画を吟味し、学修計画の妥当性を議論する。支援 WG	(設置趣旨 (本文) -85、86 ページ) 2 3 未来デザインコース (FDC : Future Design Course) ウ FDC の特色 未来デザインコースを履修する学生に対しては、学域教育運営委員会の中に設置された未来デザイン支援 WG が学修プロセスをモニタリングし、集団指導を行っていく。具体的には、最初に提出する未来デザイン計画の中で、学生の所属する学類の教員の中から学生が指導を希望する 1 名以上をメンター候補者として挙げ、未来デザイン支援 WG が学生と教員の希望を聞いた上でマッチングして決定する。さらに、支援 WG が学際的見地から学生の学修計画をサポートできる他学類の教員 1 名をサブメンターとして指名し、学生はこれらのメンター教員と相談しながら自分の未来デザイン計画を立案する。未来デザイン支援 WG は、セメスターの開始後と終了後に未来デザイン検討報告会を開催し、学生はそれまでの学習状況と次の学修計画を報告し、メンター教員が意見を加える。学域教育副運営委員長がリーダーとなってそれぞれの学修計画を吟味し、学修計画の妥当性を議論する。支援 WG は、学修上の必要性に応じて、メンターを追加したり、交代する支援を行う。他学類

は、学修上の必要性に応じて、メンターを追加したり、交代する支援を行う。他学類や他学部 of 講義や演習を受講する必要がある場合には、WG 経由でそれを他学類に要請する。他学部 of 科目 of 受講にあたっては、教務職員が他学部との調整を行う。FDC 学生に対しては、上記のような体制で学生 of 描く未来 of 実現を学域全体として支援することで、未来デザインコースという高い目標設定をクリアするための動機づけ of 維持につながると考えている。

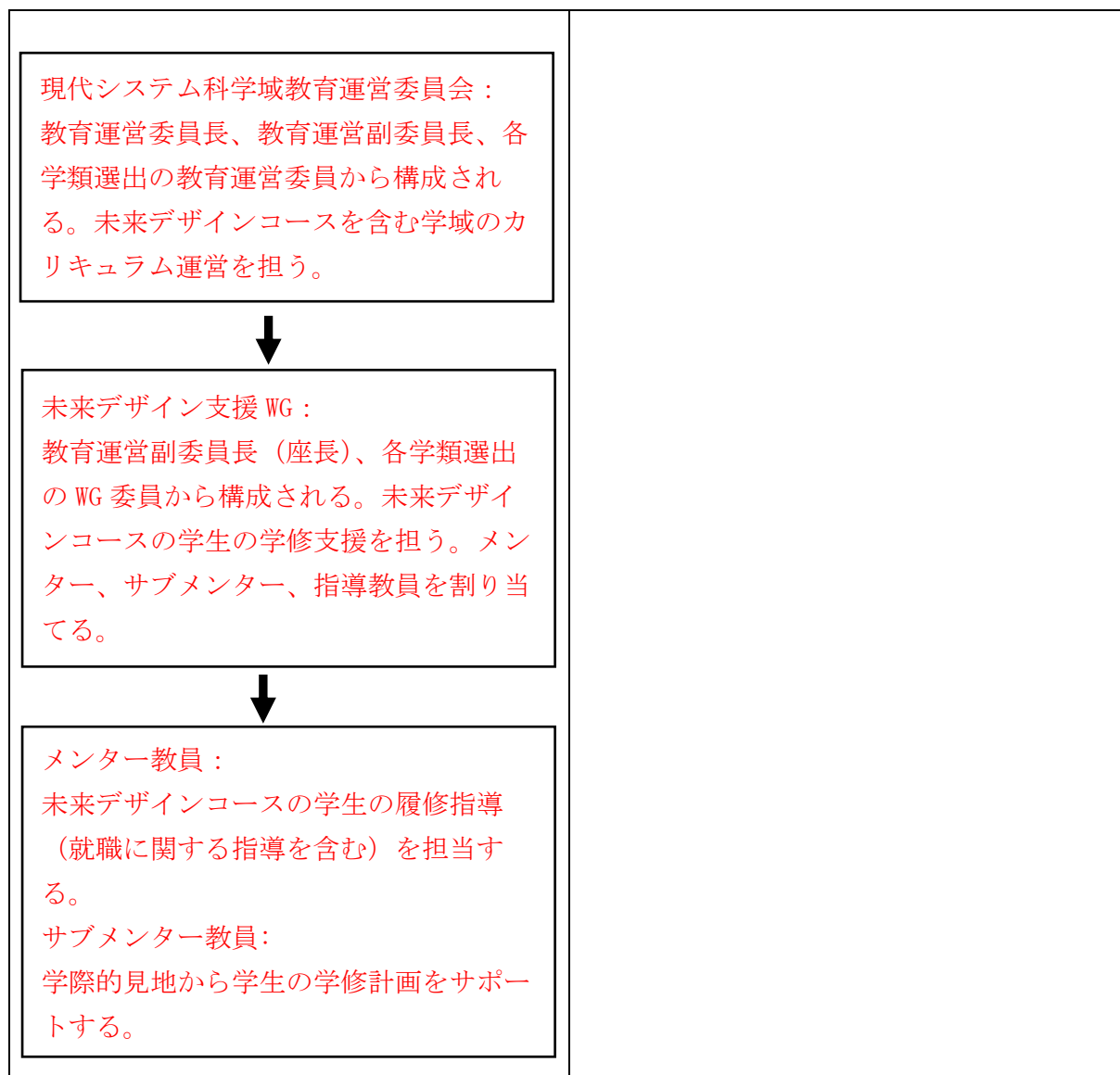
卒業研究はメンター教員の下で行うこともできるが、履修が進行する中で学生が他の教員を希望する場合は、支援 WG がメンター以外の指導教員を割り当てる。また副指導教員もサブメンター教員が担当することができるが、履修が進行する中で学生が他の教員を希望する場合は、支援 WG がサブメンター以外の副指導教員を割り当てる。

また、未来デザイン PBL 演習は、フィールドが国外や国内遠隔地であることが想定されるため、未来デザインコース of 学生においては、フィールドからの遠隔による講義科目 of 履修が可能となるように配慮する。さらに、未来デザインコースを卒業予定 of 学生に対しては、現代システム科学研究科 of 入試において筆記試験免除とする。

未来デザインコース of 学生に対する履修指導は未来デザイン支援 WG が担い、組織としての最終的な責任は学域長の下に置かれた現代システム科学域教育運営委員会が担う。下図のとおり、未来デザイン支援 WG は学生 of 学修を支援する組織であり、未来デザインコース of 運営は現代システム科学域教育運営委員会が行う。

や他学部 of 講義や演習を受講する必要がある場合には、WG 経由でそれを他学類に要請する。他学部 of 科目 of 受講にあたっては、教務職員が他学部との調整を行う。FDC 学生に対しては、上記のような体制で学生 of 描く未来 of 実現を学域全体として支援することで、未来デザインコースという高い目標設定をクリアするための動機づけ of 維持につながると考えている。

また、未来デザイン PBL 演習は、フィールドが国外や国内遠隔地であることが想定されるため、未来デザインコース of 学生においては、フィールドからの遠隔による講義科目 of 履修が可能となるように配慮する。さらに、未来デザインコースを卒業予定 of 学生に対しては、現代システム科学研究科 of 入試において筆記試験免除とする。



（新旧対照表）現代システム科学域 知識情報システム学類 シラバス

新	旧
※審査意見を受けて、修正したシラバスの 科目名及び修正した項目を示す。 （シラバス－93 ページ） 未来デザインインターンシップ ・授業概要 ・各回の授業内容 ※このほか、環境社会システム学類、教育 福祉学類、心理学類の「未来デザインイン ターンシップ」について、同様の修正を行 う。	（シラバス－93 ページ） 未来デザインインターンシップ

(3)

(対応)

新大学の入学者選抜要項、特別選抜ガイド、募集要項の現代システム科学域に関する部分に次の文言を加える。また、現代システム科学域のウェブサイト、パンフレットにも同様な文言を加える。

「未来デザインコース(FDC)は、学域単位入学生を対象に、第1年次の3月末までに履修者を決定しますが、志望者が15名を超える場合は、第1年次の3月末までの成績と、コースでの学修計画を示す提出書類(未来デザイン計画)により選考を実施します。そのため、志望してもこのコースを履修できない場合があります。」

またこれに伴い、設置の趣旨等を記載した書類において、未来デザインコースを履修できる学生数を「15名程度」としていた部分について「15名以下」に修正する。

(新旧対照表) 現代システム科学域 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
(設置趣旨(本文)－52ページ) 6 教育方法、履修指導方法及び卒業要件 ア 教育方法等 (略) 後述のように、本学域では全260名の定員のうち60人を学域単位として募集する。学域単位入学生には入学時点でFDC希望調査を行い、希望した学生(15名を上限とする)にはメンター教員を配置して未来デザイン学修プログラムを作成させ、そのプログラムに沿った履修を行わせる。 (略)	(設置趣旨(本文)－48ページ) 6 教育方法、履修指導方法及び卒業要件 ア 教育方法等 (略) 後述のように、本学域では全260名の定員のうち60人を学域単位として募集する。学域単位入学生には入学時点でFDC希望調査を行い、希望した学生(15名程度を想定)にはメンター教員を配置して未来デザイン学修プログラムを作成させ、そのプログラムに沿った履修を行わせる。 (略)

5. 【全体計画審査意見 14 の回答について】

- (1) 示されたカリキュラムマップを見ると、ディプロマ・ポリシーで掲げる事項に対応する必修科目がそれぞれ一科目から複数科目までと偏りがあるように見受けられ、依然としてディプロマ・ポリシーに掲げる資質・能力が担保される教育課程になっているのか不明確である。カリキュラムマップに基づき、改めて妥当性を明確に説明するか、必要に応じて修正すること。

(是正事項)

- (2) 「各学類とも、単一の学問分野を追求するのではなく、学際的な学びから学年進捗とともに・・・専門的な学びへと移行する履修設定」となっており、「その専門分野は学生自身が選択できるような教育プログラムとしている」こと等を理由として、「学生が履修するに当たり混乱しないようカリキュラム・ポリシーに科目を例示することをやめ」と説明されているが、カリキュラム・ポリシーの明確化の観点から、少なくとも必修科目などコアとなる科目については可能な限り授業科目名を明記するよう適切に改めること。

(改善事項)

(1)

(対応)

現代システム科学域は、現代社会のさまざまな問題に対して、領域横断的知識・技能とシステムの思考を発揮し、課題解決を図ることによって、持続可能な社会の実現に貢献できる人材を育てることを目的としている。ディプロマ・ポリシーに掲げる領域横断的応用力、システムの思考力、サステナビリティ志向性を身に付けるにあたって、様々な種類の科目履修が必要となる。そのため現代システム科学域においては、ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーを必ずしも1対1に対応させず、ディプロマ・ポリシーの各項目の達成に複数の科目区分の履修を必要とするようなカリキュラムとしている。

また現代システム科学域では、1つの学類の中においても学生の領域横断的な学びを実現する必要があるため、1年次の「システムとサステナビリティ」科目や「各学類の概論」科目の履修を通して、学年進捗に合わせて焦点化される学生自身の興味関心に従って、2年次以降に履修する専門科目を選択できるようになっている。このような学生の興味関心に合わせた履修を実現するために、現代システム科学域では専門科目における必修科目の割合を比較的小さく設定しているが、各科目区分において選択必修科目や選択科目の必要単位数を適切に定めることによって、ディプロマ・ポリシーが達成されるように設計している。さらに、教育効果が最大限に高まるような総合教養科目、基礎教育科目、専門科目の選択ができるように、入学時、1年次後期開始前、2年次進級前、2年次後期開始前といった重要なタイミングで学類ごとに科目履修に関するオリエンテーションを実施し(1年次には学域単位入学生に対するオリエンテーションを別途実施)、カリキュラムマップや履修モデル等による説明を丹念に行う。

必修単位数は科目区分ごとに異なるが、ディプロマ・ポリシーの達成には、語学など多数の必修科目を含む科目区分の履修、複数の科目区分の段階的履修、あるいは専門科目のように少数の必修科目に加えて多数の選択科目を含む科目区分の履修を必要とするような設計としている。これにより、各科目区分において、卒業要件として定められた単位を修得することにより、ディプロマ・ポリシーの各項目で掲げられた資質・能力が身に付くようなカリキュラム構成となっている。しかし御指摘のとおり、補正申請で提出したカリキュラムマップでは、ディプロマ・ポリシーと各科目区分の関係に分かりにくい部分があった。これは、領域横断的応用力、システムの思考力を身に付けるカリキュラムである点を強調するためであったが、御指摘を受けて再検討した結果、現代システム科学域各学類のカリキュラムマップについて、以下の点を修正した。

- ・ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーの対応について、主に対応する部分に限定して記載するように変更した。
- ・学類間でディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーの対応を統一した。
- ・ディプロマ・ポリシーにつながる矢印を1本に限定した。
- ・ディプロマ・ポリシーが複数の科目区分と対応する場合は、科目区分同士の対応を水色の太い矢印で示し、複数の科目区分の詰め重ねでディプロマ・ポリシーが達成されることを示した。
- ・科目区分とディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーの関係、アドミッション・ポリシーとカリキュラム・ポリシーの関係を表す矢印をオレンジ色に統一した。
- ・科目区分はオレンジ色の枠で囲み、卒業に必要な単位数を付記した。
- ・オレンジ色の矢印と水色の矢印の意味を注記した。
- ・知識情報システム学類のように1種類のマップで全体のカリキュラムを示す場合は、全ての学類専門科目を記載した。

修正したカリキュラムマップについて点検し、御指摘のディプロマ・ポリシーの各項目で掲げる資質・能力を担保する教育課程であることを確認している。

※添付資料1「現代システム科学域 カリキュラムマップ」参照（P3～P15）

（新旧対照表）現代システム科学域 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
※審査意見を受けて、修正したカリキュラムマップのタイトルを示す。 （設置趣旨（資料）－2、3 ページ） 資料 1 知識情報システム学類 ・カリキュラムマップ ・未来デザインコースカリキュラムマップ （設置趣旨（資料）－4、5、6、7 ページ） 資料 1	（設置趣旨（資料）－2、3 ページ） 資料 1 知識情報システム学類 ・カリキュラムマップ ・未来デザインコースカリキュラムマップ （設置趣旨（資料）－4、5、6、7 ページ） 資料 1

環境社会システム学類 ・カリキュラムマップ（自然環境学） ・カリキュラムマップ（社会環境学） ・カリキュラムマップ（環境哲学・政策学） ・未来デザインコースカリキュラムマップ（自然環境学を中心に履修する場合の例） （設置趣旨（資料）－8、9、10、11、12 ページ） 資料 1 教育福祉学類 ・カリキュラムマップ（教育福祉総合志向：教育福祉学全体を学び、多面的視点から持続可能な社会の実現に寄与する） ・カリキュラムマップ（教育福祉の福祉志向モデル：教育福祉学を学びながら社会福祉士や SSW の資格取得を目指す） ・カリキュラムマップ（教育福祉の保育志向モデル：教育福祉学を学びながら保育士資格取得を目指す） ・カリキュラムマップ（教育福祉教育志向：教育福祉学を学びながら教員免許の取得を目指す） ・未来デザインコースカリキュラムマップ （設置趣旨（資料）－13、14 ページ） 資料 1 心理学類 ・カリキュラムマップ ・未来デザインコースカリキュラムマップ：認知科学と情報科学を融合してシステム開発に貢献できる人材	環境社会システム学類 ・カリキュラムマップ（自然環境学） ・カリキュラムマップ（社会環境学） ・カリキュラムマップ（<u>環境共生学（政策科学、環境哲学・倫理学）</u>） ・未来デザインコースカリキュラムマップ （設置趣旨（資料）－8、9、10、11、12 ページ） 資料 1 教育福祉学類 ・カリキュラムマップ（教育福祉総合志向：教育福祉学全体を学び、多面的視点から持続可能な社会の実現に寄与する） ・カリキュラムマップ（教育福祉の福祉志向モデル：教育福祉を学びながら社会福祉士や SSW の資格取得を目指す） ・カリキュラムマップ（教育福祉の保育志向モデル：教育福祉を学びながら保育士資格取得を目指す） ・カリキュラムマップ（教育福祉教育志向：教育福祉学を学びながら教員免許の取得を目指す） ・未来デザインコースカリキュラムマップ （設置趣旨（資料）－13、14 ページ） 資料 1 心理学類 ・カリキュラムマップ ・未来デザインコースカリキュラムマップ：認知科学と情報科学を融合してシステム開発に貢献できる人材
--	--

(2)

(対応)

御指摘を受け、カリキュラム・ポリシーの明確化の観点から、下記のようにカリキュラム・ポリシーに必修科目を例示する（変更箇所を赤字で示す）。必修科目以外の選択科目がある場合には「など」を付加する。また、御指摘を受けて精査したところ、未来デザインコースのカリキュラム・ポリシーに未来デザインプログラムに関する項目が含まれていなかったため、追加した。そのため、未来デザインコースのカリキュラム・ポリシーは、合計 10 項目となった。

[現代システム科学域]

学位授与に必要とされる能力（ディプロマ・ポリシー）を養うために、以下の方針で教育課程を編成する。また、各科目の学修成果は、定期試験、レポート、授業中の小テストや発表などで評価することとし、その評価方法については、授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示する。

(知識・技能)

1. 幅広い知識・技能、多面的な視野を養うために、基幹教育科目に総合教養科目および健康・スポーツ科学科目（「健康・スポーツ科学概論」「健康・スポーツ科学実習」）を配置する。
2. 複数の言語を用いて多様な人々とコミュニケーションをとることができる能力を養うために、基幹教育科目に英語科目（「University English 1A・1B・2A・2B・3A・3B」）および初修外国語科目を配置する。

(思考力・判断力・表現力)

3. データを収集・活用することのできる知識・技能を養うために、基幹教育科目に情報リテラシー科目（「情報リテラシー」）、基礎教育科目にプログラミング科目、数学・統計科目を配置する。
4. 知識情報システム学類、環境社会システム学類、教育福祉学類、心理学類のそれぞれで必要となる知識を修得させるため、基礎教育科目、各学類専門科目を体系的に配置する。
5. 多様な要素の相互作用としてとらえることによって現代社会における課題の本質を深く探求することができる力（システムの思考力）を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目（「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」）を配置する。
6. 複数領域の知識を横断的に用いて、現代社会における課題の解決を目指すことができる力（領域横断的応用力）を養うために、学域共通科目に各学類概論科目を配置する。
7. 現代社会の目指すべき方向性とそれを実現するための方策を説明することができる表現力を養うために、基幹教育科目に初年次導入科目（「初年次ゼミナール」）、各学類専門科目に演習科目を配置する。

(サステナビリティ志向性)

8. 現代社会の一員としての高い倫理観を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目（「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」）を配置する。
9. 持続可能な社会の実現を他者と協働して目指す態度を養うために、PBL プログラム科目（「PBL 演習」など）を配置する。

[知識情報システム学類]

学位授与に必要とされる能力（ディプロマポリシー）を養うために、以下の方針で教育課程を編成する。また、各科目の学修成果は、定期試験、レポート、授業中の小テストや発表などで評価することとし、その評価方法については、授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示する。

(知識・技能)

1. 幅広い知識・技能、多面的な視野を養うために、基幹教育科目に総合教養科目および健康・スポーツ科学科目（「健康・スポーツ科学概論」「健康・スポーツ科学実習」）を配置する。
2. 複数の言語を用いて多様な人々とコミュニケーションをとることができる能力を養うために、基幹教育科目に英語科目（「University English 1A・1B・2A・2B・3A・3B」）および初修外国語科目を配置する。

(思考力・判断力・表現力)

3. データサイエンスの知識・技能を養うために、基幹教育科目に情報リテラシー科目（「情報リテラシー」）、基礎教育科目に数学科目（「微積分 1A」「線形代数 1・2A」など）、統計科目（「統計学基礎 1・2」）およびプログラミング入門（「プログラミング入門 A」など）、学類専門科目を体系的に配置する。
4. 情報システム学、情報通信工学、人工知能学、応用情報学など、知識情報システム学類で必要となる知識を修得させるため、基礎教育科目、学類基盤科目（「コンピュータシステム」「情報ネットワーク基礎」など）、学類専門科目を体系的に配置する。
5. 多様な要素の相互作用としてとらえることによって現代社会における課題の本質を深く探求することができる力（システムの思考力）を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目（「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」）を配置する。
6. 複数領域の知識を横断的に用いて、現代社会における課題の解決を目指すことができる力（領域横断的応用力）を養うために、学域共通科目に各学類概論科目（「知識情報システム学概論」など）を配置する。
7. 現代社会の目指すべき方向性とそれを実現するための方策をデータサイエンスの技法も含めて説明することができる表現力を養うために、基幹教育科目に初年次導入科目

(「初年次ゼミナール」)、学類基盤科目に演習科目 (「知識情報システム学演習 1・2・3・4」) を配置する。

(サステナビリティ志向性)

8. 情報通信技術が人間社会ならびに環境に及ぼす影響を理解し、現代社会の一員としての高い倫理観を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目 (「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」) を配置する。
9. 持続可能な社会の実現を他者と協働して目指す態度を養うために、PBL プログラム科目 (「PBL 演習」など) を配置する。

[環境社会システム学類]

学位授与に必要とされる能力 (ディプロマポリシー) を養うために、以下の方針で教育課程を編成する。また、各科目の学修成果は、定期試験、レポート、授業中の小テストや発表などで評価することとし、その評価方法については、授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示する。

(知識・技能)

1. 幅広い知識・技能、多面的な視野を養うために、基幹教育科目に総合教養科目および健康・スポーツ科学科目 (「健康・スポーツ科学概論」「健康・スポーツ科学実習」) を配置する。
2. 複数の言語を用いて多様な人々とコミュニケーションをとることができる能力を養うために、基幹教育科目の英語科目 (「University English 1A・1B・2A・2B・3A・3B」) および初修外国語科目を配置する。

(思考力・判断力・表現力)

3. データを収集・活用することのできる知識・技能を養うために、基幹教育科目に情報リテラシー科目 (「情報リテラシー」)、基礎教育科目にプログラミング科目、数学・統計科目 (「統計学基礎 1・2」など) を配置する。
4. 自然環境学、社会環境学、環境共生学 (政策科学、環境哲学・倫理学) など、環境社会システム学類で必要となる知識を修得させるため、基礎教育科目、学類基盤科目、学類専門科目を体系的に配置する。
5. 多様な要素の相互作用としてとらえることによって現代社会における課題の本質を深く探求することができる力 (システムの思考力) を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目 (「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」) を配置する。
6. 複数領域の知識を横断的に用いて、現代社会における課題の解決を目指すことができる力 (領域横断的応用力) を養うために、学域共通科目に各学類概論科目 (「環境社会システム学概論」など) を配置する。

7. 現代社会の目指すべき方向性とそれを実現するための方策を説明することができる表現力を養うために、基幹教育科目に初年次導入科目（「初年次ゼミナール」）、学類専門科目に演習科目（「環境社会システム学演習 1・2・3」）を配置する。

（サステナビリティ志向性）

8. 自然と人との共生ならびに人と人との共生の重要性を理解し、現代社会の一員としての高い倫理観を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目（「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」）を配置する。
9. 持続可能な社会の実現を他者と協働して目指す態度を養うために、PBL プログラム科目（「PBL 演習」など）を配置する。

〔教育福祉学類〕

学位授与に必要とされる能力（ディプロマポリシー）を養うために、以下の方針で教育課程を編成する。また、各科目の学修成果は、定期試験、レポート、授業中の小テストや発表などで評価することとし、その評価方法については、授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示する。

（知識・技能）

1. 幅広い知識・技能、多面的な視野を養うために、基幹教育科目に総合教養科目および健康・スポーツ科学科目（「健康・スポーツ科学概論」「健康・スポーツ科学実習」）を配置する。
2. 複数の言語を用いて多様な人々とコミュニケーションをとることができる能力を養うために、基幹教育科目に英語科目（「University English 1A・1B・2A・2B・3A・3B」）および初修外国語科目を配置する。

（思考力・判断力・表現力）

3. データを収集・活用することのできる知識・技能を養うために、基幹教育科目に情報リテラシー科目（「情報リテラシー」）、基礎教育科目にプログラミング科目、数学・統計学科目（「統計学基礎 1・2」など）を配置する。
4. 社会福祉学、保育学、教育学、さらにジェンダー論など、教育福祉学類で必要となる知識を修得させるため、基礎教育科目、学類基盤科目（「コラボレーション論」など）、学類専門科目を体系的に配置する。
5. 多様な要素の相互作用としてとらえることによって現代社会の課題の本質を深く探求することができる力（システムの思考力）を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目（「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」）を配置する。
6. 複数領域の知識を横断的に用いて、現代社会における課題の解決を目指すことができる力（領域横断的応用力）を養うために、学域共通科目に各学類概論科目（「教育福祉学概論」など）を配置する。

7. 現代社会の目指すべき方向性とそれを実現するための方策を説明することができる表現力を養うために、基幹教育科目に初年次導入科目（「初年次ゼミナール」）、学類基盤科目に演習科目（「教育福祉ゼミナールA・B」など）を配置する。

（サステイナビリティ志向性）

8. 人権的支援、教育的支援、社会福祉的支援の重要性を理解し、現代社会の一員としての高い倫理観を養うために、学域共通科目にシステムとサステイナビリティ科目（「情報システムとサステイナビリティ」「自然システムとサステイナビリティ」「社会システムとサステイナビリティ」「人間システムとサステイナビリティ」）を配置する。
9. 持続可能な社会の実現を他者と協働して目指す態度を養うために、PBLプログラム科目（「PBL 演習」など）を配置する。

〔心理学類〕

学位授与に必要とされる能力（ディプロマポリシー）を養うために、以下の方針で教育課程を編成する。また、各科目の学修成果は、定期試験、レポート、授業中の小テストや発表などで評価することとし、その評価方法については、授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示する。

（知識・技能）

1. 幅広い知識・技能、多面的な視野を養うために、基幹教育科目に総合教養科目および健康・スポーツ科学科目（「健康・スポーツ科学概論」「健康・スポーツ科学実習」）を配置する。
2. 複数の言語を用いて多様な人々とコミュニケーションをとることができる能力を養うために、基幹教育科目に英語科目（「University English 1A・1B・2A・2B・3A・3B」）および初修外国語科目を配置する。

（思考力・判断力・表現力）

3. データを収集・活用することのできる知識・技能を養うために、基幹教育科目に情報リテラシー科目（「情報リテラシー」）、基礎教育科目にプログラミング科目、数学・統計科目を配置する。
4. 実験心理学、臨床心理学などの心理学およびその関連領域の知識を修得させるため、基礎教育科目、学類専門科目（「認知科学1（知覚・認知心理学）」、「社会・集団・家族心理学」、「臨床心理学概論」など）、学類関連科目を体系的に配置する。
5. 多様な要素の相互作用としてとらえることによって現代社会における課題の本質を深く探求することができる力（システムの思考力）を養うために、学域共通科目にシステムとサステイナビリティ科目（「情報システムとサステイナビリティ」「自然システムとサステイナビリティ」「社会システムとサステイナビリティ」「人間システムとサステイナビリティ」）を配置する。
6. 複数領域の知識を横断的に用いて、現代社会における課題の解決を目指すことができる力（領域横断的応用力）を養うために、学域共通科目に各学類概論科目（「心理学概論」など）を配置する。

7. 現代社会の目指すべき方向性とそれを実現するための方策を説明することができる表現力を養うために、基幹教育科目に初年次導入科目（「初年次ゼミナール」）、学類専門科目に演習科目（「心理演習 2」など）を配置する。

（サステナビリティ志向性）

8. 人と社会の相互作用の中で生じる心の問題を解決することの重要性を理解し、現代社会の一員としての高い倫理観を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目（「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」）を配置する。
9. 持続可能な社会の実現を他者と協働して目指す態度を養うために、PBL プログラム科目（「PBL 演習」など）を配置する。

〔未来デザインコース（FDC）〕

学位授与に必要とされる能力（ディプロマポリシー）を養うために、以下の方針で教育課程を編成する。また、各科目の学修成果は、定期試験、レポート、授業中の小テストや発表などで評価することとし、その評価方法については、授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示する。

（知識・技能）

1. 幅広い知識・技能、多面的な視野を養うために、基幹教育科目に総合教養科目および健康・スポーツ科学科目（「健康・スポーツ科学概論」「健康・スポーツ科学実習」）を配置する。
2. 複数の言語を用いて多様な人々とコミュニケーションをとることができる能力を養うために、基幹教育科目に英語科目（「University English 1A・1B・2A・2B・3A・3B」）および初修外国語科目を配置する。

（思考力・判断力・表現力）

3. データを収集・活用することのできる知識・技能を養うために、基幹教育科目に情報リテラシー科目（「情報リテラシー」）、基礎教育科目にプログラミング科目、数学・統計科目を配置する。
4. 知識情報システム学類、環境社会システム学類、教育福祉学類、心理学類のそれぞれで必要となる知識を修得させるため、基礎教育科目および各学類専門科目を体系的に配置する。
5. 多様な要素の相互作用としてとらえることによって現代社会における課題の本質を深く探求することができる力（システムの思考力）を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目（「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」）を配置する。
6. 複数領域の知識を横断的に用いて、現代社会における課題の解決を目指すことができる力（領域横断的応用力）を養うために、学域共通科目に各学類概論科目（「知識情

報システム学概論」「環境社会システム学概論」「教育福祉学概論」「心理学概論」など)を配置する。

7. 現代社会の目指すべき方向性とそれを実現するための方策を説明することができる表現力を養うために、基幹教育科目に初年次導入科目(「初年次ゼミナール」)、各学類専門科目に演習科目を配置する。
8. 現代社会の課題を自ら発見し、他者と協働して課題解決に取り組むことができる実行力を養うために、未来デザインプログラム科目(「未来デザインインターンシップ」「未来デザイン計画演習」「未来デザインPBL演習」「未来デザイン卒業研究」)を配置する。

(サステナビリティ志向性)

9. 現代社会の一員としての高い倫理観を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目(「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」)を配置する。
10. 持続可能な社会の実現を他者と協働して目指す態度を養うために、PBLプログラム科目(「PBL演習」など)を配置する。

(新旧対照表) 現代システム科学域 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
(設置趣旨(本文) 27、28、29、30、31、32、33、33、34 ページ) 4 教育課程の編成の考え方及び特色 ア 教育課程の編制方針(カリキュラムポリシー) (略) [現代システム科学域] 学位授与に必要とされる能力(ディプロマポリシー)を養うために、以下の方針で教育課程を編成する。また、各科目の学修成果は、定期試験、レポート、授業中の小テストや発表などで評価することとし、その評価方法については、授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示する。 (知識・技能) 1. 幅広い知識・技能、多面的な視野を養うために、基幹教育科目に総合教養科目および健康・スポーツ科学科目(「健康・スポーツ科学概論」「健	(設置趣旨(本文) 27、28、29、30、31、32、33 ページ) 4 教育課程の編成の考え方及び特色 ア 教育課程の編制方針(カリキュラムポリシー) (略) [現代システム科学域] 学位授与に必要とされる能力(ディプロマポリシー)を養うために、以下の方針で教育課程を編成する。また、各科目の学修成果は、定期試験、レポート、授業中の小テストや発表などで評価することとし、その評価方法については、授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示する。 (知識・技能) 1. 幅広い知識・技能、多面的な視野を養うために、基幹教育科目に総合教養科目および健康・スポーツ科学科目を配置する。

康・スポーツ科学実習」)を配置する。 2. 複数の言語を用いて多様な人々とコミュニケーションをとることができる能力を養うために、基幹教育科目に英語科目 (「University English 1A・1B・2A・2B・3A・3B」) および初修外国語科目を配置する。 (思考力・判断力・表現力) 3. データを収集・活用することのできる知識・技能を養うために、基幹教育科目に情報リテラシー科目 (「情報リテラシー」)、基礎教育科目にプログラミング科目、数学・統計科目を配置する。 4. 知識情報システム学類、環境社会システム学類、教育福祉学類、心理学類のそれぞれで必要となる知識を修得させるため、基礎教育科目、各学類専門科目を体系的に配置する。 5. 多様な要素の相互作用としてとらえることによって現代社会における課題の本質を深く探求することができる力 (システムの思考力) を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目 (「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」) を配置する。 6. 複数領域の知識を横断的に用いて、現代社会における課題の解決を目指すことができる力 (領域横断的応用力) を養うために、学域共通科目に各学類概論科目を配置する。 7. 現代社会の目指すべき方向性とそれを実現するための方策を説明することができる表現力を養うために、基	2. 複数の言語を用いて多様な人々とコミュニケーションできる能力を養うために、基幹教育科目に英語科目および初修外国語科目を配置する。 (思考力・判断力・表現力) 3. データを収集・活用することのできる知識・技能を養うために、基幹教育科目に情報リテラシー科目、基礎教育科目にプログラミング科目、数学・統計科目を配置する。 4. 知識情報システム学類、環境社会システム学類、教育福祉学類、心理学類のそれぞれで必要となる知識を修得させるため、基礎教育科目、各学類専門科目を体系的に配置する。 5. 多様な要素の相互作用としてとらえることによって現代社会における課題の本質を深く探求することができる力 (システムの思考力) を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目を配置する。 6. 複数領域の知識を横断的に用いて、現代社会における課題の解決を目指すことができる力 (領域横断的応用力) を養うために、学域共通科目に各学類概論科目を配置する。 7. 現代社会の目指すべき方向性とそれを実現するための方策を説明することができる表現力を養うために、基幹教育科目に初年次導入科目、各学類専門科目に演習科目を配置する。 (サステナビリティ志向性) 8. 現代社会の一員としての高い倫理観を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目を配置する。 9. 持続可能な社会の実現を他者と協働して目指す態度を養うために、PBLプログラムを配置する。
--	--

幹教育科目に初年次導入科目（「初年次ゼミナール」）、各学類専門科目に演習科目を配置する。 （サステナビリティ志向性） 8. 現代社会の一員としての高い倫理観を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目（「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」）を配置する。 9. 持続可能な社会の実現を他者と協働して目指す態度を養うために、PBLプログラム科目（「PBL 演習」など）を配置する。 〔知識情報システム学類〕 学位授与に必要とされる能力（ディプロマポリシー）を養うために、以下の方針で教育課程を編成する。また、各科目の学修成果は、定期試験、レポート、授業中の小テストや発表などで評価することとし、その評価方法については、授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示する。 （知識・技能） 1. 幅広い知識・技能、多面的な視野を養うために、基幹教育科目に総合教養科目および健康・スポーツ科学科目（「健康・スポーツ科学概論」「健康・スポーツ科学実習」）を配置する。 2. 複数の言語を用いて多様な人々とコミュニケーションをとることができる能力を養うために、基幹教育科目に英語科目（「University English 1A・1B・2A・2B・3A・3B」）および初修外国語科目を配置する。	〔知識情報システム学類〕 学位授与に必要とされる能力（ディプロマポリシー）を養うために、以下の方針で教育課程を編成する。また、各科目の学修成果は、定期試験、レポート、授業中の小テストや発表などで評価することとし、その評価方法については、授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示する。 （知識・技能） 1. 幅広い知識・技能、多面的な視野を養うために、基幹教育科目に総合教養科目および健康・スポーツ科学科目を配置する。 2. 複数の言語を用いて多様な人々とコミュニケーションできる能力を養うために、基幹教育科目に英語科目および初修外国語科目を配置する。 （思考力・判断力・表現力） 3. データサイエンスの知識・技能を養うために、基幹教育科目に情報リテラシー科目、基礎教育科目に数学科
---	---

(思考力・判断力・表現力)

3. データサイエンスの知識・技能を養うために、基幹教育科目に情報リテラシー科目（「情報リテラシー」、基礎教育科目に数学科目（「微積分1A」「線形代数1・2A」など）、統計科目（「統計学基礎1・2」）およびプログラミング入門（「プログラミング入門A」など）、学類専門科目を体系的に配置する。
4. 情報システム学、情報通信工学、人工知能学、応用情報学など、知識情報システム学類で必要となる知識を修得させるため、基礎教育科目、学類基盤科目（「コンピュータシステム」「情報ネットワーク基礎」など）、学類専門科目を体系的に配置する。
5. 多様な要素の相互作用としてとらえることによって現代社会における課題の本質を深く探求することができる力（システムの思考力）を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目（「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」）を配置する。
6. 複数領域の知識を横断的に用いて、現代社会における課題の解決を目指すことができる力（領域横断的応用力）を養うために、学域共通科目に各学類概論科目（「知識情報システム学概論」など）を配置する。
7. 現代社会の目指すべき方向性とそれを実現するための方策をデータサイエンスの技法も含めて説明することができる表現力を養うために、基幹

目およびプログラミング入門、学類専門科目を体系的に配置する。

4. 情報システム学、情報通信工学、人工知能学、応用情報学など、知識情報システム学類で必要となる知識を修得させるため、基礎教育科目、学類基盤科目、学類専門科目を体系的に配置する。
5. 多様な要素の相互作用としてとらえることによって現代社会における課題の本質を深く探求することができる力（システムの思考力）を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目を配置する。
6. 複数領域の知識を横断的に用いて、現代社会における課題の解決を目指すことができる力（領域横断的応用力）を養うために、学域共通科目に各学類概論科目を配置する。
7. 現代社会の目指すべき方向性とそれを実現するための方策をデータサイエンスの技法も含めて説明することができる表現力を養うために、基幹教育科目に初年次導入科目、学類専門科目に演習科目を配置する。

(サステナビリティ志向性)

8. 情報通信技術が人間社会ならびに環境に及ぼす影響を理解し、現代社会の一員としての高い倫理観を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目を配置する。
9. 持続可能な社会の実現を他者と協働して目指す態度を養うために、PBLプログラムを配置する。

教育科目に初年次導入科目（「初年次ゼミナール」）、学類基盤科目に演習科目（「知識情報システム学演習 1・2・3・4」）を配置する。 （サステナビリティ志向性） 8. 情報通信技術が人間社会ならびに環境に及ぼす影響を理解し、現代社会の一員としての高い倫理観を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目（「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」）を配置する。 9. 持続可能な社会の実現を他者と協働して目指す態度を養うために、PBLプログラム科目（「PBL 演習」など）を配置する。 〔環境社会システム学類〕 学位授与に必要とされる能力（ディプロマポリシー）を養うために、以下の方針で教育課程を編成する。また、各科目の学修成果は、定期試験、レポート、授業中の小テストや発表などで評価することとし、その評価方法については、授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示する。 （知識・技能） - 幅広い知識・技能、多面的な視野を養うために、基幹教育科目に総合教養科目および健康・スポーツ科学科目（「健康・スポーツ科学概論」「健康・スポーツ科学実習」）を配置する。 - 複数の言語を用いて多様な人々とコミュニケーションをとることができる能力を養うために、基幹教育科目	〔環境社会システム学類〕 学位授与に必要とされる能力（ディプロマポリシー）を養うために、以下の方針で教育課程を編成する。また、各科目の学修成果は、定期試験、レポート、授業中の小テストや発表などで評価することとし、その評価方法については、授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示する。 （知識・技能） - 幅広い知識・技能、多面的な視野を養うために、基幹教育科目に総合教養科目および健康・スポーツ科学科目を配置する。 - 複数の言語を用いて多様な人々とコミュニケーションできる能力を養うために、基幹教育科目の英語科目および初修外国語科目を配置する。 （思考力・判断力・表現力）
--	---

の英語科目（「University English 1A・1B・2A・2B・3A・3B」）および初修外国語科目を配置する。 （思考力・判断力・表現力） 3. データを収集・活用することのできる知識・技能を養うために、基幹教育科目に情報リテラシー科目（「情報リテラシー」）、基礎教育科目にプログラミング科目、数学・統計科目（「統計学基礎 1・2」など）を配置する。 4. 自然環境学、社会環境学、環境哲学・政策学など、環境社会システム学類で必要となる知識を修得させるため、基礎教育科目、学類基盤科目、学類専門科目を体系的に配置する。 5. 多様な要素の相互作用としてとらえることによって現代社会における課題の本質を深く探求することができる力（システムの思考力）を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目（「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」）を配置する。 6. 複数領域の知識を横断的に用いて、現代社会における課題の解決を目指すことができる力（領域横断的応用力）を養うために、学域共通科目に各学類概論科目（「環境社会システム学概論」など）を配置する。 7. 現代社会の目指すべき方向性とそれを実現するための方策を説明することができる表現力を養うために、基幹教育科目に初年次導入科目（「初年次ゼミナール」）、学類専門科目に演	3. データを収集・活用することのできる知識・技能を養うために、基幹教育科目に情報リテラシー科目、基礎教育科目にプログラミング科目、数学・統計科目を配置する。 4. 自然環境学、社会環境学、環境共生学（政策科学、環境哲学・倫理学）など、環境社会システム学類で必要となる知識を修得させるため、基礎教育科目、学類基盤科目、学類専門科目を体系的に配置する。 5. 多様な要素の相互作用としてとらえることによって現代社会における課題の本質を深く探求することができる力（システムの思考力）を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目を配置する。 6. 複数領域の知識を横断的に用いて、現代社会における課題の解決を目指すことができる力（領域横断的応用力）を養うために、学域共通科目に各学類概論科目を配置する。 7. 現代社会の目指すべき方向性とそれを実現するための方策を説明することができる表現力を養うために、基幹教育科目に初年次導入科目、学類専門科目に演習科目を配置する。 （サステナビリティ志向性） 8. 自然と人との共生ならびに人と人との共生の重要性を理解し、現代社会の一員としての高い倫理観を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目を配置する。 9. 持続可能な社会の実現を他者と協働して目指す態度を養うために、PBLプログラムを配置する。
---	--

習科目（「環境社会システム学演習1・2・3」）を配置する。 （サステナビリティ志向性） 8. 自然と人との共生ならびに人と人との共生の重要性を理解し、現代社会の一員としての高い倫理観を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目（「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」）を配置する。 9. 持続可能な社会の実現を他者と協働して目指す態度を養うために、PBLプログラム科目を配置（「PBL 演習」など）する。 〔教育福祉学類〕 学位授与に必要とされる能力（ディプロマポリシー）を養うために、以下の方針で教育課程を編成する。また、各科目の学修成果は、定期試験、レポート、授業中の小テストや発表などで評価することとし、その評価方法については、授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示する。 （知識・技能） 1. 幅広い知識・技能、多面的な視野を養うために、基幹教育科目に総合教養科目および健康・スポーツ科学科目（「健康・スポーツ科学概論」「健康・スポーツ科学実習」）を配置する。 2. 複数の言語を用いて多様な人々とコミュニケーションをとることができる能力を養うために、基幹教育科目に英語科目（「University English	〔教育福祉学類〕 学位授与に必要とされる能力（ディプロマポリシー）を養うために、以下の方針で教育課程を編成する。また、各科目の学修成果は、定期試験、レポート、授業中の小テストや発表などで評価することとし、その評価方法については、授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示する。 （知識・技能） 1. 幅広い知識・技能、多面的な視野を養うために、基幹教育科目に総合教養科目および健康・スポーツ科学科目を配置する。 2. 複数の言語を用いて多様な人々とコミュニケーションできる能力を養うために、基幹教育科目に英語科目および初修外国語科目を配置する。 （思考力・判断力・表現力） 3. データを収集・活用することのできる知識・技能を養うために、基幹教
--	---

1A・1B・2A・2B・3A・3B)」および初修外国語科目を配置する。 (思考力・判断力・表現力) 3. データを収集・活用することのできる知識・技能を養うために、基幹教育科目に情報リテラシー科目（「情報リテラシー」）、基礎教育科目にプログラミング科目、数学・統計学科目（「統計学基礎1・2」など）を配置する。 4. 社会福祉学、保育学、教育学、さらにジェンダー論など、教育福祉学類で必要となる知識を修得させるため、基礎教育科目、学類基盤科目（「コラボレーション論」など）、学類専門科目を体系的に配置する。 5. 多様な要素の相互作用としてとらえることによって現代社会の課題の本質を深く探求することができる力（システムの思考力）を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目（「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」）を配置する。 6. 複数領域の知識を横断的に用いて、現代社会における課題の解決を目指すことができる力（領域横断的応用力）を養うために、学域共通科目に各学類概論科目（「教育福祉学概論」など）を配置する。 7. 現代社会の目指すべき方向性とそれを実現するための方策を説明することができる表現力を養うために、基幹教育科目に初年次導入科目（「初年次ゼミナール」）、学類基盤科目に演	育科目に情報リテラシー科目、基礎教育科目にプログラミング科目、数学・統計学科目を配置する。 4. 社会福祉学、保育学、教育学、さらにジェンダー論など、教育福祉学類で必要となる知識を修得させるため、基礎教育科目、学類基盤科目、学類専門科目を体系的に配置する。 5. 多様な要素の相互作用としてとらえることによって現代社会の課題の本質を深く探求することができる力（システムの思考力）を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目を配置する。 6. 複数領域の知識を横断的に用いて、現代社会における課題の解決を目指すことができる力（領域横断的応用力）を養うために、学域共通科目に各学類概論科目を配置する。 7. 現代社会の目指すべき方向性とそれを実現するための方策を説明することができる表現力を養うために、基幹教育科目に初年次導入科目、学類専門科目に演習科目を配置する。 (サステナビリティ志向性) 8. 人権的支援、教育的支援、社会福祉的支援の重要性を理解し、現代社会の一員としての高い倫理観を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目を配置する。 9. 持続可能な社会の実現を他者と協働して目指す態度を養うために、PBLプログラムを配置する。
---	---

習科目（「教育福祉ゼミナール A・B」など）を配置する。 （サステナビリティ志向性） 8. 人権的支援、教育的支援、社会福祉的支援の重要性を理解し、現代社会の一員としての高い倫理観を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目（「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」）を配置する。 9. 持続可能な社会の実現を他者と協働して目指す態度を養うために、PBLプログラム科目（「PBL 演習」など）を配置する。 〔心理学類〕 学位授与に必要とされる能力（ディプロマポリシー）を養うために、以下の方針で教育課程を編成する。また、各科目の学修成果は、定期試験、レポート、授業中の小テストや発表などで評価することとし、その評価方法については、授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示する。 （知識・技能） - 幅広い知識・技能、多面的な視野を養うために、基幹教育科目に総合教養科目および健康・スポーツ科学科目（「健康・スポーツ科学概論」「健康・スポーツ科学実習」）を配置する。 - 複数の言語を用いて多様な人々とコミュニケーションをとることができる能力を養うために、基幹教育科目に英語科目（「University English	〔心理学類〕 学位授与に必要とされる能力（ディプロマポリシー）を養うために、以下の方針で教育課程を編成する。また、各科目の学修成果は、定期試験、レポート、授業中の小テストや発表などで評価することとし、その評価方法については、授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示する。 （知識・技能） - 幅広い知識・技能、多面的な視野を養うために、基幹教育科目に総合教養科目および健康・スポーツ科学科目を配置する。 - 複数の言語を用いて多様な人々とコミュニケーションできる能力を養うために、基幹教育科目に英語科目および初修外国語科目を配置する。 （思考力・判断力・表現力） - データを収集・活用することのできる知識・技能を養うために、基幹教
---	---

1A・1B・2A・2B・3A・3B)」および初修外国語科目を配置する。 (思考力・判断力・表現力) 3. データを収集・活用することのできる知識・技能を養うために、基幹教育科目に情報リテラシー科目（「情報リテラシー」）、基礎教育科目にプログラミング科目、数学・統計科目を配置する。 4. 実験心理学、臨床心理学などの心理学およびその関連領域の知識を修得させるため、基礎教育科目、学類専門科目（「認知科学1（知覚・認知心理学）」、「社会・集団・家族心理学」、「臨床心理学概論」など）、学類関連科目を体系的に配置する。 5. 多様な要素の相互作用としてとらえることによって現代社会における課題の本質を深く探求することができる力（システムの思考力）を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目（「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」）を配置する。 6. 複数領域の知識を横断的に用いて、現代社会における課題の解決を目指すことができる力（領域横断的応用力）を養うために、学域共通科目に各学類概論科目（「心理学概論」など）を配置する。 7. 現代社会の目指すべき方向性とそれを実現するための方策を説明することができる表現力を養うために、基幹教育科目に初年次導入科目（「初年次ゼミナール」）、学類専門科目に演	育科目に情報リテラシー科目、基礎教育科目にプログラミング科目、数学・統計科目を配置する。 4. <u>認知科学、社会・環境心理学</u>、臨床心理学などの心理学およびその関連領域の知識を修得させるため、基礎教育科目、学類専門科目、学類関連科目を体系的に配置する。 5. 多様な要素の相互作用としてとらえることによって現代社会における課題の本質を深く探求することができる力（システムの思考力）を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目を配置する。 6. 複数領域の知識を横断的に用いて、現代社会における課題の解決を目指すことができる力（領域横断的応用力）を養うために、学域共通科目に各学類概論導入を配置する。 7. 現代社会の目指すべき方向性とそれを実現するための方策を説明することができる表現力を養うために、基幹教育科目に初年次導入科目、学類専門科目に演習科目を配置する。 (サステナビリティ志向性) 8. 人と社会の相互作用の中で生じる心の問題を解決することの重要性を理解し、現代社会の一員としての高い倫理観を養うために、学域共通科目にシステムとサステナビリティ科目を配置する。 9. 持続可能な社会の実現を他者と協働して目指す態度を養うために、PBLプログラムを配置する。
--	--

習科目（「心理演習 2」など）を配置する。 （サステナビリティ志向性） 8. 人と社会の相互作用の中で生じる心 の問題を解決することの重要性を理 解し、現代社会の一員としての高い 倫理観を養うために、学域共通科目 にシステムとサステナビリティ科目 （「情報システムとサステナビリ ティ」「自然システムとサステナビ リティ」「社会システムとサステイナ ビリティ」「人間システムとサステイ ナビリティ」）を配置する。 9. 持続可能な社会の実現を他者と協働 して目指す態度を養うために、PBL プログラム科目（「PBL 演習」など） を配置する。 〔未来デザインコース（FDC）〕 学位授与に必要とされる能力（ディプロ マポリシー）を養うために、以下の方針で 教育課程を編成する。また、各科目の学修 成果は、定期試験、レポート、授業中の小 テストや発表などで評価することとし、そ の評価方法については、授業内容の詳細と あわせてシラバスにおいて科目ごとに明示 する。 （知識・技能） 1. 幅広い知識・技能、多面的な視野を 養うために、基幹教育科目に総合教 養科目および健康・スポーツ科学科 目（「健康・スポーツ科学概論」「健 康・スポーツ科学実習」）を配置す る。 2. 複数の言語を用いて多様な人々とコ ミュニケーションをとることができる 能力を養うために、基幹教育科目 に英語科目（「University English	〔未来デザインコース（FDC）〕 学位授与に必要とされる能力（ディプロ マポリシー）を養うために、以下の方針で 教育課程を編成する。また、各科目の学修 成果は、定期試験、レポート、授業中の小 テストや発表などで評価することとし、そ の評価方法については、授業内容の詳細と あわせてシラバスにおいて科目ごとに明示 する。 （知識・技能） 1. 幅広い知識・技能、多面的な視野を 養うために、基幹教育科目に総合教 養科目および健康・スポーツ科学科 目を配置する。 2. 複数の言語を用いて多様な人々とコ ミュニケーションできる能力を養う ために、基幹教育科目に英語科目お よび初修外国語科目を配置する。 （思考力・判断力・表現力） 3. データを収集・活用することのでき る知識・技能を養うために、基幹教
--	---

1A・1B・2A・2B・3A・3B)」および初 修外国語科目を配置する。 (思考力・判断力・表現力) 3. データを収集・活用することのできる知識・技能を養うために、基幹教育科目に情報リテラシー科目（「情報リテラシー」）、基礎教育科目にプログラミング科目、数学・統計科目を配置する。 4. 知識情報システム学類、環境社会システム学類、教育福祉学類、心理学類のそれぞれで必要となる知識を修得させるため、基礎教育科目および各学類専門科目を体系的に配置する。 5. 多様な要素の相互作用としてとらえることによって現代社会における課題の本質を深く探求することができる力（システムの思考力）を養うために、学域共通科目にシステムとサステイナビリティ科目（「情報システムとサステイナビリティ」「自然システムとサステイナビリティ」「社会システムとサステイナビリティ」「人間システムとサステイナビリティ」）を配置する。 6. 複数領域の知識を横断的に用いて、現代社会における課題の解決を目指すことができる力（領域横断的応用力）を養うために、学域共通科目に各学類概論科目（「知識情報システム学概論」「環境社会システム学概論」「教育福祉学概論」「心理学概論」など）を配置する。 7. 現代社会の目指すべき方向性とそれを実現するための方策を説明することができる表現力を養うために、基幹教育科目に初年次導入科目（「初年	育科目に情報リテラシー科目、基礎教育科目にプログラミング科目、数学・統計科目を配置する。 4. 知識情報システム学類、環境社会システム学類、教育福祉学類、心理学類のそれぞれで必要となる知識を修得させるため、基礎教育科目および各学類専門科目を体系的に配置する。 5. 多様な要素の相互作用としてとらえることによって現代社会における課題の本質を深く探求することができる力（システムの思考力）を養うために、学域共通科目にシステムとサステイナビリティ科目を配置する。 6. 複数領域の知識を横断的に用いて、現代社会における課題の解決を目指すことができる力（領域横断的応用力）を養うために、学域共通科目に各学類概論科目を配置する。 7. 現代社会の目指すべき方向性とそれを実現するための方策を説明することができる表現力を養うために、基幹教育科目に初年次導入科目、各学類専門科目に演習科目を配置する。 (サステイナビリティ志向性) 8. 現代社会の一員としての高い倫理観を養うために、学域共通科目にシステムとサステイナビリティ科目を配置する。 9. 持続可能な社会の実現を他者と協働して目指す態度を養うために、PBLプログラムを配置する。
---	---

次ゼミナール」)、各学類専門科目に演習科目を配置する。 8. 現代社会の課題を自ら発見し、他者と協働して課題解決に取り組むことができる実行力を養うために、未来デザインプログラム科目（「未来デザインインターンシップ」「未来デザイン計画演習」「未来デザイン PBL 演習」「未来デザイン卒業研究」）を配置する。 (サステイナビリティ志向性) 9. 現代社会の一員としての高い倫理観を養うために、学域共通科目にシステムとサステイナビリティ科目（「情報システムとサステイナビリティ」「自然システムとサステイナビリティ」「社会システムとサステイナビリティ」「人間システムとサステイナビリティ」）を配置する。 10. 持続可能な社会の実現を他者と協働して目指す態度を養うために、PBLプログラム科目（「PBL 演習」など）を配置する。	
---	--

6. 【全体計画審査意見 17 の回答について】

新たに配置された、「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」の4科目については、それぞれの第15回目で、「システム間の相互作用を理解するために、4つの授業の担当教員が相互乗り入れし、対談形式で解説する部分を設ける」とあるが、4つのシステムに関する予備知識がない学生が対談を聴講することで得られる教育効果が必ずしも明確ではないため、学生にシステム間の相互作用を理解・定着させるための方策を具体的に説明すること。

(対応)

「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」は、全て1年次前期配当の必修科目であるため、現代システム科学域の全ての1年次生が同時に履修する。そのため、第15回の時点で全履修者が4つのシステムに関する入門的知識を身に付けている。

各授業の第1回目に共通の教材を用いたイントロダクションを設定し、それぞれの授業科目の代表教員が現代システム科学の概念、現代システムの中の情報システム・自然システム・社会システム・人間システムの位置付けと役割、システムの思考力の重要性などについて、各授業で扱うシステムの観点から講義する。これにより、4つのシステムの関連を最初に理解させるとともに、4つの授業が一体となってカリキュラムを構成していることを学生に意識付ける。扱う内容についてはあらかじめ担当者間で打ち合わせ、共通の事例を用いることにより、4つのシステムの独自の観点と関連性について説明する。例えばパンデミックを事例として用いる場合、情報システムの観点からは情報通信技術による人流の測定や制御、自然システムの観点からはグローバル化の急速な進行による生態系の擾乱、社会システムの観点からはワクチン接種等における国際的な格差、人間システムの観点からは感染者への差別や誤情報の拡散などを取り上げ、それぞれの授業において、システム間の関連（例：SNSにおける誤情報の拡散の問題）を含めて講義を行う。

第15回の総括において、4つの科目の担代表者が全員登壇し、対談形式で各システムのつながりについて解説する時間を設ける。学生は、別々の授業で講義していた教員が、それぞれの学問分野の立場から各システムについて議論するのを聴くことになる。通常の授業において、学生は「教授される内容を授業ごとに学修する」という構えを持っているが、別々の授業で講義していた教員が一堂に会して対談を行うことで、その構えを崩し、個々の授業で教授される内容が互いに連関していることを学生に実感させ、4つのシステムの相互作用に関する理解を促進することが期待できる。また、各教員がそれぞれの授業において、他の3つのシステムとのつながりを述べても学生にとっての実感は薄いのが、4つのシステムのそれぞれの分野の教員同士による対談を聴講することにより、領域横断的な対話が行われる様子を実際に目にすることが、4つのシステムの相互作用に関する理解を促進することが期待できる。上記のように対談は1つのテーマを定めて行われるため、学生は、1つのテーマに対して4つのシステムの観点からどのようにアプローチを行うのか、それらのアプロー

チを組み合わせることによって、どのような相乗効果が生まれるのかを学ぶことができる。これは、領域横断的応用力の実践について学ぶことに他ならない。

4つの授業は少人数のコア教員が担当するオムニバス形式であるため、第15回で登壇する4名の教員は4つの授業間で異なり、それにより網羅的な総括が可能になる。それぞれの授業の最終回において、異なる視点を持つ教員同士の対談を聞くことにより、学生は異なる観点から繰り返し各システムのつながりと領域横断的応用力の実践について学ぶことができ、システム間の相互作用と領域横断的応用に関する理解を効果的に定着させることができる。

なお、シラバスにおいて第15回の対談を記載していなかったため、「情報システムとサステイナビリティ」「自然システムとサステイナビリティ」「社会システムとサステイナビリティ」「人間システムとサステイナビリティ」のシラバスの第15回に、次の内容を追記する。

※「情報システムとサステイナビリティ」「自然システムとサステイナビリティ」「社会システムとサステイナビリティ」「人間システムとサステイナビリティ」の担当教員4名が登壇し、システム同士の関係性について対談形式で解説する。

[情報システムとサステイナビリティ シラバス]

授業名称		担当教員氏名	
情報システムとサステイナビリティ		菅野正嗣、宮本貴朗、瀬田和久、渡邊真治	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	1 前	必修	講義

授業概要
現代システムの中の情報システムの重要性について講義する。また、情報システムの歴史的変遷と、それがネットワークによって連携することによって、現代社会においてどのような役割を果たしているかについて解説する。さらに、情報倫理と情報セキュリティや、情報システムを活用した学習支援、経営における情報の役割について説明し、最後に、情報システムの観点から見たサステイナビリティ（持続可能性）について考察する。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代システムの中の情報システムの重要性について説明できること。 2. 情報システムと情報ネットワークの関連について説明できること。 3. 情報倫理とセキュリティについて説明できること。 4. 情報システムを活用した学習支援と持続可能社会について説明できること。 5. 経営における情報の役割について説明できること。 6. 情報システムの観点から見た持続可能性について説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション、現代システムの中の情報システム／第1回レポート（菅野）	授業で話された内容を復習する。
第2回	情報システムの成り立ち（菅野）	授業で話された内容を復習する。
第3回	情報システムをつなぐネットワーク（菅野）	授業で話された内容を復習する。
第4回	IoT とスマートシティ（菅野）	授業で話された内容を復習する。
第5回	デジタルトランスフォーメーション／第2回レポート（菅野）	授業で話された内容を復習する。
第6回	サイバー犯罪とサイバーテロ（宮本）	授業で話された内容を復習する。
第7回	個人情報保護とプライバシー（宮本）	授業で話された内容を復習する。
第8回	情報セキュリティ／第3回レポート（宮本）	授業で話された内容を復習する。
第9回	構造を有する情報の表現と探索（瀬田）	授業で話された内容を復習する。
第10回	ハイパー構造を活用した AI による学習支援（瀬田）	授業で話された内容を復習する。
第11回	誰一人取り残さないためのスキーマ構造の体制化を促す学習支援／第4回レポート（瀬田）	授業で話された内容を復習する。
第12回	日本の情報化の現状 2025 の崖（渡邊）	授業で話された内容を復習する。
第13回	経営における情報の役割（渡邊）	授業で話された内容を復習する。
第14回	経営情報／第5回レポート（渡邊）	授業で話された内容を復習する。
第15回	情報システムの観点から見た持続可能性／第6回レポート（菅野） 「情報システムとサステナビリティ」「自然システムとサステナビリティ」「社会システムとサステナビリティ」「人間システムとサステナビリティ」の担当者教員4名が登壇し、システム同士の関係性について対談形式で解説する。	授業内で指示する。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代システムの中の情報システムの重要性について説明できること。 2. 情報システムと情報ネットワークの関連について説明できること。 3. 情報倫理とセキュリティについて説明できること。 4. 情報システムを活用した学習支援と持続可能社会について説明できること。 5. 経営における情報の役割について説明できること。 6. 情報システムの観点から見た持続可能性について説明できること。 の6点を達成することが求められる。 成績は、授業中に課す6回のレポートで評価する。

履修上の注意
関連科目： 自然システムとサステイナビリティ、社会システムとサステイナビリティ、人間システムとサステイナビリティ
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

[自然システムとサステイナビリティ シラバス]

授業名称		担当教員氏名	
自然システムとサステイナビリティ		大塚耕司、伊藤康人、竹中規訓	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	1 前	必修	講義

授業概要
現代システムの中の自然システムの重要性について講義する。また、地球そのものの成り立ち、現在の地球の構造から、大気や海洋の循環と大気や海洋への人間活動による影響について解説する。さらに、生態系のしくみと、生態系が人間にもたらすサービスについて説明し、最後に、自然システムの観点から見たサステイナビリティ（持続可能性）について考察する。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代システムの中の自然システムの重要性について説明できること。 2. 地球の起源と歴史、現在の地球の構造について説明できること。 3. 大気の循環と大気に関わるさまざまな環境問題について説明できること。 4. 水の循環と海洋に関わるさまざまな環境問題について説明できること。 5. 生態系のしくみ、生態系サービスについて説明できること。 6. 自然システムの観点から見た持続可能性について説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション、現代システムの中の自然システム／第1回レポート（大塚）	授業で話された内容を復習する。
第2回	太陽系と地球の誕生（伊藤）	授業で話された内容を復習する。
第3回	地球の歴史と生物の進化（伊藤）	授業で話された内容を復習する。
第4回	現在の地球の構造（伊藤）	授業で話された内容を復習する。
第5回	大気の循環と大気汚染（竹中）	授業で話された内容を復習する。
第6回	酸性雨とエアロゾル(PM _{2.5})（竹中）	授業で話された内容を復習する。
第7回	地球温暖化と成層圏破壊（竹中）	授業で話された内容を復習する。
第8回	水の性質と循環（大塚）	授業で話された内容を復習する。
第9回	海洋の構造と物質循環（大塚）	授業で話された内容を復習する。
第10回	人間活動による海洋環境への影響（大塚）	授業で話された内容を復習する。
第11回	生態系（エコシステム）のしくみ（大塚）	授業で話された内容を復習する。
第12回	生態系が人間にもたらすサービス（大塚）	授業で話された内容を復習する。
第13回	資源開発と生態系破壊の歴史（大塚）	授業で話された内容を復習する。
第14回	第2回授業から第13回授業までの振り返りと授	授業で話された内容を復習する。

	業内容のまとめ（大塚）	
第15回	自然システムの観点から見た持続可能性／第2回レポート（大塚） 「情報システムとサステイナビリティ」「自然システムとサステイナビリティ」「社会システムとサステイナビリティ」「人間システムとサステイナビリティ」の担当者教員4名が登壇し、システム同士の関係性について対談形式で解説する。	授業内で指示する。
第16回	期末試験（大塚）	授業内で指示する。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代システムの中の自然システムの重要性について説明できること。 2. 地球の起源と歴史、現在の地球の構造について説明できること。 3. 大気の循環と大気に関わるさまざまな環境問題について説明できること。 4. 水の循環と海洋に関わるさまざまな環境問題について説明できること。 5. 生態系のしくみ、生態系サービスについて説明できること。 6. 自然システムの観点から見た持続可能性について説明できること。 の6点を達成することが求められる。 成績は、授業中に課す2回のレポート（20%）、および期末試験（80%）で評価する。
履修上の注意
関連科目： 情報システムとサステイナビリティ、社会システムとサステイナビリティ、人間システムとサステイナビリティ
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

[社会システムとサステイナビリティ シラバス]

授業名称		担当教員氏名	
社会システムとサステイナビリティ		上柿崇英、西尾純二、児島亜紀子、西田芳正、伊井直比呂	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	1 前	必修	講義

授業概要
現代システムの中の社会システムの重要性について講義する。また、現代社会を成り立たせる人間観とそれを支える価値、制度、慣習、思考様式などの意義、並びにそれらに基づく課題解決の新たな志向について説明する。最後に、社会システムの観点から見たサステイナビリティ（持続可能性）について考察する。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代システムの中の社会システムの重要性について説明できること。 2. 共生社会と哲学・思想の役割について説明できること。 3. 慣習と文化との関係、およびそれらと伝統との関係について説明できること 4. 近代福祉国家観とその歴史、および現代の課題について説明できること 5. 教育の未来創造の役割と現状について説明できること。

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション、現代システムの中の社会システム／（伊井）	授業で話された内容を復習する。
第2回	サステイナビリティ概念と社会（上柿）	授業で話された内容を復習する。
第3回	「社会システム」を考える（上柿）	授業で話された内容を復習する。
第4回	哲学・思想の方法論と共生社会（上柿） 第1回レポート	授業で話された内容を復習する。
第5回	慣習と社会の形成（西尾）	授業で話された内容を復習する。
第6回	言語・文学・芸術などの文化事象の伝統性と表象性（西尾）	授業で話された内容を復習する。
第7回	社会問題化する慣習（西尾） 第2回レポート	授業で話された内容を復習する。
第8回	福祉国家の思想と歴史（児島）	授業で話された内容を復習する。
第9回	人口縮小社会と福祉・社会制度（児島）	授業で話された内容を復習する。
第10回	災害など社会変動の被害を最も受けやすい人が受ける影響の最小化とそれらに対する強靱化（児島） 第3回レポート	授業で話された内容を復習する。
第11回	貧富の差の社会的本質（西田）	授業で話された内容を復習する。
第12回	教育を規定する社会・社会を作り変える教育（西田）	授業で話された内容を復習する。
第13回	地域社会の活力と諸課題（西田） 第4回レポート	授業で話された内容を復習する。
第14回	グローバルシステムの未来への選択（伊井）	授業で話された内容を復習する。

第15回	社会システムの中の持続可能性の発見（伊井） 第5回レポート 「情報システムとサステイナビリティ」「自然システムとサステイナビリティ」「社会システムとサステイナビリティ」「人間システムとサステイナビリティ」の担当者教員4名が登壇し、システム同士の関係性について対談形式で解説する。	授業で話された内容を復習する。
------	--	-----------------

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代システムの中の社会システムの重要性について説明できること。 2. 共生社会と哲学・思想の役割について説明できること。 3. 慣習と文化との関係、およびそれらと伝統との関係について説明できること 4. 福祉国家観と縮小社会、あるいは社会的脆弱性について説明できること 5. 貧富の差の社会的本質と教育の未来創造の役割について説明できること 6. 講義を通して全体の関連が説明できること。 の6点を達成することが求められる。 成績は、授業中に課す5回のレポートで評価する。
履修上の注意
関連科目：自然システムとサステイナビリティ、情報システムとサステイナビリティ、人間システムとサステイナビリティ
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

[人間システムとサステナビリティ シラバス]

授業名称		担当教員氏名	
人間システムとサステナビリティ		牧岡省吾、高橋幸治、東優子、工藤宏司	
単位数	配当年次	必修・選択・自由の別	授業形態
2	1 前	必修	講義

授業概要
現代システムの中の人間システムの重要性について講義する。人間（ヒト）という種が進化によって成立した過程、人間の心と進化との関係（進化心理学の観点）、利他行動、心の病や悩みや問題の人間にとっての意味と潜在している可能性、行為と社会的規範の関係、人間開発と人の可能性の関係について説明し、最後に、人間システムの観点から見たサステナビリティ（持続可能性）について考察する。
到達目標
本授業では、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代システムの中の人間システムの重要性について説明できること。 2. 人間（ヒト）という種の心のありかたと進化の関係について説明できること。 3. 心の病や悩みや問題の人間（ヒト）にとっての意味と潜在している可能性について説明できること 4. 行為が社会的規範とどのような関係にあるかについて説明できること 5. 人間開発と人の可能性の関係について説明できること 6. 人間システムの観点から見た持続可能性について説明できること

授業回	各回の授業内容	事前・事後学習の内容
第1回	オリエンテーション、現代システムの中の人間システム／第1回小レポート（牧岡）	授業で話された内容を復習する。
第2回	進化の仕組みとヒトの進化の歴史（牧岡）	授業で話された内容を復習する。
第3回	ヒトはなぜ社会をつくることができるのか（牧岡）	授業で話された内容を復習する。
第4回	ヒトの心と意見の分断（牧岡）／第2回小レポート（牧岡）	授業で話された内容を復習する。
第5回	ヒトの心の病のメカニズム（高橋）	授業で話された内容を復習する。
第6回	臨床の知（高橋）	授業で話された内容を復習する。
第7回	悩み・症状・問題の発展可能性（高橋）	授業で話された内容を復習する。
第8回	心理療法におけるセラピストの仕事（高橋）	授業で話された内容を復習する。
第9回	創造の病と文化の病（高橋）／第3回小レポート（高橋）	授業で話された内容を復習する。

第10回	「感情」はどのような意味で「社会的問題」になるのか（工藤）	授業で話された内容を復習する。
第11回	「感情規則」と「感情労働」（工藤）	授業で話された内容を復習する。
第12回	行為と社会的規範（工藤）／第 4 回小レポート（工藤）	授業で話された内容を復習する。
第13回	ジェンダーと社会（東）	授業で話された内容を復習する。
第14回	人間開発としてのジェンダーの位置づけ（東）／第 5 回小レポート（工藤）	授業で話された内容を復習する。
第15回	人間システムの観点から見た持続可能性／第 6 回小レポート（牧岡） 「情報システムとサステイナビリティ」「自然システムとサステイナビリティ」「社会システムとサステイナビリティ」「人間システムとサステイナビリティ」の担当者教員 4 名が登壇し、システム同士の関係性について対談形式で解説する。	授業内で指示する。

成績評価方法
到達目標の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代システムの中の人間システムの重要性について説明できること。 2. 人間（ヒト）という種の心のありかたと進化の関係について説明できること。 3. 心の病や悩みや問題の人間（ヒト）のにとっての意味と潜在している可能性について説明できること 4. 行為が社会的規範とどのような関係にあるかについて説明できること 5. 人間開発と人の可能性の関係について説明できること 6. 人間システムの観点から見た持続可能性について説明できること の 6 点を達成することが求められる。 成績は、授業中に課す 6 回の小レポートで評価する。
履修上の注意
関連科目：自然システムとサステイナビリティ、情報システムとサステイナビリティ、社会システムとサステイナビリティ
教科書
授業中に資料を配布する。
参考文献
授業中に適宜紹介する。

(新旧対照表) 現代システム科学域 知識情報システム学類 シラバス

新	旧
※審査意見を受けて、修正したシラバスの科目名及び修正した項目を示す。 (シラバス－3 ページ) 情報システムとサステイナビリティ ・各回の授業内容	(シラバス－3 ページ) 情報システムとサステイナビリティ

(新旧対照表) 現代システム科学域 環境社会システム学類 シラバス

新	旧
※審査意見を受けて、修正したシラバスの科目名及び修正した項目を示す。 (シラバス－5 ページ) 自然システムとサステイナビリティ ・各回の授業内容	(シラバス－4 ページ) 自然システムとサステイナビリティ
(シラバス－7 ページ) 社会システムとサステイナビリティ ・各回の授業内容 ・成績評価方法 ・履修上の注意	(シラバス－6 ページ) 社会システムとサステイナビリティ
(シラバス－9 ページ) 人間システムとサステイナビリティ ・各回の授業内容	(シラバス－8 ページ) 人間システムとサステイナビリティ
※教育福祉学類のシラバスについては、「社会システムとサステイナビリティ」「人間システムとサステイナビリティ」を、心理学類のシラバスについては「人間システムとサステイナビリティ」を上記と同様の修正を行う。	

(改善事項) 現代システム科学域 (共通)

7. 【全体計画審査意見 21 の回答について】

PBL プログラムごとの科目や単位数を示した資料「PBL プログラム履修課程」について、当該資料だけでは履修方法が不明確であることから、学生が履修の方法を理解できるよう説明を加えること。また、「入学時に行う履修ガイダンスで『PBL プログラム履修ガイド』を基に周知する」とあるが、学生が履修方法について誤解しないよう、当該ガイダンス以外に講じる措置があれば説明すること。

(対応)

「PBL プログラム履修課程」に、以下の内容を追記する。

卒業までに少なくとも 1 つの PBL プログラムを修了する必要があります。各プログラムを修了するためには、「履修を指定する科目数」に記載された数の授業科目分の単位を修得する必要があります。全学類において、PBL プログラムで修得した単位は、総合教養科目は総合教養科目として、基礎教育科目は基礎教育科目として、自学類専門科目は自学類専門科目として、PBL 演習、他学類基盤科目、他学類専門科目は PBL プログラム科目として、それぞれ卒業要件単位に算入されます。また、知識情報システム学類、環境社会システム学類、教育福祉学類においては、自学類基盤科目は自学類基盤科目として卒業要件単位に算入されます。心理学類においては、自学類関連科目は自学類関連科目として卒業要件単位に算入されます。

履修する PBL プログラムを決める前に、複数の PBL プログラムの授業科目を履修することができます。「PBL プログラム履修課程」に含まれる授業科目は、最終的に選択したプログラム以外の授業科目も含めて、全て上記の基準で卒業要件単位に算入されます。

また、「PBL プログラム履修課程」の「履修を指定する科目数」欄に記載する科目数について、指定する科目数より多くの授業科目が記載されている場合は、「履修を指定する科目数」欄に「以上」を追加する。例えば PBL プログラム「生産システム科学」では、「A I プログラミング」「人工知能 A」のうちいずれか 1 科目を履修すれば指定する単位数を満たすため、「履修を指定する科目数」欄の記述を「1 科目以上」に修正する。その他にも、備考欄に記載漏れがあったため、修正する。

加えて、入学時に行う履修ガイダンスだけでなく、1 年次後期、2 年次前期の開始前に行う各学類のオリエンテーションでも、「PBL プログラム履修ガイド」を用いて説明を行う。また、各学類の学生アドバイザーは、PBL プログラムを含む履修に関する相談を随時受け付ける。

現代システム科学域 PBLプログラム履修課程

PBLプログラム	科 目	単位 (印必修)	週 時 間 数								履修を指定する科目数	卒業要件	備 考
			第1年次		第2年次		第3年次		第4年次				
			前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期			
ビジネスブレディクション	プログラミング入門A	②		2							5科目		*基礎教育科目
	ビジネス・インプリメンテーション	②			2								*知識情報科目
	ビジネス・アナリティクス	②				2							*知識情報科目
	データ科学	②				2							*知識情報科目
生産システム科学	P B L 演 習	②						2			3科目	5科目以上	*PBL科目
	生産システム科学	②			2								*知識情報科目
	生産管理システム	②				2							*知識情報科目
	生産科学	③					2						*知識情報科目
	AIプログラミング	②				2							*知識情報科目
	人工知能A	②					2						*知識情報科目
ヘルスケア科学	P B L 演 習	③							2		5科目		*PBL科目
	医学概論(人体の構造と機能及び疾病)	②		2									*心理科目
	公衆衛生学	②			2								*福祉シス科目
	ヘルスケアシステム	②			2								*知識情報科目
サービスデザイン	ヘルスケアサービス	②				2					1科目以上	5科目以上	*知識情報科目
	P B L 演 習	②						2					*PBL科目
	コンピュータシステム	②			2								*知識情報科目
	情報ネットワーク基礎	②			2								*知識情報科目
	データベース基礎	②			2								*知識情報科目
	マーケティング・サイエンス	②					2						*知識情報科目
教育情報システムデザイン	ヒューマンコンピュータインタラクション	②						2			4科目		*知識情報科目
	人工知能A	②						2					*知識情報科目
	P B L 演 習	②						2					*知識情報科目
	情報ネットワーク基礎	②			2								*PBL科目
	教育情報学	②				2							*知識情報科目
	教育・学習の理論と設計	②					2						*知識情報科目
情報ネットワークシステム	人工知能B	②						2			3科目	5科目以上	*知識情報科目
	P B L 演 習	②							2				*知識情報科目
	プログラミング入門A	②		2									*基礎教育科目
	情報ネットワーク基礎	②				2							*知識情報科目
	コンピュータシステム	②				2							*知識情報科目
	Webシステム構築基礎	②					2						*知識情報科目
環境学	情報通信工学概論	②						2			1科目以上	5科目以上	*知識情報科目
	P B L 演 習	②							2				*PBL科目
	環境・生命・倫理	②	2										*総合教養科目
	自然環境学概論	②		2									*総合教養科目
	環境政策学	③				2							*福祉シス科目
	技術と環境	②			2								*総合教養科目
	人間と居住環境	②			2								*総合教養科目
	生命と環境	②			2								*総合教養科目
	国際開発の課題	②			2								*総合教養科目
地域再生	地域文化学	②			2						2科目	5科目以上	*総合教養科目
	大阪の自然	②			2								*総合教養科目
	P B L 演 習	③							2				*PBL科目
	大阪の都市づくり	③	2										*総合教養科目
	地域実践演習	③		2									*福祉シス科目
	環境・生命・倫理	②	2										*総合教養科目
環境再生	自然環境学概論	②			2						2科目以上	5科目以上	*総合教養科目
	公共政策学基礎	②				2							*福祉シス科目
	P B L 演 習	②							2				*PBL科目
	大阪の都市づくり	②	2										*総合教養科目
	自然環境学概論	②		2									*総合教養科目
企業と持続可能な社会	海城環境再生学	②					2				5科目		*福祉シス科目
	陸域環境再生学	②						2					*福祉シス科目
	P B L 演 習	②							2				*PBL科目
	企業経済学	②					2						*福祉シス科目
	環境経済・経営学	②					2						*福祉シス科目
	経済活動と法	②			2								*福祉シス科目
ESD-A (資格系)	環境法1	②					2				3科目以上	5科目以上	*福祉シス科目
	P B L 演 習	③							2				*PBL科目
	社会科教育法(公民分野)1A	②				2							*福祉シス科目
	社会科教育法(公民分野)2A	②				2							*教育福祉科目
	福祉科教育法A	②				2							*心理科目
	福祉科教育法B	②				2							*教育福祉科目
	倫理学	②		2									*福祉シス科目
	政治学	②			2								*教育福祉科目
	社会学基礎	②			2								*福祉シス科目
ESD-A (資格系)	国際教育と開発	②				2					2科目		*教育福祉科目
	P B L 演 習	②							2				*心理科目
													*PBL科目

PBLプログラム	科 目	単 位 (○印必 修)	週 時 間 数								履修を指定する科目数	卒業要件	備考
			第1年次		第2年次		第3年次		第4年次				
			前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期			
ESD-B (資格系)	社会科学教育法(地歴分野)1A	2		2						3科目以上	5科目以上	*福祉シス科目 *教育福祉科目	
	社会科学教育法(地歴分野)2A	2		2								*福祉シス科目 *教育福祉科目 *福祉シス科目 *教育福祉科目 *心理科目	
	日 本 史 概 説	2		2								*福祉シス科目 *教育福祉科目 *心理科目	
	外 国 会 史	2		2								*福祉シス科目 *教育福祉科目 *心理科目	
	自 然 地 理 学	2		2								*福祉シス科目 *教育福祉科目 *心理科目	
	国 際 教 育 と 開 発	②			2							*福祉シス科目 *教育福祉科目 *心理科目	
	P B L 演 習	②				2				*PBL科目			
社会調査(資格系)	社 会 調 査 論 *	②		2						1科目	1科目以上	5科目以上	*福祉シス科目 *福祉シス科目 *教育福祉科目 *心理科目 *福祉シス科目 *教育福祉科目 *総合教養科目 *福祉シス科目 *教育福祉科目 *心理科目
	社 会 学 基 礎	2		2									*福祉シス科目 *教育福祉科目 *心理科目
	地 理 学 基 礎	2		2									*福祉シス科目 *教育福祉科目
	文 化 人 類 学 入 門	2		2									*総合教養科目
	現代の社会問題と社会運動	2		2						1科目以上、ただし 社会調査士取得 のためには*科目 が必修			*福祉シス科目 *教育福祉科目 *心理科目
	環 境 社 会 学	2		2						*福祉シス科目			
	質 的 調 査 法 *	2			2					*福祉シス科目			
	資 料 分 析 法 *	2				2				*福祉シス科目			
	調 査 設 計 法 *	2				2				*福祉シス科目 *教育福祉科目			
	地 域 社 会 学	2		2						*福祉シス科目 *教育福祉科目 *心理科目			
	ジェンダーと社会	2		2						1科目以上			*福祉シス科目 *教育福祉科目 *心理科目
	社会におけるネットワーク	2	2										*総合教養科目
社 会 と 統 計	2		2							*総合教養科目			
P B L 演 習 *	②				2				1科目	*PBL科目			
都市社会	文 化 と 景 観	2		2						1科目以上	5科目以上	*福祉シス科目 *教育福祉科目 *福祉シス科目 *教育福祉科目 *福祉シス科目	
	地 理 学 基 礎	2	2									*福祉シス科目 *教育福祉科目 *福祉シス科目 *教育福祉科目	
	社 会 文 化 史	2		2								*福祉シス科目 *教育福祉科目	
	社 会 政 治 思 想	2		2								*福祉シス科目 *教育福祉科目	
	都 市 と 経 済 の 地 理 学	2		2								*福祉シス科目 *教育福祉科目 *心理科目	
	地 域 研 究	2		2								*総合教養科目	
	大 阪 の 都 市 づ くり	2	2										*福祉シス科目 *教育福祉科目 *福祉シス科目 *教育福祉科目 *心理科目
	共 生 の 思 想 と 歴 史	2		2									*福祉シス科目 *教育福祉科目 *福祉シス科目 *教育福祉科目 *心理科目
	ジェンダーと社会	2		2									*福祉シス科目 *教育福祉科目 *心理科目
	地 域 社 会 学	2		2									*教育福祉科目
	教育福祉の諸問題C(多文化共生)	2		2									*福祉シス科目 *心理科目
	地 域 ・ 都 市 環 境 学	2		2									*福祉シス科目 *福祉シス科目 *心理科目
環 境 心 理 学	2		2							*心理科目			
P B L 演 習	②				2				1科目	*PBL科目			
文化表象	言 語 表 現 と 世 界 認 識	2		2						2科目以上	5科目以上	*福祉シス科目 *福祉シス科目 *福祉シス科目 *福祉シス科目 *福祉シス科目 *福祉シス科目	
	認 識 と レ ト リ ッ ク	2		2								*福祉シス科目	
	地 域 社 会 の 言 語 環 境	2		2								*福祉シス科目	
	デ ィ ス コ ー ス と 社 会	2		2								*福祉シス科目	
	グ ロー バ ル 社 会 の 文 化 表 象	2		2								*福祉シス科目	
	文 化 表 象 と 社 会 批 評	2		2								*福祉シス科目	
	言 語 の 社 会 シ ス テ ム	2		2						*福祉シス科目 *福祉シス科目 *心理科目			
	地 域 ・ 都 市 環 境 学	2		2						*教育福祉科目 *教育福祉科目 *総合教養科目			
	共 生 の 思 想 と 歴 史	2		2								*総合教養科目	
	教育福祉の諸問題C(多文化共生)	2		2								*総合教養科目	
	歴 史 の な か の 大 阪	2		2								*総合教養科目	
	国 際 文 化 の 視 点	2		2								*総合教養科目	
	こ と ば の 歴 史	2		2								*総合教養科目	
	エ ス ニ ッ ク ・ ス タ デ ィ	2		2								*総合教養科目	
	日 本 の 古 典 文 学	2		2								*総合教養科目	
	世 界 の な か の 英 語	2		2								*総合教養科目	
P B L 演 習	②				2				1科目	*PBL科目			
共生の思想	社 会 文 化 史	2		2						1科目以上	5科目以上	*福祉シス科目 *福祉シス科目 *教育福祉科目 *福祉シス科目 *福祉シス科目 *福祉シス科目	
	文 化 と 共 生	2		2								*福祉シス科目 *教育福祉科目 *福祉シス科目	
	共 生 社 会 と アイデンティティ	2		2								*福祉シス科目	
	現 代 社 会 の 倫 理 学	2		2								*福祉シス科目	
	環 境 哲 学 と 現 代 社 会	2		2								*福祉シス科目 *教育福祉科目	
	個 人 創 造 の 思 想 史	2		2								*福祉シス科目 *教育福祉科目 *心理科目	
	ジェンダーと社会	2		2						*福祉シス科目 *教育福祉科目 *心理科目			
	共 生 の 思 想 と 歴 史	2		2								*教育福祉科目	
	教育福祉の諸問題C(多文化共生)	2		2								*教育福祉科目	
	共 生 社 会 と 宗 教	2		2								*総合教養科目	
P B L 演 習	②				2				1科目	*PBL科目			

PBLプログラム	科 目	単位 (○印必修)	週 時 間 数								履修を指定する科目数	卒業要件	備考		
			第1年次		第2年次		第3年次		第4年次						
			前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期					
ジェンダー論	家 族 社 会 学	2			2						1科目以上	5科目以上	*教育福祉科目 *心理科目		
	教育福祉の諸問題B(性と人権)	2			2										
	社 会 福 祉 原 論	2					2								
	共 生 の 思 想 と 歴 史	2			2										
	ジェンダーと社会	2				2								*福祉シス科目 *教育福祉科目 *心理科目	
	教育福祉学B	2			2									*教育福祉科目	
	保 育 学 概 論	2		2										*教育福祉科目	
	乳 児 保 育 論	2			2									*教育福祉科目	
	異 文 化 の 理 解	2			2									*福祉シス科目 *心理科目	
	共生社会とアイデンティティ	2			2									*福祉シス科目 *教育福祉科目	
	文 化 と 景 観	2				2								*福祉シス科目 *教育福祉科目	
	ディスコースと社会	2			2									*福祉シス科目	
	人間システムとサステナビリティ	2	2											*学域共通科目	
	ジェンダー論入門	2	2											*総合教養科目	
コラボレーション	ジェンダーと現代社会	2			2						1科目以上	5科目以上	*総合教養科目		
	グローバル化と人権	2	2											*総合教養科目	
	スポーツと社会	2	2											*総合教養科目	
	文化と社会の心理学	2	2		2									*総合教養科目	
	P B L 演 習 ②	2					2				1科目			*PBL科目	
	コラボレーション論	2					2							*教育福祉科目	
	教育の思想と歴史	2		2										*教育福祉科目	
	スクール・ソーシャルワーク概論	2			2									*教育福祉科目	
	特別支援教育	2					2							*教育福祉科目	
	教育福祉学	2		2										*教育福祉科目	
地域および都市における排除・共生・参加	臨床心理学概論	2			2						4科目以上	5科目以上	*教育福祉科目 *心理科目		
	教育・学校心理学	2					2							*心理科目	
	P B L 演 習 ②	2					2						1科目		*PBL科目
	地域福祉論A	2			2									*教育福祉科目	
	地域福祉論B	2			2									*教育福祉科目	
	地域社会学	2			2									*教育福祉科目	
	社会福祉原論	2					2							*教育福祉科目	
	教育福祉の諸問題A(貧困と社会)	2			2									*教育福祉科目 *心理科目	
生涯学習と設計	環境哲学と現代社会	2			2						4科目以上	5科目以上	*福祉シス科目 *教育福祉科目		
	地理学基礎	2			2									*福祉シス科目 *教育福祉科目	
	地域研究	2			2									*福祉シス科目 *教育福祉科目	
	P B L 演 習 ②	2					2						1科目		*心理科目 *PBL科目
	社会教育入門	2			2									*教育福祉科目	
	保育学概論	2		2										*教育福祉科目	
	心理学と心理的支援	2		2										*教育福祉科目	
	生涯学習概論	2			2									*教育福祉科目	
生活環境と情報	教育福祉の諸問題C(多文化共生)	2			2						4科目以上	5科目以上	*教育福祉科目		
	社会教育計画	2					2							*教育福祉科目	
	教育情報学	2					2							*知識情報科目	
	教育・学習の理論と設計	2					2							*知識情報科目	
	P B L 演 習 ②	2					2				1科目			*PBL科目	
	プログラミング入門B	2		2										*基礎教育科目	
	認知情報処理	2					2				2科目			*心理科目	
	科学技術と社会	2		2										*総合教養科目	
生きることと遊び	社会におけるネットワーク	2		2							2科目以上	5科目以上	*総合教養科目		
	A I プログラミング	2			2									*知識情報科目	
	人工知能A	2					2							*知識情報科目	
	環境心理学	2			2									*心理科目	
	P B L 演 習 ②	2					2				1科目			*心理科目 *PBL科目	
	発達心理学	2			2									*心理科目	
	環境心理学	2			2									*心理科目	
	心の病理学(精神疾患とその治療)	2			2									*心理科目	
教育保障	心理療法論(心理学的支援法)	2					2				4科目以上	5科目以上	*心理科目		
	文化人類学入門	2		2											*総合教養科目
	異文化の理解	2			2										*福祉シス科目 *心理科目
	現代社会と健康	2		2										*総合教養科目	
	ヘルスケアサービス	2					2							*知識情報科目	
	精神保健学	2					2							*教育福祉科目	
	P B L 演 習 ②	2					2				1科目			*PBL科目	
	地域実践演習②	2		2									2科目		*福祉シス科目
特別支援教育	2					2						*教育福祉科目			
教育福祉学	2		2									*教育福祉科目			
教育・学校心理学	2					2						*心理科目			
スクール・ソーシャルワーク概論	2			2						2科目以上	5科目以上	*教育福祉科目			
大阪の都市づくり	2	2										*総合教養科目			
心理学と心理的支援	2		2									*教育福祉科目			
P B L 演 習 ②	2					2				1科目		*PBL科目			

PBLプログラムの履修について

- ・卒業までに少なくとも1つのPBLプログラムを修了する必要があります。
- ・各プログラムを修了するためには、「履修を指定する科目数」に記載された数の授業科目分の単位を修得する必要があります。
- ・全学類において、PBLプログラムで修得した単位は、総合教養科目は総合教養科目として、基礎教育科目は基礎教育科目として、学部専門科目は自学類専門科目として、PBL演習、他学類基礎科目、他学類専門科目はPBLプログラム科目として、それぞれ卒業要件単位に算入されます。
- ・また、知識情報システム学類、環境社会システム学類、教育福祉学類においては、自学類基礎科目は自学類基礎科目として卒業要件単位に算入されます。心理学類においては、自学類関連科目は自学類関連科目として卒業要件単位に算入されます。
- ・履修するPBLプログラムを決める前に、複数のPBLプログラムの授業科目を履修することができます。
- ・「PBLプログラム履修課程」に含まれる授業科目は、最終的に選択したプログラム以外の授業科目も含めて、全て上記の基準で卒業要件単位に算入されます。

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

いづれかのコース1つ以上履修

(新旧対照表) 現代システム科学域 知識情報システム学類 教育課程等の概要

新	旧
((再補正後) 教育課程－15、16、17 ページ) 現代システム科学域 PBL プログラム履修課程 PBL プログラム ビジネスプレディクション 科目 データ科学 備考 * 知識情報科目 * 心理科目 PBL プログラム 生産システム科学 履修を指定する科目数 5 科目 以上 科目 AI プログラミング 人工知能 A 履修を指定する科目数 1 科目 以上 PBL プログラム サービスデザイン 履修を指定する科目数 5 科目 以上 科目 コンピュータシステム 情報ネットワーク基礎 データベース基礎 履修を指定する科目数 1 科目 以上 PBL プログラム 情報ネットワークシステム 履修を指定する科目数 5 科目 以上	((再補正前) 教育課程－15、16、17 ページ) 現代システム科学域 PBL プログラム履修課程 PBL プログラム ビジネスプレディクション 科目 データ科学 備考 * 知識情報科目 PBL プログラム 生産システム科学 履修を指定する科目数 5 科目 科目 AI プログラミング 人工知能 A 履修を指定する科目数 1 科目 PBL プログラム サービスデザイン 履修を指定する科目数 5 科目 科目 コンピュータシステム 情報ネットワーク基礎 データベース基礎 履修を指定する科目数 1 科目 PBL プログラム 情報ネットワークシステム 履修を指定する科目数 5 科目

科目 Web システム構築基礎 情報通信工学概論 履修を指定する科目数 1 科目 以上 PBL プログラム 環境学 履修を指定する科目数 5 科目 以上 科目 技術と環境 人間と居住環境 生命と環境 国際開発の課題 地域文化学 大阪の自然 履修を指定する科目数 1 科目 以上 PBL プログラム 地域再生 履修を指定する科目数 5 科目 以上 科目 環境・生命・倫理 自然環境学概論 公共政策学基礎 履修を指定する科目数 2 科目 以上 備考 (科目 公共政策学基礎) * 環社シス科目 * 心理科目 PBL プログラム ESD-A (資格系) 履修を指定する科目数 5 科目 以上	科目 Web システム構築基礎 情報通信工学概論 履修を指定する科目数 1 科目 PBL プログラム 環境学 履修を指定する科目数 5 科目 科目 技術と環境 人間と居住環境 生命と環境 国際開発の課題 地域文化学 大阪の自然 履修を指定する科目数 1 科目 PBL プログラム 地域再生 履修を指定する科目数 5 科目 科目 環境・生命・倫理 自然環境学概論 公共政策学基礎 履修を指定する科目数 2 科目 備考 (科目 公共政策学基礎) * 環社シス科目 PBL プログラム ESD-A (資格系) 履修を指定する科目数 5 科目
--	---

科目 社会科教育法（公民分野）1A 社会科教育法（公民分野）2A 福祉科教育法 A 福祉科教育法 B 倫理学 政治学 社会学基礎 履修を指定する科目数 3 科目 以上 備考 （科目 社会科教育法（公民分野）1A） * 環社シス科目 * 教育福祉科目 * 心理科目 （科目 社会科教育法（公民分野）2A） * 環社シス科目 * 教育福祉科目 * 心理科目 PBL プログラム ESD-B（資格系） 履修を指定する科目数 5 科目 以上 科目 社会科教育法（地歴分野）1A 社会科教育法（地歴分野）2A 日本史概説 外国史 自然地理学 履修を指定する科目数 3 科目 以上 備考 （科目 社会科教育法（地歴分野）1A） * 環社シス科目 * 教育福祉科目 （科目 社会科教育法（地歴分野）2A）	科目 社会科教育法（公民分野）1A 社会科教育法（公民分野）2A 福祉科教育法 A 福祉科教育法 B 倫理学 政治学 社会学基礎 履修を指定する科目数 3 科目 備考 （科目 社会科教育法（公民分野）1A） * <u>教職科目（環社シス）</u> * 教育福祉科目 * <u>教職科目（心理）</u> （科目 社会科教育法（公民分野）2A） * <u>教職科目（環社シス）</u> * 教育福祉科目 * <u>教職科目（心理）</u> PBL プログラム ESD-B（資格系） 履修を指定する科目数 5 科目 科目 社会科教育法（地歴分野）1A 社会科教育法（地歴分野）2A 日本史概説 外国史 自然地理学 履修を指定する科目数 3 科目 備考 （科目 社会科教育法（地歴分野）1A） * <u>教職科目（環社シス）</u> * 教育福祉科目 * <u>教職科目（心理）</u> （科目 社会科教育法（地歴分野）2A）
---	--

*環社シス科目 *教育福祉科目 PBL プログラム 社会調査（資格系） 履修を指定する科目数 5 科目 以上 科目 社会学基礎 地理学基礎 文化人類学入門 履修を指定する科目数 1 科目 以上 科目 現代の社会問題と社会運動 環境社会学 質的調査法* 資料分析法* 調査設計法* 履修を指定する科目数 1 科目 以上、ただし社会調査士取得のためには*科目が必修 科目 地域社会学 ジェンダーと社会 社会におけるネットワーク 社会と統計 履修を指定する科目数 1 科目 以上 備考 (科目 ジェンダーと社会) *環社シス科目 *教育福祉科目 *心理科目 PBL プログラム 都市社会 履修を指定する科目数	*教職科目（環社シス） *教育福祉科目 *教職科目（心理） PBL プログラム 社会調査（資格系） 履修を指定する科目数 5 科目 科目 社会学基礎 地理学基礎 文化人類学入門 履修を指定する科目数 1 科目 科目 現代の社会問題と社会運動 環境社会学 質的調査法* 資料分析法* 調査設計法* 履修を指定する科目数 1 科目、ただし社会調査士取得のためには*科目が必修 科目 地域社会学 ジェンダーと社会 社会におけるネットワーク 社会と統計 履修を指定する科目数 1 科目 備考 (科目 ジェンダーと社会) *教育福祉科目 PBL プログラム 都市社会 履修を指定する科目数
---	---

5 科目 以上 科目 文化と景観 地理学基礎 社会文化史 社会政治思想 都市と経済の地理学 地域研究 履修を指定する科目数 1 科目 以上 科目 大阪の都市づくり 共生の思想と歴史 ジェンダーと社会 地域社会学 教育福祉の諸問題 C（多文化共生） 地域・都市環境学 環境心理学 履修を指定する科目数 1 科目 以上 備考 (科目 地域研究) ＊環社シス科目 ＊教育福祉科目 ＊心理科目 (科目 ジェンダーと社会) ＊環社シス科目 ＊教育福祉科目 ＊心理科目 (科目 地域・都市環境学) ＊環社シス科目 ＊心理科目 PBL プログラム 文化表象 履修を指定する科目数 5 科目 以上 科目 言語表現と世界認識	5 科目 科目 文化と景観 地理学基礎 社会文化史 社会政治思想 都市と経済の地理学 地域研究 履修を指定する科目数 1 科目 科目 大阪の都市づくり 共生の思想と歴史 ジェンダーと社会 地域社会学 教育福祉の諸問題 C（多文化共生） 地域・都市環境学 環境心理学 履修を指定する科目数 1 科目 備考 (科目 地域研究) ＊環社シス科目 ＊教育福祉科目 (科目 ジェンダーと社会) ＊教育福祉科目 (科目 地域・都市環境学) ＊環社シス科目 PBL プログラム 文化表象 履修を指定する科目数 5 科目 科目 言語表現と世界認識
---	---

認識とレトリック 地域社会の言語環境 ディスコースと社会 グローバル社会の文化表象 文化表象と社会批評 言語の社会システム 履修を指定する科目数 2 科目 以上 科目 地域・都市環境学 共生の思想と歴史 教育福祉の諸問題 C（多文化共生） 歴史のなかの大阪 国際文化の視点 ことばの歴史 エスニック・スタディ 日本の古典文学 世界のなかの英語 履修を指定する科目数 1 科目 以上 備考 (科目 地域・都市環境学) * 環社シス科目 * 心理科目 PBL プログラム 共生の思想 履修を指定する科目数 5 科目 以上 科目 社会文化史 文化と共生 共生社会とアイデンティティ 現代社会の倫理学 環境哲学と現代社会 個人創造の思想史 履修を指定する科目数 1 科目 以上 科目	認識とレトリック 地域社会の言語環境 ディスコースと社会 グローバル社会の文化表象 文化表象と社会批評 言語の社会システム 履修を指定する科目数 2 科目 科目 地域・都市環境学 共生の思想と歴史 教育福祉の諸問題 C（多文化共生） 歴史のなかの大阪 国際文化の視点 ことばの歴史 エスニック・スタディ 日本の古典文学 世界のなかの英語 履修を指定する科目数 1 科目 備考 (科目 地域・都市環境学) * 環社シス科目 PBL プログラム 共生の思想 履修を指定する科目数 5 科目 科目 社会文化史 文化と共生 共生社会とアイデンティティ 現代社会の倫理学 環境哲学と現代社会 個人創造の思想史 履修を指定する科目数 1 科目 科目
--	---

ジェンダーと社会 共生の思想と歴史 教育福祉の諸問題C（多文化共生） 共生社会と宗教 履修を指定する科目数 1科目以上 備考 (科目 ジェンダーと社会) *環社シス科目 *教育福祉科目 *心理科目 PBL プログラム ジェンダー論 履修を指定する科目数 5科目以上 科目 家族社会学 教育福祉の諸問題B（性と人権） 社会福祉原論 共生の思想と歴史 ジェンダーと社会 教育福祉学B 保育学概論 乳児保育論 履修を指定する科目数 1科目以上 科目 異文化の理解 共生社会とアイデンティティ 文化と景観 ディスコースと社会 人間システムとサステナビリティ ジェンダー論入門 ジェンダーと現代社会 グローバル化と人権 スポーツと社会 文化と社会の心理 履修を指定する科目数	ジェンダーと社会 共生の思想と歴史 教育福祉の諸問題C（多文化共生） 共生社会と宗教 履修を指定する科目数 1科目 備考 (科目 ジェンダーと社会) *教育福祉科目 PBL プログラム ジェンダー論 履修を指定する科目数 5科目 科目 家族社会学 教育福祉の諸問題B（性と人権） 社会福祉原論 共生の思想と歴史 ジェンダーと社会 教育福祉学B 保育学概論 乳児保育論 履修を指定する科目数 1科目 科目 異文化の理解 共生社会とアイデンティティ 文化と景観 ディスコースと社会 人間システムとサステナビリティ ジェンダー論入門 ジェンダーと現代社会 グローバル化と人権 スポーツと社会 文化と社会の心理 履修を指定する科目数
--	--

1 科目 以上 備考 (科目 家族社会学) * 教育福祉科目 * 心理科目 (科目 ジェンダーと社会) * 環社シス科目 * 教育福祉科目 * 心理科目 備考 (科目 異文化の理解) * 環社シス科目 * 心理科目 PBL プログラム コラボレーション 履修を指定する科目数 5 科目 以上 科目 コラボレーション論 教育の思想と歴史 スクール・ソーシャルワーク概論 特別支援教育 教育社会学 臨床心理学概論 教育・学校心理学 履修を指定する科目数 4 科目 以上 PBL プログラム 地域および都市における排除・共生・参加 履修を指定する科目数 5 科目 以上 科目 地域福祉論 A 地域福祉論 B 地域社会学 社会福祉原論	1 科目 備考 (科目 家族社会学) * 教育福祉科目 (科目 ジェンダーと社会) * 環社シス科目 * 教育福祉科目 備考 (科目 異文化の理解) * 環社シス科目 PBL プログラム コラボレーション 履修を指定する科目数 5 科目 科目 コラボレーション論 教育の思想と歴史 スクール・ソーシャルワーク概論 特別支援教育 教育社会学 臨床心理学概論 教育・学校心理学 履修を指定する科目数 4 科目 PBL プログラム 地域および都市における排除・共生・参加 履修を指定する科目数 5 科目 科目 地域福祉論 A 地域福祉論 B 地域社会学 社会福祉原論
--	---

教育福祉の諸問題 A（貧困と社会） 環境哲学と現代社会 地理学基礎 地域研究 履修を指定する科目数 4 科目 以上 備考 (科目 教育福祉の諸問題 A（貧困と社会）) * 教育福祉科目 * 心理科目 備考 (科目 地域研究) * 環社シス科目 * 教育福祉科目 * 心理科目 PBL プログラム 生涯学習と設計 履修を指定する科目数 5 科目 以上 科目 社会教育入門 保育学概論 心理学と心理的支援 生涯学習概論 生涯スポーツ指導 教育福祉の諸問題 C（多文化共生） 社会教育計画 教育情報学 教育・学習の理論と設計 履修を指定する科目数 4 科目 以上 PBL プログラム 生活環境と情報 履修を指定する科目数 5 科目 以上 科目	教育福祉の諸問題 A（貧困と社会） 環境哲学と現代社会 地理学基礎 地域研究 履修を指定する科目数 4 科目 備考 (科目 教育福祉の諸問題 A（貧困と社会）) * 教育福祉科目 備考 (科目 地域研究) * 環社シス科目 * 教育福祉科目 PBL プログラム 生涯学習と設計 履修を指定する科目数 5 科目 科目 社会教育入門 保育学概論 心理学と心理的支援 生涯学習概論 生涯スポーツ指導 教育福祉の諸問題 C（多文化共生） 社会教育計画 教育情報学 教育・学習の理論と設計 履修を指定する科目数 4 科目 PBL プログラム 生活環境と情報 履修を指定する科目数 5 科目 科目
---	---

科学技術と社会 社会におけるネットワーク A I プログラミング 人工知能 A 環境心理学 履修を指定する科目数 2 科目 以上 PBL プログラム 生きることと遊び 履修を指定する科目数 5 科目 以上 科目 発達心理学 2 環境心理学 心の病理学（精神疾患とその治療） 心理療法論（心理学的支援法） 文化人類学入門 異文化の理解 現代社会と健康 ヘルスケアサービス 精神保健学 履修を指定する科目数 4 科目 以上 備考 （科目 異文化の理解） ＊環社シス科目 ＊心理科目 PBL プログラム 教育保障 履修を指定する科目数 5 科目 以上 科目 教育社会学 教育・学校心理学 スクール・ソーシャルワーク概論 大阪の都市づくり 心理学と心理的支援	科学技術と社会 社会におけるネットワーク A I プログラミング 人工知能 A 環境心理学 履修を指定する科目数 2 科目 PBL プログラム 生きることと遊び 履修を指定する科目数 5 科目 科目 発達心理学 2 環境心理学 心の病理学（精神疾患とその治療） 心理療法論（心理学的支援法） 文化人類学入門 異文化の理解 現代社会と健康 ヘルスケアサービス 精神保健学 履修を指定する科目数 4 科目 備考 （科目 異文化の理解） ＊環社シス科目 PBL プログラム 教育保障 履修を指定する科目数 5 科目 科目 教育社会学 教育・学校心理学 スクール・ソーシャルワーク概論 大阪の都市づくり 心理学と心理的支援
--	---

履修を指定する科目数 2 科目以上 PBL プログラムの履修について ・卒業までに少なくとも 1 つの PBL プログラムを修了する必要があります。 ・各プログラムを修了するためには、「履修を指定する科目数」に記載された数の授業科目分の単位を修得する必要があります。 ・全学類において、PBL プログラムで修得した単位は、総合教養科目は総合教養科目として、基礎教育科目は基礎教育科目として、自学類専門科目は自学類専門科目として、PBL 演習、他学類基盤科目、他学類専門科目は PBL プログラム科目として、それぞれ卒業要件単位に算入されます。 ・また、知識情報システム学類、環境社会システム学類、教育福祉学類においては、自学類基盤科目は自学類基盤科目として卒業要件単位に算入されます。心理学類においては、自学類関連科目は自学類関連科目として卒業要件単位に算入されます。 ・履修する PBL プログラムを決める前に、複数の PBL プログラムの授業科目を履修することができます。 ・「PBL プログラム履修課程」に含まれる授業科目は、最終的に選択したプログラム以外の授業科目も含めて、全て上記の基準で卒業要件単位に算入されます。 ※環境社会システム学類、教育福祉学類、心理学類の「現代システム科学域 PBL プログラム履修課程」についても、上記と同様の修正を行う。	履修を指定する科目数 2 科目 (追加)
--	---

(是正事項) 現代システム科学域 (共通)

8. 【全体計画審査意見 22 の回答について】

シラバスの修正内容が明示されておらず、内容が確認できないため、再度、修正したシラバスを示した上で説明すること。

(対応)

全体計画審査意見 22 で御指摘のあった、「シラバスについて、授業内容や成績評価方法が不明確なものや、シラバス上、「半期開講科目は第 16 回まで、通年開講科目は第 31 回まで（試験を含む）」とシラバス上で指示されているが、そのような記載になっていないなど、不整合があるため、シラバスのチェック体制や作成方針を明らかにしてシラバス全体を検証の上、適切に修正すること。なお、1 年次に履修する科目のシラバスについては、新入生であることに留意し、わかりやすい記載となるよう留意すること。」について、補正申請では、審査意見への対応を記載した書類に対応方針を列挙した上で、その方針に沿って全てのシラバスを点検・修正した。修正箇所は別添シラバス内に青字で示していたが、審査意見への対応を記載した書類には含めていなかった。

全体計画審査意見 22 の対応に記載した、シラバス検証のための確認事項と修正を行ったシラバスの内容は下記のとおりである。また、現代システム科学域の全ての学類のシラバスを本審査意見の添付資料 2 (P16～P574) として添付する。

【シラバス検証のための確認事項】

①半期開講科目は第 15 回（試験のみの回を除く）まで、通年開講科目は第 30 回まで（試験のみの回を除く）記載されているか

当初申請時のシラバスに記載されていた「半期開講科目は第 16 回まで、通年開講科目は第 31 回まで（試験を含む）」という注釈は、シラバス作成に当たっての注釈であったが、多くの科目において削除されないまま残されていた。補正申請では、上記注釈を全シラバスから削除している。また、この注釈は、定期試験を実施する科目に限定された内容であったが、誤解を招く表記であったことから「半期開講科目は第 15 回（試験のみの回を除く）まで、通年開講科目は第 30 回まで（試験のみの回を除く）記載されているか」という基準で全シラバスを確認し、必要に応じて修正した。補正申請で提出したシラバスにおいて、定期試験を行う半期開講科目は、試験を含め全 16 回と記載されている場合があり、定期試験を行わずにレポート等で成績評価を行う半期開講科目は全 15 回と記載されているが、誤りではない。前者の例として「データベース基礎」、後者の例として「マルチメディア情報処理」のシラバスを下に例示する。なお、これらの科目の修正点は注釈の削除のみのため、青字部分がない。

(新旧対照表) 現代システム科学域 知識情報システム学類 シラバス

新 (補正申請)	旧 (当初申請)
(シラバス-13ページ) データベース基礎	(シラバス-13 ページ) データベース基礎

授業回	各回の授業内容
第1回	イントロダクション
第2回	ERモデル
第3回	リレーショナルデータモデル (リレーション)
第4回	リレーショナルデータモデル (正規形・主キー)
第5回	リレーショナル代数 (集合演算)
第6回	リレーショナル代数 (結合)
第7回	SQL実習
第8回	中間試験・第7回までの振り返り
第9回	RDBの設計理論 (情報無損失分解)
第10回	RDBの設計理論 (関数従属性)
第11回	RDBの設計理論 (第2・3正規形)
第12回	RDBの設計理論 (第4・5正規形)
第13回	RDBMSの質問処理とその最適化
第14回	トランザクション
第15回	サーチエンジンと情報検索
第16回	期末試験

(シラバス-21、22ページ)

マルチメディア情報処理

授業回	各回の授業内容
第1回	マルチメディア情報の種類と特性
第2回	情報のデジタル表現
第3回	マルチメディア情報の表現基礎
第4回	マルチメディア情報の表現に関する実習
第5回	マルチメディア情報の入力技術

授業回	各回の授業内容
第1回	イントロダクション
第2回	ERモデル
第3回	リレーショナルデータモデル (リレーション)
第4回	リレーショナルデータモデル (正規形・主キー)
第5回	リレーショナル代数 (集合演算)
第6回	リレーショナル代数 (結合)
第7回	SQL実習
第8回	中間試験・第7回までの振り返り
第9回	RDBの設計理論 (情報無損失分解)
第10回	RDBの設計理論 (関数従属性)
第11回	RDBの設計理論 (第2・3正規形)
第12回	RDBの設計理論 (第4・5正規形)
第13回	RDBMSの質問処理とその最適化
第14回	トランザクション
第15回	サーチエンジンと情報検索
第16回	期末試験

※半期開講科目は第16回まで、通年開講科目は第31回まで (試験を含む) 記載してください。

※複数回をまとめて記載する場合は、罫線を削除するなど調整してください。

(21、22ページ)

マルチメディア情報処理

授業回	各回の授業内容
第1回	マルチメディア情報の種類と特性
第2回	情報のデジタル表現
第3回	マルチメディア情報の表現基礎
第4回	マルチメディア情報の表現に関する実習
第5回	マルチメディア情報の入力技術

第6回	マルチメディア情報の変換圧縮基礎	第6回	マルチメディア情報の変換圧縮基礎
第7回	マルチメディア情報の変換圧縮に関する実習	第7回	マルチメディア情報の変換圧縮に関する実習
第8回	マルチメディア情報の処理技術1 (パターン検出)	第8回	マルチメディア情報の処理技術1 (パターン検出)
第9回	マルチメディア情報の処理技術2 (パターン認識基礎)	第9回	マルチメディア情報の処理技術2 (パターン認識基礎)
第10回	マルチメディア情報の処理技術3 (パターン認識に関する実習)	第10回	マルチメディア情報の処理技術3 (パターン認識に関する実習)
第11回	マルチメディア情報の出力技術	第11回	マルチメディア情報の出力技術
第12回	ヒューマンコンピュータインタラクション	第12回	ヒューマンコンピュータインタラクション
第13回	マルチメディア情報応用システム基礎	第13回	マルチメディア情報応用システム基礎
第14回	マルチメディア情報応用システムに関する実習	第14回	マルチメディア情報応用システムに関する実習
第15回	メディアと情報の特性	第15回	メディアと情報の特性

※半期開講科目は第 16 回まで、通年開講科目は第 31 回まで（試験を含む）記載してください。

※複数回をまとめて記載する場合は、罫線を削除するなど調整してください。

②授業の目標が明確に記載されているか

当初申請時のシラバスについて、授業の到達目標が明確に記載されているかを確認した結果、到達目標については明確に記載されていたことが分かった。一方、全体計画審査意見 18 における『SDGs 演習』についても、シラバスが統一的な方針にのっとって体系的な学修内容が示されているとはいえない（がた）難しい。」という指摘を反映し、「SDGs 演習」から科目名を変更した「PBL 演習」について、到達目標に共通項目を含めることによって体系的な学修内容を保証するよう、補正申請において変更を行なった。「PBL 演習（環境学）」の例を下に示す。

(新旧対照表) 現代システム科学域 環境社会システム学類 シラバス

新 (補正申請)	旧 (当初申請)
(シラバス-145 ページ) PBL 演習 (環境学) 到達目標 PBLプログラム (環境学) は、環境活動をグループで企画・実践することにより、コミュニティレベルでの環境保全活動の重要性を理解し、将来リーダーとして環境活動を実践することのできる能力を身につけることを目標としている。 具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4. 環境教育・環境学習の重要性について、持続可能性の観点から論理的に説明することができる。 5. 企画段階での検討、様々な機関との連携協力、無理のない運営等の重要性を説明することができる。	(165 ページ) SDG s 演習 (環境学) 到達目標 環境活動をグループで企画・実践することにより、コミュニティレベルでの環境保全活動の重要性を理解し、将来リーダーとして環境活動を実践することのできる能力を身につけることを目標とする。具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 環境教育・環境学習の重要性について、持続可能性の観点から論理的に説明できること。 2. 企画段階での検討、様々な機関との連携協力、無理のない運営等の重要性を説明できること。 3. 協調性、寛容力、リーダーシップをもって、グループ活動を円滑に行えること。 4. 環境活動の成果をわかりやすくかつ正確に他人に伝えられること。

③授業内容と時間外学習が毎回明確に記載されているか

当初申請時に複数回の授業の内容をまとめて記述していた科目については、1 回ごとに授業内容と時間外学習を明示するような修正を行なった。下に「権利擁護論」の修正例を示す。

(新旧対照表) 現代システム科学域 教育福祉学類 シラバス

新 (補正申請)	旧 (当初申請)
(シラバス-62 ページ) 権利擁護論	(51 ページ) 権利擁護論

授業回	各回の授業内容	授業回	各回の授業内容
第1回	イントロダクション	第1回	イントロダクション
第2回	社会福祉における権利擁護の概念	第2回	社会福祉における権利擁護の概念
第3回	社会福祉における権利擁護と民法	第3回	社会福祉における権利擁護と民法
第4回	社会福祉における権利擁護と社会福祉法—社会福祉法と各種法制度	第4回	社会福祉における権利擁護と社会福祉法
第5回	社会福祉における権利擁護と社会福祉法—法的諸問題	第5回	社会福祉における権利擁護と社会福祉法
第6回	社会福祉における権利擁護と社会福祉法—関連組織・団体・専門職	第6回	社会福祉における権利擁護と社会福祉法
第7回	成年後見制度の概要	第7回	成年後見制度の概要
第8回	成年後見制度の申請手続き	第8回	成年後見制度の申請手続き
第9回	成年後見人の業務	第9回	成年後見人の業務
第10回	成年後見に関わる担い手	第10回	成年後見に関わる担い手
第11回	成年後見制度をめぐる動向と課題	第11回	成年後見制度をめぐる動向と課題
第12回	日常生活自立支援事業の仕組み	第12回	日常生活自立支援事業の仕組み
第13回	日常生活自立支援事業の現状と課題	第13回	日常生活自立支援事業の現状と課題
第14回	権利擁護に関わる事例研究	第14回	権利擁護に関わる事例研究
第15回	権利擁護に関わる事例研究	第15回	権利擁護に関わる事例研究

④成績評価の方法が授業目標と対応しており、かつ、成績評価方法を学生が理解できるように記載されているか

当初申請時のシラバスについて確認し、授業目標に共通項目を加えた PBL 演習については、それに対応して成績評価方法の修正を行なうと同時に、ルーブリックによる評価を行うことを明記した。「PBL 演習（地域再生）」の例を下に示す。

（新旧対照表）現代システム科学域 環境社会システム学類 シラバス

新（補正申請）	旧（当初申請）
（シラバス-147、148 ページ） PBL 演習（地域再生） 到達目標	（167 ページ） SDG s 演習（地域再生） 到達目標

PBLプログラム（地域再生）は、<u>地域活動</u>をグループで企画・実践することにより、コミュニティレベルでの<u>連携</u>の重要性を理解し、将来リーダーとして<u>地域活動</u>を実践することのできる能力を身につけることを目標としている。 具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4. コミュニティ再生・地域連携の重要性について、持続可能性の点から論理的に説明することができる。 5. 企画段階での検討、様々な機関との連携協力、無理のない運営等の重要性を説明することができる。 成績評価方法 授業目標の1～5の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. 現代社会の一員としての高い倫理観を持ち、他者と協働して課題に取り組むことができる。 2. PBLプログラムで学んだことを持続可能な社会の実現と関連付けて説明することができる。 3. PBL演習の成果について分かりやすくプレゼンテーションすることができる。 4. コミュニティ再生・地域連携の重要性について持続可能性の点から論理的に説明することができる。 5. 企画段階での検討、様々な機関との連携協力、無理のない運営等の重要性を説明	本科目は、PBL コース（地域再生）の必修科目のうちの実践科目として位置づけられており、原則として他の必修科目である2つの科目の単位取得者を対象としている。 主として<u>地域における活動</u>をグループで企画・実践することにより、コミュニティレベルでの<u>地域活動</u>の重要性を理解し、将来リーダーとして<u>地域活動</u>を実践することができる人材となることを目標とする。具体的には、以下の能力を身につけることを目標とする。 1. <u>地域活動</u>の重要性について、持続可能性の観点から論理的に説明できること。 2. 企画段階での検討、様々な機関との連携協力、無理のない運営等の重要性を説明できること。 3. <u>協調性、寛容力、リーダーシップをもって、グループ活動を円滑に行えること。</u> 4. <u>環境活動の成果をわかりやすくかつ正確に他人に伝えられること。</u> 成績評価方法 授業目標の1～4の達成度で成績評価を行う。単位を取得するためには、 1. <u>地域活動</u>の重要性について、持続可能性の観点から論理的に説明できる。 2. 企画段階での検討、様々な機関との連携協力、無理のない運営等の重要性を説明できること。 3. <u>協調性、寛容力、リーダーシップをもって、グループ活動を円滑に行えること。</u> 4. <u>環境活動の成果をわかりやすくかつ正確に他人に伝えられること。</u> の4点を達成することが求められる。 成績は、初回の授業で課すレポート（20%）、地域活動に取り組む姿勢（20%）、地域活動計画書（20%）、地域活
---	--

することができる。 の5点を達成することが求められる。成績は、初回の授業で課すレポート（20%）、地域活動に取り組む姿勢（20%）、地域再生活動計画書（20%）、地域再生活動報告書（20%）、発表会でのプレゼンテーションと質疑応答（20%）をもとに、到達目標の達成度について、1回目の授業で学生に明示したルーブリックを基準として評価する。	動報告書（20%）、発表会でのプレゼンテーションと質疑応答（20%）で評価する。
---	---

⑤教科書及び参考書が記載されているか

当初申請時のシラバスでは、教科書を設定せず資料配付を予定していた授業については、教科書及び参考書の欄が空白となっていたため、記述を加えた。「心理学特殊実験 2」の例を下に示す。

（新旧対照表）現代システム科学域 心理学類 シラバス

新（補正申請）	旧（当初申請）
（シラバス-58 ページ） 心理学特殊実験 2 教科書 実験グループ：適宜資料を配付する。 臨床グループ：適宜資料を配付する。	（62 ページ） 心理学特殊実験 2 教科書 実験グループ：指定しない 臨床グループ：指定しない

⑥そのほか、不備がないか

当初申請時のシラバスについて精査して不備を修正した。例えば、オムニバス形式の授業で各回の担当者名が記載されていない場合は付記した。「公認心理師の職責」の例を下に示す。

（新旧対照表）現代システム科学域 心理学類 シラバス

新（補正申請）	旧（当初申請）																		
（シラバス-65、66 ページ） 公認心理師の職責 <table border="1"> <tr> <th>授業回</th><th>各回の授業内容</th></tr> <tr> <td>第1回</td><td>オリエンテーション (河野直子)</td></tr> <tr> <td>第2回</td><td>公認心理師の役割 (河野直子、岩佐和典)</td></tr> <tr> <td>第3回</td><td>公認心理師の法的義務と倫理</td></tr> </table>	授業回	各回の授業内容	第1回	オリエンテーション (河野直子)	第2回	公認心理師の役割 (河野直子、岩佐和典)	第3回	公認心理師の法的義務と倫理	（69、70 ページ） 公認心理師の職責 <table border="1"> <tr> <th>授業回</th><th>各回の授業内容</th></tr> <tr> <td>第1回</td><td>オリエンテーション</td></tr> <tr> <td>第2回</td><td>公認心理師の役割</td></tr> <tr> <td>第3回</td><td>公認心理師の法的義務と倫理</td></tr> <tr> <td>第4回</td><td>要支援者の安全の確保</td></tr> </table>	授業回	各回の授業内容	第1回	オリエンテーション	第2回	公認心理師の役割	第3回	公認心理師の法的義務と倫理	第4回	要支援者の安全の確保
授業回	各回の授業内容																		
第1回	オリエンテーション (河野直子)																		
第2回	公認心理師の役割 (河野直子、岩佐和典)																		
第3回	公認心理師の法的義務と倫理																		
授業回	各回の授業内容																		
第1回	オリエンテーション																		
第2回	公認心理師の役割																		
第3回	公認心理師の法的義務と倫理																		
第4回	要支援者の安全の確保																		

	(岩佐和典)		第5回	情報の適切な取り扱い	
第4回	要支援者の安全の確保 (岩佐和典)		第6回	保健医療分野における業務	
第5回	情報の適切な取り扱い (岩佐和典)		第7回	福祉分野における業務	
第6回	保健医療分野における業務 (総田純次)		第8回	教育分野における業務	
第7回	福祉分野における業務 (総田純次)		第9回	司法・犯罪分野における業務	
第8回	教育分野における業務 (総田純次)		第10回	産業・労働分野における業務	
第9回	司法・犯罪分野における業務 (総田純次)		第11回	支援者としての自己課題	
第10回	産業・労働分野における業務 (総田純次)		第12回	生涯学習への準備	
第11回	支援者としての自己課題 (河野直子)		第13回	多職種連携と地域連携	
第12回	生涯学習への準備 (河野直子)		第14回	公認心理師の展開	
第13回	多職種連携と地域連携 (河野直子)		第15回	まとめ	
第14回	公認心理師の展開 (河野直子)		第16回	期末試験	
第15回	まとめ (河野直子)				
第16回	期末試験 (河野直子)				

(是正事項) 現代システム科学域 (共通)

9. 【全体計画審査意見 25 の回答について】

審査意見を受けて、「入学時の文理を問わず、数学、統計学、化学、生物学、英語、初習外国語にそれぞれ必修科目を設け」との記載について、化学と生物学は記載ミスのため記載を修正するとの説明があるが、設置の趣旨等を記載した書類における記載が修正されていないため、適切に改めること。

(対応)

補正申請に提出した書類のうち、現代システム科学域の「設置の趣旨等を記載した書類」について、正本として提出した書類と別途電子データで提出した書類に齟齬があることが提出後に判明した。

本審査意見において御指摘の「化学と生物学は記載ミスのため記載を修正」については、正本として提出した書類は正しく修正していたが、電子データで提出した書類には御指摘のとおり化学と生物学の記載を修正していなかった。

再補正申請において提出する現代システム科学域の「設置の趣旨等を記載した書類」は、補正申請の際に正本として提出した書類を基に作成したため、御指摘の化学と生物学は適切に修正している。

(正誤表) 設置の趣旨等を記載した書類

正	誤
(設置趣旨 (本文) 33 ページ) 4 教育課程の編成の考え方及び特色 イ 教育課程の概要及び特色 [現代システム科学域] 本学域の教育課程においては以下の 5 つの特色がある。(1) 数学・科学・外国語科目を全ての学習科目の道具科目として位置付け、入学時の文理を問わず、数学、統計学、英語、初習外国語にそれぞれ必修科目を設け、学生の生涯学習を支える学習の基礎を獲得させる。 (略)	(設置趣旨 (本文) 33 ページ) 4 教育課程の編成の考え方及び特色 イ 教育課程の概要及び特色 [現代システム科学域] 本学域の教育課程においては以下の 5 つの特色がある。(1) 数学・科学・外国語科目を全ての学習科目の道具科目として位置付け、入学時の文理を問わず、数学、統計学、 <u>化学、生物学、英語</u> 、初習外国語にそれぞれ必修科目を設け、学生の生涯学習を支える学習の基礎を獲得させる。 (略)

(改善事項) 現代システム科学域 (共通)

10. 【全体計画審査意見 27 の回答について】

アドミッション・ポリシーで掲げていた「サステナビリティ指向性」を「現代社会の諸問題に対する関心を有する人」に改め、入学者選抜の区分ごとに面接や志望理由書等により評価することとしているが、どのようにして客観的な評価を行うのか不明確なため、明確に説明すること。

(対応)

入学者選抜の区分ごとに面接や志望理由書等により、現代社会の諸問題に対する関心・意欲を評価する。面接や志望理由書では、「現代社会の諸問題に対する関心を有する人」について、アドミッション・ポリシーに掲げる「持続可能な社会を実現しようという高い志」や「現代社会の諸問題を解決すること」に関して、自分の考えや、入学後にその課題を解決するために何を学びたいかなどを明確に説明あるいは記述できているかどうかを評価する。いずれの評価も必ず複数人で実施することとし、十分擦り合わせを行った評価基準をあらかじめ作成した上で、その評価基準を評価者間で共有することにより、評価者間のばらつきを除いた客観的な評価を行うこととする。

なお、本指摘に伴い確認したところ、アドミッション・ポリシーにおける評価方法の記述の中に、募集要項に使用するものと異なる用語による記述や、評価方法や使用する書類について曖昧な記述が存在していたことが分かった。そのため、上記の評価方法に関する追記と併せて、下記新旧対応表のとおり修正する。

(新旧対照表) 現代システム科学域 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
(設置趣旨 (本文) 58、59、60、61 ページ) 8 入学者選抜の概要 ア アドミッションポリシー [現代システム科学域] (略) 上記の評価方法は以下のとおりである。 [一般前期] (知識・技能) ①大学入学共通テスト、②調査書、③個別学力検査を用いて評価する。 (思考力・判断力・表現力) ①大学入学共通テスト、③個別学力検査を用いて評価する。 (社会の諸問題への関心) ⑥志望理由書を用いて評価する。	(設置趣旨 (本文) 53、54、55、56 ページ) 8 入学者選抜の概要 ア アドミッションポリシー [現代システム科学域] (略) 上記の評価方法は以下のとおりである。 [一般前期] (知識・技能) ①大学入試共通テスト、②調査書／成績証明書、③個別学力試験を用いて評価する。 (思考力・判断力・表現力) ①大学入試共通テスト、③個別学力試験を用いて評価する。 (社会の諸問題への関心)

[一般後期] (知識・技能) ①大学入<u>学</u>共通テスト、②調査書を用いて評価する。 (思考力・判断力・表現力) ①大学入<u>学</u>共通テスト、④面接を用いて評価する。 (社会の諸問題への関心) ④面接、⑥志望理由書を用いて評価する。 [総合選抜] (知識・技能) ③個別学力<u>検査</u>を用いて評価する。 (思考力・判断力・表現力) ③個別学力<u>検査</u>、④面接を用いて評価する。 (社会の諸問題への関心) ④面接、⑤推薦書、⑥志望理由書、<u>自己評価書</u>、<u>学習計画書</u>を用いて評価する。 [学校推薦（知識情報システム学類）] (知識・技能) ①大学入<u>学</u>共通テスト、②調査書を用いて評価する。 (思考力・判断力・表現力) ①大学入<u>学</u>共通テスト、④面接を用いて評価する。 (社会の諸問題への関心) ④面接、⑤推薦書、⑥志望理由書を用いて評価する。 [学校推薦（環境社会システム学類/教育福祉学類/心理学類）] (知識・技能)	⑥志望理由書/<u>活動報告書</u>を用いて評価する。 [一般後期] (知識・技能) ①大学入<u>試</u>共通テスト、②調査書/<u>成績証明書</u>を用いて評価する。 (思考力・判断力・表現力) ①大学入<u>試</u>共通テスト、④面接を用いて評価する。 (社会の諸問題への関心) ④面接、⑥志望理由書/<u>活動報告書</u>を用いて評価する。 [総合選抜] (知識・技能) ②調査書/<u>成績証明書</u>、③個別学力<u>試験</u>を用いて評価する。 (思考力・判断力・表現力) ③個別学力<u>試験</u>、④面接を用いて評価する。 (社会の諸問題への関心) ④面接、⑤推薦書、⑥志望理由書/<u>活動報告書</u>を用いて評価する。 [学校推薦（知識情報システム学類）] (知識・技能) ①大学入<u>試</u>共通テスト、②調査書/<u>成績証明書</u>を用いて評価する。 (思考力・判断力・表現力) ①大学入<u>試</u>共通テスト、④面接・<u>口述試験</u>を用いて評価する。 (社会の諸問題への関心) ④面接・<u>口述試験</u>、⑤推薦書、⑥志望理由書/<u>活動報告書</u>を用いて評価する。 [学校推薦（環境社会システム学類/教育福祉学類/心理学類）] (知識・技能)
---	--

②調査書、③個別学力<u>検査</u>を用いて評価する。 (思考力・判断力・表現力) ③個別学力<u>検査</u>、④面接を用いて評価する。 (社会の諸問題への関心) ④面接、⑤推薦書、⑥志望理由書を用いて評価する。 [帰国生徒] (知識・技能) ②<u>成績証明書</u>、③個別学力<u>検査</u>を用いて評価する。 (思考力・判断力・表現力) ③個別学力<u>検査</u>、④<u>口述試験</u>・面接を用いて評価する。 (社会の諸問題への関心) ④<u>口述試験</u>・面接、⑥志望理由書を用いて評価する。 [社会人（環境社会システム学類/教育福祉学類）] (知識・技能) ③個別学力<u>検査</u>を用いて評価する。 (思考力・判断力・表現力) ③個別学力<u>検査</u>、④面接を用いて評価する。 (社会の諸問題への関心) ④面接、⑥志望理由書を用いて評価する。 [外国人留学生] (知識・技能) ②成績証明書、③個別学力<u>検査</u>を用いて評価する。 (思考力・判断力・表現力) ③個別学力<u>検査</u>、④面接を用いて評価する。 (社会の諸問題への関心)	②調査書／<u>成績証明書</u>、③個別学力<u>試験</u>を用いて評価する。 (思考力・判断力・表現力) ③個別学力<u>試験</u>、④面接を用いて評価する。 (社会の諸問題への関心) ④面接、⑤推薦書、⑥志望理由書／<u>活動報告書</u>を用いて評価する。 [帰国生徒] (知識・技能) ②<u>調査書</u>／<u>成績証明書</u>、③個別学力<u>試験</u>を用いて評価する。 (思考力・判断力・表現力) ③個別学力<u>試験</u>、④<u>口述試験</u>・面接を用いて評価する。 (社会の諸問題への関心) ④<u>口述試験</u>・面接、⑥志望理由書／<u>活動報告書</u>を用いて評価する。 [社会人（環境社会システム学類/教育福祉学類）] (知識・技能) ③個別学力<u>試験</u>を用いて評価する。 (思考力・判断力・表現力) ③個別学力<u>試験</u>、④面接を用いて評価する。 (社会の諸問題への関心) ④面接、⑥志望理由書／<u>活動報告書</u>を用いて評価する。 [外国人留学生] (知識・技能) ②<u>調査書</u>／<u>成績証明書</u>、③個別学力<u>試験</u>を用いて評価する。 (思考力・判断力・表現力) ③個別学力<u>試験</u>、④面接を用いて評価する。 (社会の諸問題への関心)
--	---

④面接、⑥志望理由書を用いて評価する。

[国際バカロレア]

(知識・技能)

②調査書／成績証明書、④口述試験・面接を用いて評価する。

(思考力・判断力・表現力)

②成績証明書、④口述試験・面接を用いて評価する。

(社会の諸問題への関心)

②成績証明書、④口述試験・面接、⑥志望理由書を用いて評価する。

[ユネスコスクール]

(知識・技能)

②調査書、③個別学力検査を用いて評価する。

(思考力・判断力・表現力)

③個別学力検査、④面接を用いて評価する。

(社会の諸問題への関心)

④面接、⑤推薦書、⑥志望理由書、活動報告書を用いて評価する。

[スーパーサイエンスハイスクール]

(知識・技能)

②調査書、③個別学力検査を用いて評価する。

(思考力・判断力・表現力)

③個別学力検査、④面接を用いて評価する。

(社会の諸問題への関心)

④面接、⑤推薦書、⑥志望理由書、活動報告書を用いて評価する。

これらをまとめると下表のようになる。

	知識・ 技能	思考力・ 判断力・ 表現力	社会の 諸問題
--	-----------	---------------------	------------

④面接、⑥志望理由書／活動報告書を用いて評価する。

[国際バカロレア]

(知識・技能)

②調査書／成績証明書、④面接・口述試験を用いて評価する。

(思考力・判断力・表現力)

④面接・口述試験を用いて評価する。

(社会の諸問題への関心)

④面接・口述試験を用いて評価する。

[ユネスコスクール]

(知識・技能)

②調査書／成績証明書、③個別学力試験を用いて評価する。

(思考力・判断力・表現力)

③個別学力試験、④面接を用いて評価する。

(社会の諸問題への関心)

④面接、⑤推薦書、⑥志望理由書／活動報告書を用いて評価する。

[スーパーサイエンスハイスクール]

(知識・技能)

②調査書／成績証明書、③個別学力試験を用いて評価する。

(思考力・判断力・表現力)

③個別学力試験、④面接を用いて評価する。

(社会の諸問題への関心)

④面接、⑤推薦書、⑥志望理由書／活動報告書を用いて評価する。

これらをまとめると下表のようになる。

	知識・ 技能	思考力・ 判断力・ 表現力	社会の 諸問題
--	-----------	---------------------	------------

選 抜 区 分				への関 心
	一般前期	①、 ②、③	①、③	⑥
	一般後期	①、②	①、④	④、⑥
	総合選 抜（教 福）	③	③、④	④、 ⑤、⑥
	学校推 薦（知 識）	①、②	①、④	④、 ⑤、⑥
	学校推 薦（環 境／教 福／心 理）	②、③	③、④	④、 ⑤、⑥
	帰国生 徒	②、③	③、④	④、⑥
	社会人 （環境 ／教 福）	③	③、④	④、⑥
	外国人 留学生	②、③	③、④	④、⑥
	国際バ カロレ ア	②、④	②、④	②、 ④、⑥
	ユネス コスク ール	②、③	③、④	④、 ⑤、⑥
	SSH	②、③	③、④	④、 ⑤、⑥
(設置趣旨（本文）64、65、66 ページ) 8 入学者選抜の概要 イ 入学者選抜の方法と体制				

選 抜 区 分				への関 心
	一般前期	①、 ②、③	①、③	⑥
	一般後期	①、②	①、④	④、⑥
	総合選 抜（教 福）	②、③	③、④	④、 ⑤、⑥
	学校推 薦（知 識）	①、②	①、④	④、 ⑤、⑥
	学校推 薦（環 境／教 福／心 理）	②、③	③、④	④、 ⑤、⑥
	帰国生 徒	②、③	③、④	④、⑥
	社会人 （環境 ／教 福）	③	③、④	④、⑥
	外国人 留学生	②、③	③、④	④、⑥
	国際バ カロレ ア	②、④	④	④
	ユネス コスク ール	②、③	③、④	④、 ⑤、⑥
	SSH	②、③	③、④	④、 ⑤、⑥
(設置趣旨（本文）61 ページ) 8 入学者選抜の概要 イ 入学者選抜の方法と体制				

【各学類の一般前期入試における大学入学 共通テストおよび個別学力試験に課す科 目】 (表略) 現代社会の諸問題に対する関心・意欲の 評価にあたっては、入学者選抜の区分ごと に面接や志望理由書等により行う。面接や 志望理由書では、「現代社会の諸問題に対す る関心を有する人」について、アドミッシ ョン・ポリシーに掲げる「持続可能な社会 を実現しようという高い志」や「現代社会 の諸問題を解決すること」に関して、自分 の考えや、入学後にその課題を解決するた めに何を学びたいかなどを明確に説明ある いは記述できているかどうかを評価する。 いずれの評価も必ず複数人で実施すること とし、十分擦り合わせを行った評価基準を あらかじめ作成した上で、その評価基準を 評価者間で共有することにより、評価者間 のばらつきを除いた客観的な評価を行うこ ととする。	【各学類の一般前期入試における大学入学 共通テストおよび個別学力試験に課す科 目】 (表略) (追加)
---	--

(改善事項) 現代システム科学域 (共通)

11. 【全体計画審査意見 32 の回答について】

就職支援の方策について、「就職担当教員と、大学のキャリアサポート組織との連携を構築・強化していく」との説明がなされているが、具体的にどのような方策を講じるのか不明なため、より詳細に説明すること。

(対応)

御指摘に従い、設置の趣旨等を記載した書類の「2.2 社会的・職業的自立に関する指導等及び体制 ウ 適切な体制の整備について」に、以下の説明を追加する。

キャリア支援部門は、就職セミナーや企業からの求人等の情報について、各学類に適した内容があれば各学類の就職担当教員に送付する。就職担当教員は、送られた情報を吟味した上で各学類の該当年次の学生にメールで伝達する。また、就職担当教員に直接企業や自治体等からの情報が届くこともあり、その場合も同様に各学類の該当年次の学生にメールで伝達する。

一方、卒業年次の学生は WEB による進路登録、報告を行い、その情報はキャリア支援部門が管理する。キャリア支援部門は、その情報を基に就職が決まっていない卒業年次の学生を特定し、求人情報の提供などの働きかけを行う。

また、現代システム科学域の学生に対するキャリア支援全般について、学域長、学類長等の学類執行部がキャリア支援部門の長と打ち合わせる機会を定期的に設け、支援体制を改善していく。具体的には、新大学における現代システム科学域の人材養成の方針、PBL プログラムによる実践力の向上などについて、教員からキャリア支援部門の職員に説明し、キャリア支援部門が各種企業と接する際の説明に役立ててもらう。さらに、キャリア支援部門が主催するインターンシップ説明会、業界研究セミナー、卒業生座談会などのイベントや就職相談等への参加状況に関する情報を共有し、参加率を向上させるための方策を検討する。とくに1～2年次生対象のイベントに関しては、学生側の動機付けが弱い時期であるため、教員からの案内が有効であると考えられる。また、キャリア支援部門に対する学生側からのニーズについて、年度末の学類会議において就職担当教員が各教員からの意見を集約してキャリア支援部門の長に伝えることにより、支援体制の改善に役立てる。加えて、企業の人事担当者による本学のキャリア支援部門への訪問スケジュールを就職担当教員と共有し、就職担当教員が必要と判断した企業に対しては訪問に立ち合い、学域の人材養成の方針、実際にどのような人材が育っているかの説明などを行う。

(新旧対照表) 現代システム科学域 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
(設置趣旨 (本文) 87、88 ページ)	(設置趣旨 (本文) 82 ページ)
2.2 社会的・職業的自立に関する指導等及び体制	2.2 社会的・職業的自立に関する指導等及び体制
ウ 適切な体制の整備について	ウ 適切な体制の整備について

学生のキャリア形成のために、複数の就職委員をそれぞれの学類に配置することに加えて、学域支援室に就職担当事務を配置する。また、全学的な組織としてキャリア支援部門が設置されており、教員、学位域支援室、キャリア支援部門の三位一体となった体制を整備し、学生の職業的自立を支援する。具体的には、以下のような取り組みを行う。

キャリア支援部門は、就職セミナーや企業からの求人等の情報について、各学類に適した内容があれば各学類の就職担当教員に送付する。就職担当教員は、送られた情報を吟味した上で各学類の該当年次の学生にメールで伝達する。また、就職担当委員に直接企業や自治体等からの情報が届くこともあり、その場合も同様に各学類の該当年次の学生にメールで伝達する。

一方、卒業年次の学生はWEBによる進路登録、報告を行い、その情報はキャリア支援部門が管理する。キャリア支援部門は、その情報を基に就職が決まっていない卒業年次の学生を特定し、求人情報の提供などの働きかけを行う。

また、現代システム科学域の卒業生に対するキャリア支援全般について、学域長、学類長等の学類執行部がキャリア支援部門の長と打ち合わせる機会を定期的に設け、支援体制を改善していく。具体的には、新大学における現代システム科学域の人材養成の方針、PBLプログラムによる実践力の向上などについて、教員からキャリア支援部門の職員に説明し、キャリア支援部門が各種企業と接する際の説明に役立ててもらう。さらに、キャリア支援部門が主催するインターンシップ説明会、業界研究セミナー、卒業生座談会などのイベントや就職相談等への参加状況に関する情報を共有し、参加率を向上させるための方策を検討す

学生のキャリア形成のために、複数の就職委員をそれぞれの学類に配置することに加えて、学域支援室に就職担当事務を配置する。また、全学的な組織としてキャリア支援部門が設置されており、教員、学位域支援室、キャリア支援部門の三位一体となった体制を整備し、学生の職業的自立を支援する。

る。とくに1～2年次生対象のイベントに関しては、学生の側の動機付けが弱い時期であるため、教員からの案内が有効であると考えられる。また、キャリア支援部門に対する学生側からのニーズについて、年度末の学類会議において就職担当教員が各教員からの意見を集約してキャリア支援部門の長に伝えることにより、支援体制の改善に役立てる。加えて、企業の人事担当者による本学のキャリア支援部門への訪問スケジュールを就職担当教員と共有し、就職担当教員が必要と判断した企業に対しては訪問に立ち合い、学域の人材養成の方針、実際にどのような人材が育っているかの説明などを行う。	
---	--

(その他) 現代システム科学域 (共通)

誤記や不備に伴う修正

(対応)

補正申請書類について改めて点検した結果、対応に記載した内容に不足があったため、下記のとおり補足する。

(現代システム科学域 (共通) 審査意見への対応を記載した書類 (3 月) より抜粋)

(是正事項) 現代システム科学域

28. 学外実習や演習の指導体制について、助手の配置もないため適切な指導が行えるのか不明確であるため、明確にすること。

(対応)

本学域の完成年度における専任教員の構成は、教授 37、准教授 43、講師 3、助教 2 であり、情報系や理学実験系の教育課程や社会福祉士、保育士、公認心理師などの実習を含む教育課程をもつ学域としては、他大学よりも助教の配置数が少ない状態となっている。しかしながら、本学域では、学外実習や演習を助教などの特定の職階の教員が担当するのではなく、助教、准教授、教授のすべての職階の教員が複数でチームを組んで担当する体制で指導を行なっている (表 1)。具体的には、それぞれの学外実習や演習を担当するチームの 1 名をリーダーとし、実習先ごとに担当の教員を割り振り、学生の指導は担当教員が行うようにしている。このような体制を取ることで、実習や演習の負担を平準化し、学外実習や演習においても学生に対して適切な指導が行える体制をとっている。

表 1 主な実習の実態

実習名	学生数	教員数	巡回数	実習先との連携関係	事務職員の関与
社会福祉実習	40	8	実習中 1 回以上 (3 回の 帰校 日)	実習指導者とメールや電話で随時連絡	実習謝礼の支払い、実習依頼状の作成・発行・発送、実習出勤簿の管理、実習意見書の回収・取りまとめ、検便の手続き、実習旅費の執行、帰校日の記録管理、実習報告書の印刷発注・発送、実習報告会の準備・出欠管理、実習日誌の印刷発注、事前学習におけるゲストスピーカーの事務手続き、等
保育実習	10	2	実習中 1 回以上	実習前後に電話やメールで連絡調整、実習報告	実習謝礼の支払い、実習依頼状の作成・発行・発送、実習出勤簿の管理、実習意見書の回収・取りまとめ、保険契約等

				の共有、そのほか研修や研究における連携もあり	
スクール・ソーシャルワーク実習	15	2	実習中 1 回以上	実習指導教員とメールや電話で随時連絡	実習謝礼の支払い、実習依頼状の作成・発行・発送、実習出勤簿の管理、実習意見書の回収・取りまとめ、実習旅費の執行、実習報告書の印刷発注・発送、実習日誌の印刷発注、等
心理実習	15	3	実習中 3 回	実習指導者とメールや電話で月 1 回連絡	実習謝礼の支払い、実習依頼状の作成・発行・発送、実習出勤簿の管理、実習意見書の回収・取りまとめ、保険契約等

本学域の各学類における演習科目の指導については、前身の大阪府立大学現代システム科学域知識情報システム学類、同環境システム学類、及び地域保健学域教育福祉学類における演習科目と同様、専任の教授、准教授、講師による指導を行う。演習科目については、担当教員の専門性に応じて、教員ごと、あるいは専門性の近い教員グループごとにクラス分けを行う。また、各教員の担当科目数を決定する際には、演習科目の担当についても考慮しており、各教員の負担を平準化している。

学外実習としては、以下の授業科目を開講する。

<教育福祉学類>

社会福祉士資格に関わる「社会福祉実習 1」「社会福祉実習 2」「社会福祉実習指導 1」「社会福祉実習指導 2」

保育士資格に関わる「保育実習 1A」「保育実習 1B」「保育実習 2」「保育実習指導 1A」「保育実習指導 1B」

スクール・ソーシャルワーカーに関わる「スクール・ソーシャルワーク実習」

<心理学類>

公認心理師資格に関わる「心理実習」

社会福祉士資格に関わる実習については、2021 年度より指定規則改正のため時間数が増加しているが、前身の大阪府立大学地域保健学域教育福祉学類において、既に時間数増加に対応した教員を割り当てている。これを承継した新大学における各科目への教員の割り当ては下記のとおりである。

社会福祉実習 1	専任教員 4 名（教授 2、准教授 2）
社会福祉実習 2	専任教員 8 名（教授 4、准教授 3、講師 1）
社会福祉実習指導 1	専任教員 4 名（教授 2、准教授 2）、兼任教員 3 名
社会福祉実習指導 2	専任教員 8 名（教授 4、准教授 3、講師 1）

担当者の専門分野は、専任教員のうち1名はジェンダー論、他の1名は教育社会学を専門としているが、他の専任教員及び兼任教員は全て社会福祉学を専門としている。ジェンダー論、教育社会学を専門とする教員についても、これまで福祉現場との関わりの中で研究を進めてきており、かつ大阪府立大学地域保健学域教育福祉学類において継続して実習科目を担当した経験を持つ。また、現場経験の豊富な兼任教員を担当者に加えることにより、円滑な学外実習を可能としている。

保育士資格に関わる科目について、新大学における各科目への教員の割り当ては下記のとおりである。

保育実習1A	専任教員1名（准教授1）
保育実習1B	専任教員1名（准教授1）
保育実習2	専任教員1名（准教授1）
保育実習指導1A	専任教員1名（准教授1）、兼任教員1名
保育実習指導1B	専任教員1名（准教授1）、兼任教員1名
保育実習指導2	専任教員1名（准教授1）、兼任教員1名

担当する専任教員（2名）はいずれも保育学を専門としており、前身の大阪府立大学地域保健学域教育福祉学類において継続して実習科目を担当した経験を持っており、現場との交流経験も豊富である。また、現場経験の豊富な兼任教員を担当者に加えることにより、円滑な学外実習を可能としている。1人が担当する授業の数は社会福祉士と比べて多くなっているが、想定する履修者数が10名と少なく（社会福祉士は40名）、他の科目担当も含めた形で負担は平準化されている。

スクール・ソーシャルワーカーに関わる科目について、新大学における各科目への教員の割り当ては下記のとおりである。

スクール・ソーシャルワーク実習 専任教員1名（教授1）、兼任教員1名

担当する専任教員（1名）はスクール・ソーシャルワークを専門としており、前身の大阪府立大学地域保健学域教育福祉学類において継続して実習科目を担当した経験を持っており、現場との交流経験も豊富である。また、現場経験の豊富な兼任教員を担当者に加えることにより、円滑な学外実習を可能としている。想定する履修者数は15名であり、他の科目担当も含めた形で負担は平準化されている。

公認心理師資格に関わる科目について、新大学における各科目への教員の割り当ては下記のとおりである。

心理実習 専任教員3名（准教授3）

担当する専任教員（3名）は、全員が公認心理師と臨床心理士の両方の資格を持ち、臨床現場の経験を有しており、前身の現代システム科学域環境システム学類人間環境科学課程において継続して実習科目を担当した経験を持つ。想定する履修者数は15名であり、他の科目担当も含めた形で負担は平準化されている。

以上から、演習、学外実習の全てについて教員 1 人あたりの負担、専門性のいずれの観点からも適切な指導を行うことができる体制を整えている。

なお、審査意見への対応を記載した書類（3 月）の全体計画審査意見 28 への回答における「本学域の完成年度における専任教員の構成は、教授 37、准教授 42、講師 3、助教 3」という文は誤りであり、正しくは「本学域の完成年度における専任教員の構成は、教授 37、准教授 43、講師 3、助教 2」である。助教 2 名はいずれも環境社会システム学類に配置され、自然科学系の演習、実験の授業を担当する。

（新旧対照表）現代システム科学域（共通） 審査意見への対応を記載した書類（3 月）

新	旧
（意見対応（3 月）（本文）-134 ページ） （対応） 本学域の完成年度における専任教員の構成は、教授 37、准教授 43、講師 3、助教 2 であり、情報系や理学実験系の教育課程や社会福祉士、保育士、公認心理師などの実習を含む教育課程をもつ学域としては、他大学よりも助教の配置数が少ない状態となっている。 （略）	（意見対応（3 月）（本文）-134 ページ） （対応） 本学域の完成年度における専任教員の構成は、教授 37、准教授 42、講師 3、助教 3 であり、情報系や理学実験系の教育課程や社会福祉士、保育士、心理師などの実習を含む教育課程をもつ学域としては、他大学よりも助教の配置数が少ない状態となっている。 （略）